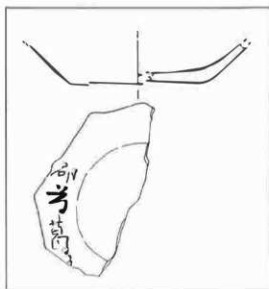


筑後市内遺跡群Ⅳ

福岡県筑後市大字鶴田、山ノ井所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第45集



羽大屋中遺跡（第2次調査）258（76出土）の透書土器

2002

筑後市教育委員会

筑後市内遺跡群Ⅳ

つるたなかいちのつち
鶴田中市ノ塚遺跡（第1～5次調査）

やまのいかわぐち
山ノ井川口遺跡

2002

筑後市教育委員会

序

現在の筑後市は、九州を縦断する高速道路や鉄道、市内の中心部で交差する国道209・442号が集まるなどの恵まれた交通網を基盤とした「まち」でありますが、このほど先学諸氏らの研究並びに発掘調査の成果によって、古代から交通の要所であったことが明らかになってきました。

10世紀前半に制定された「延喜式」には、現在の羽犬塚付近に設けられていたと想定される「葛野駅」の名が記載されており、九州の各地に点在していた国府を結ぶ幹線道路（西海道）が、市内を直線的に縦断していたとされています。西海道は、近世になると大幅なルートの変更とともに、宿場町（羽犬塚）や在郷町（一条・尾島）を貫通する旧街道（坊津街道）として受け継がれ、現在の国道209号線に至っている次第であります。

さて、本書は高速道路や鉄道、国道の前身とも捉えられる「西海道」に焦点をあてた関連遺跡の調査成果をまとめたものであります。本書が地域における文化財や歴史に対する認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査から整理報告に至るまで、多大なご協力を頂きました関係者並びに作業参加者の方々に深く感謝を申し上げます。

平成14年3月

筑後市教育委員会
教育長 牟田口和良

例 言

- 1.本書は、平成5～8・10年度に筑後市教育委員会が実施した鶴田中市ノ塚遺跡（第1～5次調査）、山ノ井川口遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2.発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行い、出土遺物・図面・写真などは筑後市教育委員会において所蔵・保管をしている。なお、発掘調査及び整理作業の関係者は「調査経過と組織」に記したとおりである。
- 3.調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としたため本書に示される方位はすべてG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の方位はこれを基準としたものである。また、水準はT.P.を基準としている。
- 4.本誌に使用した図面類のうち、遺構実測図の作成者は各章の「(1) はじめに」で記したとおりで、遺物実測図は平塚あけみ、江藤晴子、仲文恵、小林勇作が作成し、図版の捺書は平塚、仲、横井理絵が行った。
- 5.本書に使用した写真のうち、遺構の写真撮影は各章の「(1) はじめに」で記したとおりで、遺物の写真撮影は上村英士が行った。
- 6.本書に使用した遺構表示は下記の略号による。
SA—橋列状遺構 SB—掘立柱建物 SD—溝・側溝 SE—井戸 SF—道路状遺構
SK—土壌 SP—ピット SX—不明遺構
- 7.各調査における遺構番号は調査段階で使用した仮番号を生かし、遺構の種別記号（SB、SF等）の前に調査次数を冠することで、過去及び将来の同遺跡の調査における遺構番号との重複を避けた。従って、遺構の表記は下記のとおりである。
 (例) 第3次調査から確認された溝に対して10の仮番号を与えた場合・・・3SD010
- 8.本書の執筆・編集は小林が担当し、一部で上村、立石真二の協力を得た。

目 次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	3
III. 調査成果	5
1. 鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）	5
2. 鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）	43
3. 鶴田中市ノ塚遺跡（第3次調査）	69
4. 鶴田中市ノ塚遺跡（第4次調査）	93
5. 鶴田中市ノ塚遺跡（第5次調査）	107
6. 山ノ井川口遺跡	111
IV. まとめ	129

I. 調査経過と組織

今回報告する筑後市内選挙区Ⅳは、平成5～8・10年度に筑後市教育委員会が実施した鶴田中市ノ塚選挙区（第1～5次調査）、山ノ井川口選路の発掘調査成果をまとめたものである。発掘調査における調査経過、実施期間、調査面等等は各選路の「(1) はじめに」に記し、発掘調査において出土した遺物の整理と報告書作成については、随時、筑後市役所内にある文化財整理室で行った。以下は、報告する調査が多年度にまたがっているため、ここでは一括して調査並びに報告書作成に関する組織をあげる。

調査組織

- 1) 平成5年度調査体制（鶴田中市ノ塚選路 第1次調査）
- | | |
|----|---|
| 総括 | 森田 基之 |
| 庶務 | 橋本 益夫
下川 雅晴
松永盛四郎
水見 秀徳
小林 勇作
(調査担当) |
- 2) 平成6年度調査体制（鶴田中市ノ塚選路 第2次調査）
- | | |
|----|--|
| 総括 | 森田 基之
津留 忠義 |
| 庶務 | 下川 雅晴
松永盛四郎
水見 秀徳
小林 勇作
(調査担当) |
- 3) 平成7年度調査体制（鶴田中市ノ塚選路 第3次調査）
- | | |
|----|---|
| 総括 | 森田 基之
津留 忠義 |
| 庶務 | 下川 雅晴 (-H7.9.30)
山口 逸郎 (H7.10.1～)
木村 正晴
水見 秀徳
小林 勇作
(調査担当) |
- 4) 平成8年度調査体制（鶴田中市ノ塚選路 第4・5次調査）
- | | |
|----|--|
| 総括 | 森田 基之
津留 忠義 |
| 庶務 | 山口 逸郎
木村 正晴
水見 秀徳
小林 勇作
(調査担当) |
- 大島真一郎 (嘱託) [現：三瀬町教委]
大島真一郎 (嘱託) [H7.12.1～] [現：黒木町教委]

5) 平成10年度調査体制 (山ノ井川口遺跡)

総括	教育長	幸田口和良 (H10.4.7~)
	教育部長	下川 雅晴
庶務	社会教育課長	山口 逸郎
	社会教育係長	田中 清通
	社会教育係	水見 秀徳
		小林 勇作 (調査担当)
		田中 剛
		上村 英士
		柴田 剛 (嘱託)
		立石 真二 (嘱託)

6) 平成13年度報告書作成

総括	教育長	幸田口和良
	教育部長	下川 雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清 平和
	文化係	水見 秀徳
		小林 勇作 (調査担当)
		上村 英士
		柴田 剛 (嘱託)
		立石 真二 (嘱託)

7) 発掘調査参加者 (順不同、敬称略)

調査補助員	塚本映子・大島真一郎・野田洋子・永田佳子
発掘作業員	地元有志

8) 整理作業参加者 (順不同、敬称略)

整理補助員	平塚あけみ・江藤玲子・仲文恵
整理作業員	野間口靖子・江崎千鶴・馬場敦子・湊まど香・深川善子 野口晴香・湯川琴美・福田澄子・横井理絵・佐々木寿代

発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々にご指導、ご教示を賜ったので、記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

木下良 (古代交通研究会、日中古代道路研究所)、建部健一 (道路文化研究所)、山中敏史 (奈良国立文化財研究所)、木本雅康 (長崎外国語短期大学)、日野尚志・佐田茂 (以上、佐賀大学)、田中正日子 (第一経済大学)、平川南 (国立歴史民俗博物館兼総合研究大学院大学)、狄川真一 (元興寺文化財研究所)、伊崎俊秋・馬田稔・小田和利・小川泰樹 (以上、福岡県教育庁)、城戸康利・中島恒次郎・山村信業 (以上、太宰府市教育委員会)、松村一良・富永直樹・水原道範・白木守・小沢太郎、神保公久 (以上、久留米市教育委員会)、片岡宏二・柏原孝俊 (以上、小郡市教育委員会)、法村忠

II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿兒島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川川の矢部川、中央部には山ノ井川や北宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、瀬田川の溜池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。市域は県内有数の農業地帯であり、北部の庄園地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田圃地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川1遺跡は市域を縦断する国道209号線付近に分布する。

鶴田中市ノ塚遺跡は、市内の南端部に近い、標高12~13m位の低地に立地し、当遺跡周辺には多くの遺跡が点在する。その代表的な遺跡として、西方には「裏山遺跡（縄文-弥生時代にかけての集落跡）」、「筑紫遺跡（弥生時代終末-古墳時代前期の集落跡）」、「上北高平塚遺跡（弥生-古墳時代の集落跡）」、東方では「鶴田岸添遺跡（縄文時代の落とし穴や弥生時代終末期の竪穴式住居を確認）」、北方では「鶴田牛ヶ池遺跡（旧石器-弥生時代の複合遺跡）」等があげられる。更に、当遺跡が存在する大字尾島は、**藤政期街道（坊津街道）**筋に形成された久留米藩の在郷町（尾島町）として栄えていた地区で、現在もその一部を垣間みることができらる。

一方、山ノ井川口遺跡は、市内のほぼ中央部、標高13.5m位の扇状地性低地に立地する。当遺跡周辺に目を向けると、西方では「徳久中牟田遺跡（中世の流路を確認）」、北方では「羽犬塚中道遺跡（奈良時代の集落跡）」、「鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川口遺跡（奈良時代の集落跡）」等が点在する。

さて、鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川口遺跡からは古代道路である「西海道」跡が確認された。西海道は、古代律令期に大宰府を中心として九州の各国府を結んだとされ、幹線道路のことであり、この他、東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道がある。先学瀧氏らの研究によって、西海道は市域を通過することが想定され、古道跡を示唆する地名（小字等）や地割りや地形を参考とし、その特性からほぼ直線的に復原された（Fig.2）。市内で古道跡を示す地名としては、「大字一条字車地（A地点）」、「大字熊野字車路（B地点）」、「大字前津字車路（C地点）」が点在し、A-C地点間における地層上には、おいてはほぼ直線ラインを示し、この他、復原ライン付近には、横道・附横道・道山等の地名も見える。ところで、古代道路には30里（約16km）ごとに駅家が設けられていたとされ（『養老令』「置駅令」、10世紀前半に編纂された『延喜式』（巻二八兵部省式 諸国駅伝馬条）には、筑後国において御井駅・葛野駅・鞍道駅に各5疋の駅馬が配置されていたことが記載されている。三駅のひとつである葛野駅は、現在のとことろ大字羽犬塚字主ノマヤ、大字和泉付近に想定されている。

【参考文献】

- 『新山陽編』 筑後国編、筑後国史研究会 刊（1966）
- 『新山陽編』 筑後国史研究会 刊（1970）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1976）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1977）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1978）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1979）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1980）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1981）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1982）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1983）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1984）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1985）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1986）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1987）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1988）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1989）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1990）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1991）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1992）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1993）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1994）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1995）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1996）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1997）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1998）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（1999）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2000）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2001）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2002）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2003）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2004）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2005）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2006）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2007）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2008）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2009）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2010）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2011）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2012）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2013）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2014）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2015）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2016）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2017）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2018）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2019）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2020）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2021）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2022）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2023）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2024）
- 『筑後国史研究』 筑後国史研究会 刊（2025）



Fig.1 周辺道路分布図 (1/30,000)

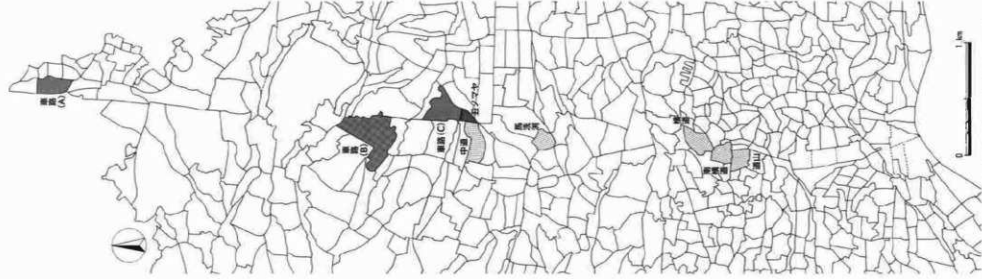


Fig.2 主要小字地名図 (1/30,000)

Ⅲ.調査成果

1.鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）

(1) はじめに (Fig.3)

当遺跡は筑後市大字鶴田字中市ノ塚413-1外に所在し、標高12m位の低位段丘上に立地する。開発事業者であるコガホームから宅地分譲予定地内における埋蔵文化財の取扱いについて照会された。市教委ではこれを受け、試掘調査を実施したところ予定地内全域から遺構や遺物を確認した。その後協議を行い、予定地内全域である2,253㎡において発掘調査を実施することで合意した。筑後市教育委員会は平成5年12月7日から平成6年3月16日まで発掘調査を実施し、この間、重機による表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影（空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託）等を行った。発掘調査は小林勇作が担当し、大島真一郎（現：黒木町教育委員会）、野田洋子の協力を得た。また、遺構の実測及び写真撮影は小林、大島、野田が担当した。調査の結果、調査区からは道路状遺構、柵列状遺構、掘立柱建物、井戸、溝、土坑等を検出した。ところで、当調査区は、整理段階において座標値にズレが生じていることが判明した。現段階においては現場での検証が困難であるため、遺構図は周辺地形図を参考として筑後市発行の地図（S=1:2500）上において補正した。従って、本文中に記載される方位等は全て補正後の座標を基準としている。



Fig.3 鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）調査地点位置図（1/2,500）

(2) 検出遺構

柵列状遺構

1SA400 (Fig.4)

調査区内北東部から検出した東西方向の柵列状遺構で、P1～P4（3間分：6.58m）を確認した。掘形は掘立柱建物と類似するためその可能性も捨て切れないが、周囲からは関連する遺構が認められなかったため柵列状遺構とした。平面プランはほぼ円形状を呈し、P1～P2間2.17m、P2～P3間2.23m、P3～P4間2.18mを測る。方位はN-5° 40' 09" -Wを示す。

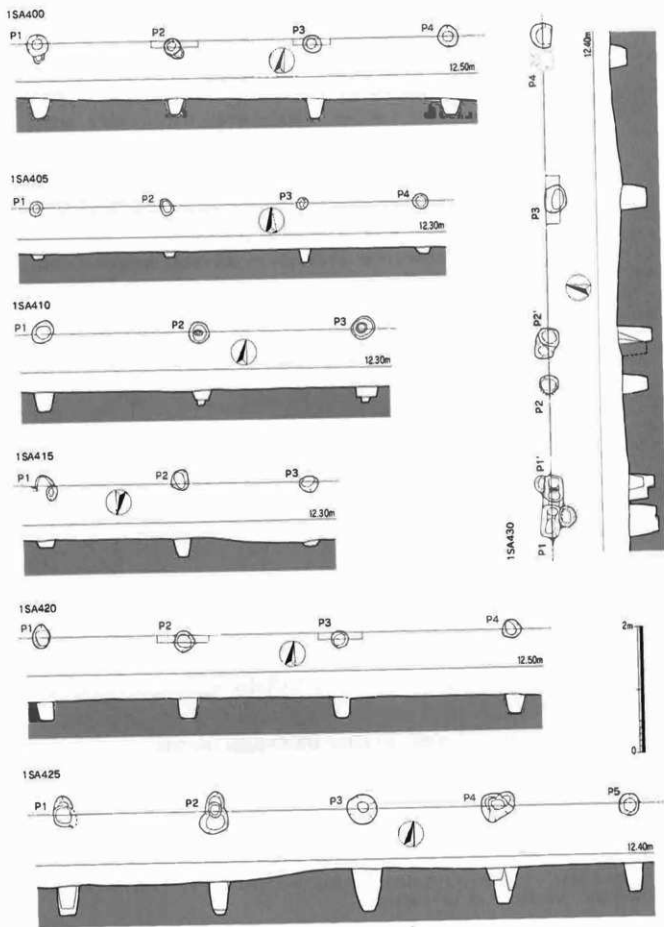


Fig.4 柵列状遺構実測図 (1/60)

1SA405 (Fig.4)

調査区内中央東よりで検出した東西方向の横列状遺構であるが、掘形は独立柱遺物と類似するためその可能性も捨て切れない。P1-P4 (3間分; 6.16m) を確認したが、著しく削平を受けており残存する遺構の深さは0.09~0.22mを測る。平面プランはほぼ円形を呈し、P1-P2間2.11m、P2-P3間2.13m、P3-P4間1.92mを測る。方位はN-2° 48' 45" -Wを示す。

1SA410 (Fig.4)

調査区内南東部で検出した東西方向の横列状遺構で、P1-P3 (2間分; 5.13m) を確認した。掘形は独立柱遺物と類似するためその可能性も捨て切れないが、周囲からは関連する遺構が認められなかった。平面プランはほぼ円形を呈し、P2-P3は底部に小ピットを認める。P1-P2間2.52m、P2-P3間2.61mを測る。方位はN-10° 51' 09" -Wを示す。

1SA415 (Fig.4)

調査区内南東部から検出した東西方向の横列状遺構で、P1-P3 (2間分; 4.23m) を確認した。掘形は独立柱遺物と類似するためその可能性も捨て切れないが、周囲からは関連する遺構が認められなかった。平面プランはほぼ円形を呈し、残存する遺構の深さは0.09~0.30m、P1-P2間2.18m、P2-P3間2.05mを測る。方位はN-2° 39' 17" -Eを示す。

1SA420 (Fig.4)

調査区内南東部から検出した東西方向の横列状遺構で、P1-P4 (3間分; 7.47m) を確認した。掘形は独立柱遺物と類似するためその可能性も捨て切れない。平面プランはほぼ円形を呈し、P1-P2間2.23m、P2-P3間2.48m、P3-P4間2.76mを測る。方位はN-9° 52' 54" -Wを示す。

1SA425 (Fig.4)

調査区内北西部から検出した東西方向の横列状遺構で、P1-P5 (4間分; 9.18m) を確認した。掘形は独立柱遺物と類似するためその可能性も捨て切れないが、周囲からは関連する遺構が認められなかった。平面プランはほぼ円形を呈し、P1-P2間2.45m、P2-P3間2.37m、P3-P4間2.16m、P4-P5間2.10mを測る。方位はN-11° 58' 46" -Wを示す。

1SA430 (Fig.4)

調査区内中央西よりで検出した東西方向の横列状遺構であるが、周囲には独立柱遺物の柱穴が密集している。その可能性も捨てきれない。掘形はP1及びP1はいわゆる布張りになっており、その他の平面プランはほぼ円形を呈する。遺構はある程度の削平を受けていると思われるが、非常に残存が良く残存する遺構の深さは0.27~0.54mを測る。P1-P2間2.20m、P1-P2間2.32m、P2-P3間2.05m、P2-P3間2.18m、P3-P4間2.23mを測り、方位はN-13° 12' 49" -Wを示す。

独立柱遺物

1SB200 (Fig.5)

調査区内北端で検出した東西棟の独立柱遺物でP1-P7を確認した。遺構の規模はP1-P6までの東西4間×南北1間以上とP1-P4-P7の東西2間×南北1間以上等が想定される。柱穴の平面プランは不整円形または楕円形を呈するもので、残存する遺構の深さは0.39~0.57mと残存状況は良い。柱間はP1-P2間3.08m、P2-P3間2.13m、P3-P4間2.75m、P4-P5間2.70m、P5-P6間2.74m、P4-P7間2.56mを測り南北軸はN-13° 04' 43" -Wの方位を示す。

1SB205 (Fig.6)

調査区内北端で検出した東西棟の独立柱遺物で、柱穴 (P1-P9) の平面プランは不整円形を呈する。柱穴は覆瓦によって著しく削平を受けており、残存する遺構の深さは0.15~0.32mである。遺物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はd-a間6.98m、c-e間6.94m、南北柱間はb-b間3.88m、d-d間4.09m、遺物面積27.18㎡ (≒8.23坪) で、南北軸はN-13° 04' 43" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間4.09m、P2-P3間2.53m、P3-P4間2.26m、P4-P5間2.11m、P5-P6間3.88m、P6-P7間2.21m、P7-P8間3.37m、P8-P9間2.36mを測る。P5-P8においてはほぼ同等の柱穴が隣接して2穴確認さ

れており、少なくとも1回以上の修復等がされている可能性が考えられる。

1SB210 (Fig.6)

調査区内北部で検出した東西棟の掘立柱建物で、柱穴（P1～P6）の平面プランはほぼ円形状を呈する。柱穴は擾乱によって著しく削平を受けており、2箇所において柱穴を確認することができなかった。残存する遺構の深さは0.04～0.32mである。建物の規模は東西3間×南北1間が想定され、東西柱間はa—a'間5.92m、南北柱間はb—b'間3.60m、建物面積21.18㎡（≒6.41坪）で、南北軸はN—10°07'51"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間2.21m、P3—P4間3.60m、P4—P5間2.11m、P5—P6間1.70mを測る。

1SB215 (Fig.7)

調査区内北部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴（P1～P8）の平面プランは不整形円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.17～0.45mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—a'間4.86m、c—c'間4.66m、南北柱間はb—b'間3.07m、d—d'間3.13m、建物面積14.68㎡（≒4.40坪）で、南北軸はN—11°31'44"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間3.13m、P2—P3間1.68m、P3—P4間1.52m、P4—P5間1.66m、P5—P6間3.07m、P6—P7間1.57m、P7—P8間1.53m、P8—P1間1.56mを測る。

1SB220 (Fig.7)

調査区内北部西よりで検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴（P1～P10）の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.12～0.56mを測る。建物の規模は東西3間×南北2間で、東西柱間はa—a'間5.97m、c—c'間5.97m、南北柱間はb—b'間4.25m、d—d'間3.98m、建物面積24.05㎡（≒7.22坪）で南北軸はN—11°05'21"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間2.12m、P2—P3間1.86m、P3—P4間2.03m、P4—P5間1.96m、P5—P6間1.98m、P6—P7間2.20m、P7—P8間2.05m、P8—P9間2.01m、P9—P10間1.90m、P10—P1間2.06mを測る。P7・P8においてはほぼ同等の柱穴が隣接して2穴確認されており少なくとも1回以上の修復等がされている可能性が考えられる。

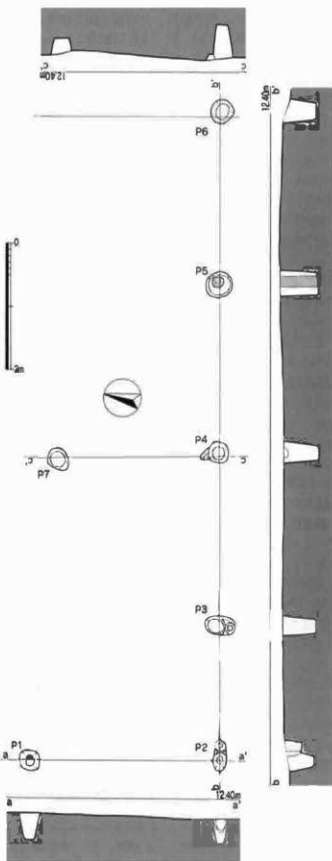


Fig.5 1SB220実測図（1/60）

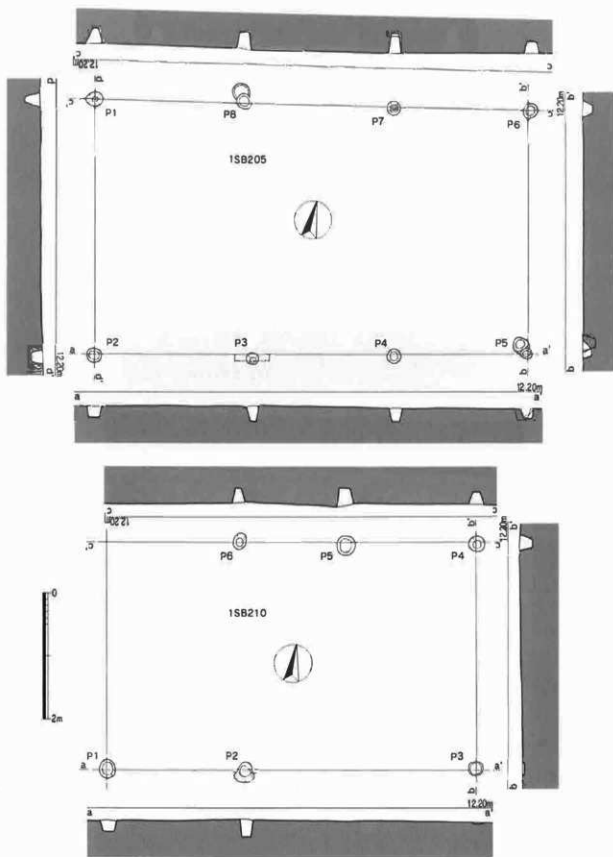


Fig.6 1SB205·210實測圖 (1/60)

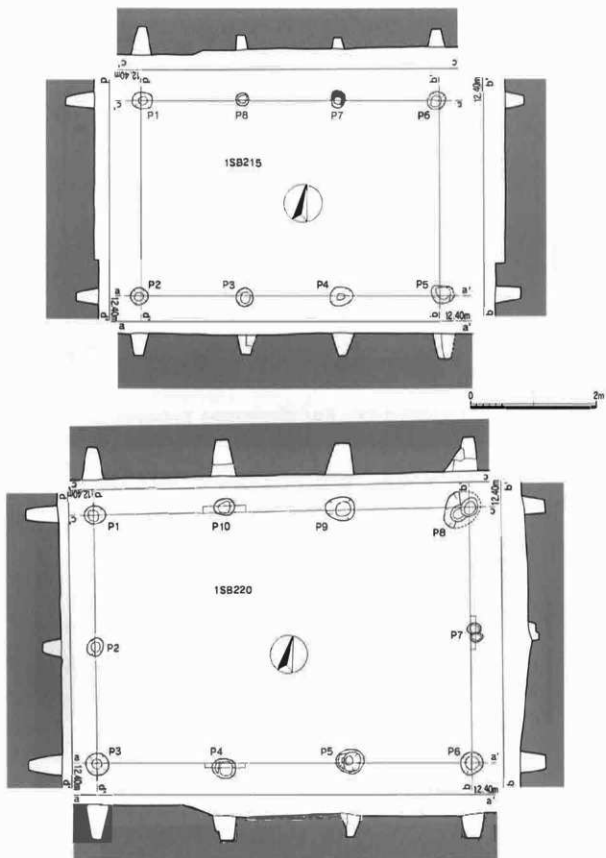


Fig.7 1SB215・220実測図 (1/60)

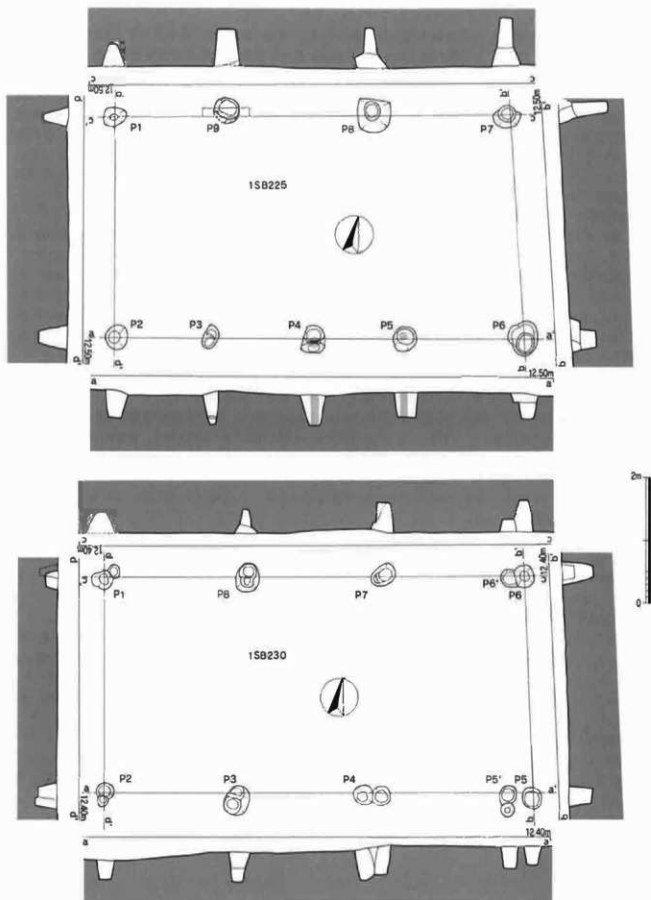


Fig.8 1SB225・230実測図 (1/60)

1SB225 (Fig.8)

調査区内北部で検出し、東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1~P9) の平面プランは円形または楕円形状を呈し、1 残存する遺構の深さは0.41~0.77mを測る。建物の規模は東西東軸4間・南北東西軸3間×南北1間で、東西柱間はa-a'間6.56m、c-c'間6.25m、南北柱間はb-b'間3.56m、d-d'間3.48m、建物面積23.16㎡ (±6.95坪) で、南北軸はN-13° 21' 49" -Wの方位を示す。各柱穴間はP1~P2間3.48m、P2~P3間1.55m、P3~P4間1.63m、P4~P5間1.41m、P5~P6間1.97m、P6~P7間3.56m、P7~P8間2.18m、P8~P9間2.26m、P9~P1間1.81mを測り、特殊な構造を呈した建物であることがわかる。柱穴間において一見するとP2~P3間・P3~P4間に比べ、P4~P5間はやや狭く、P5~P6間はやや広くなっていることに気付くが、残念ながら現地での検証ができていない。P4は径0.15m前後、P5は径0.13m前後の柱痕跡がほぼ中央から確認されている。

1SB230 (Fig.8)

調査区内北西部より検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1~P8) の平面プランは円形または楕円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.20~0.52mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa-a'間6.78m、c-c'間6.72m、南北柱間はb-b'間3.57m、d-d'間3.35m、建物面積24.34㎡ (±7.30坪) で、南北軸はN-10° 53' 02" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1~P2間3.35m、P2~P3間2.11m、P3~P4間2.01m、P4~P5間2.65m、P5~P6間3.57m、P6~P7間2.23m、P7~P8間2.21m、P8~P1間2.28mを測る。P1~P3・P6・P8からは2穴、P4からは3穴、P4からは4穴のほぼ同等の柱穴が隣接して確認されており、幾度の修復等が施されている可能性が考えられる。

1SB235 (Fig.9)

調査区内北西部より検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1~P8) の平面プランは円形または楕円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.46~0.63mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa-a'間6.16m、c-c'間6.30m、南北柱間はb-b'間3.20m、d-d'間3.10m、建物面積20.26㎡ (±6.08坪) で、南北軸はN-10° 09' 17" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1~P2間3.10m、P2~P3間2.11m、P3~P4間1.92m、P4~P5間2.13m、P5~P6間3.20m、P6~P7間2.17m、P7~P8間2.03m、P8~P1間2.10mを測る。P6~8では径0.12m前後の柱痕跡が確認されたが、土層断面では確認していない。

1SB240 (Fig.9)

調査区内北西部より検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1~P4) の平面プランは楕円形状を呈し、1 残存する遺構の深さは0.27~0.57mを測る。建物の規模は東西1間×南北1間で、P1~P2間2.95m、P2~P3間4.38m、P3~P4間2.94m、P4~P1間4.22mと南北よりも東西の柱穴間が広くなっている。建物面積12.40㎡ (±3.72坪) で、南北軸はN-13° 36' 44" -Wの方位を示す。

1SB245 (Fig.10)

調査区内ほぼ中央で検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1~P6) の平面プランはほぼ円形形状を呈し、残存する遺構の深さは0.19~0.38mを測る。建物の規模は東西2間×南北1間で、東西柱間はa-a'間4.51m、c-c'間4.36m、南北柱間はb-b'間3.70m、d-d'間3.86m、建物面積16.86㎡ (±5.06坪) で、南北軸はN-9° 14' 42" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1~P2間3.86m、P2~P3間2.41m、P3~P4間2.0m、P4~P5間3.70m、P5~6間2.15m、P6~P1間21.1mを測る。

1SB250 (Fig.10)

調査区内中央西より検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1~P6) の平面プランはほぼ円形形状を呈し、著しく陥平を受けているため残存する遺構の深さは0.08~0.23mと浅い。建物の規模は東西2間×南北1間で、楕円形であるa-a'間・c-c'間は4.07m、南北柱間はb-b'間2.93m、d-d'間2.97mとほぼ等間である。建物面積11.82㎡ (±3.54坪) で、南北軸はN-7° 55' 27" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1~P2間2.97m、P2~P3間2.21m、P3~P4間1.86m、P4~P5間2.93m、P5~P6間1.99m、P6~P1間2.08mを測る。

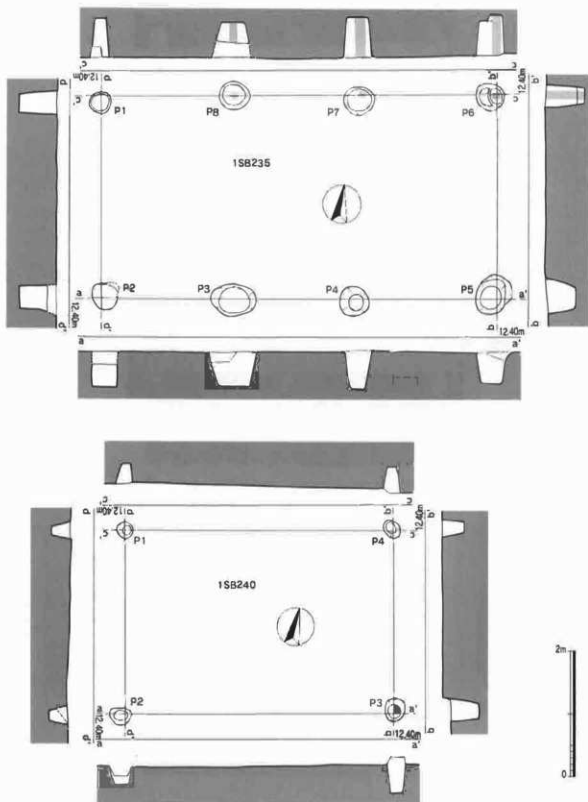


Fig.9 1SB235・240実測図 (1/60)

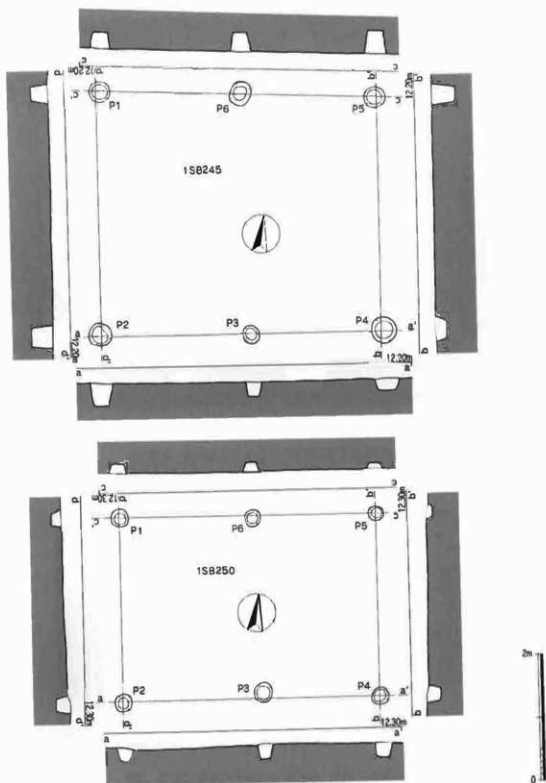


Fig.10 1SB245・250実測図 (1/60)

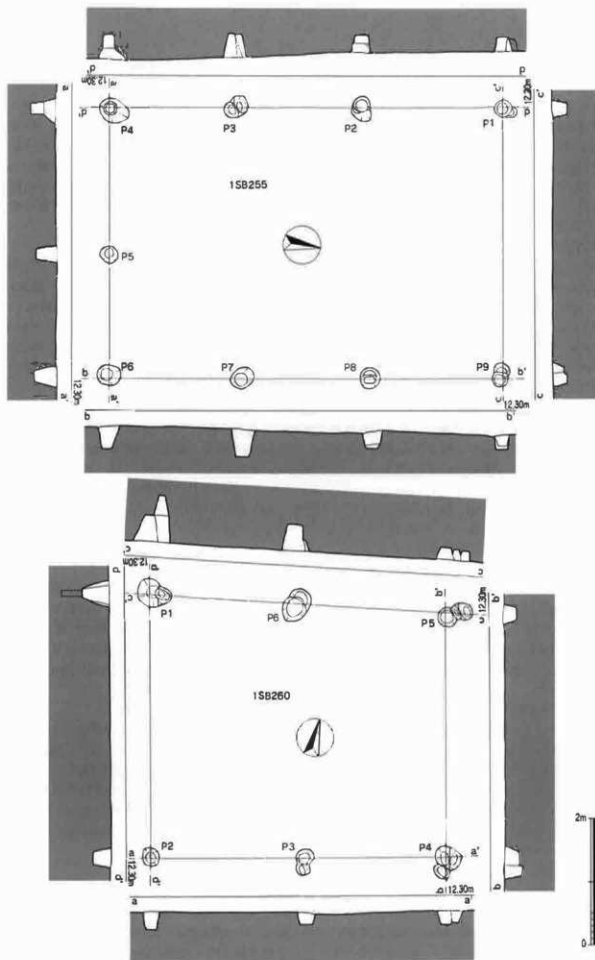


Fig.11 1SB255・260実測図 (1/60)

1SB255 (Fig.11)

調査区内中央の西より検出した南北棟の独立柱建物である。柱穴(P1-P9)の平面プランは円形柱または楕円形柱を呈し、残存する遺構の深さは0.22~0.40mを測る。建物の規模は南側東西棟2間・北側東西棟1間×南北3間で、東西柱間はa-a間4.24m、c-c間4.29m、南北柱間はb-b間6.28m、d-d間6.26m、建物面積26.83㎡(≒8.06坪)で、南北軸はN-9°55'28"-Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.25m、P2-P3間2.07m、P3-P4間2.33m、P4-P5間2.33m、P5-P6間1.91m、P6-P7間2.15m、P7-P8間2.07m、P8-P9間2.06m、P9-P10間4.29mを測る。建物の東西軸において柱穴数が異なった建物である。遺構は若干の削平を受けてはいるものの現状状況は良い方で、素直な見解としては特殊な構造を呈した建物と考えたいが、残念ながら現地での検証はできていない。

1SB260 (Fig.11)

調査区内中央の西より検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P1-P6)の平面プランは円形柱または楕円形柱を呈し、残存する遺構の深さは0.20~0.75mを測る。建物の規模は東西2間×南北1間で、東西柱間はa-a間4.08m、c-c間4.74m、南北柱間はb-b間3.86m、d-d間4.19m、建物面積18.83㎡(≒5.65坪)で、南北軸はN-18°35'07"-Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間4.19m、P2-P3間2.46m、P3-P4間2.22m、P4-P5間3.86m、P5-P6間2.41m、P6-P7間2.35mを測る。P1・P3・P6では2穴、P4・P5では3穴のほぼ同等の柱穴が隣接して確認されており、1~2回以上の修復等が施されている可能性がある。

1SB265 (Fig.12)

調査区内中央の西より検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P1-P8)の平面プランは円形柱または楕円形柱を呈し、残存する遺構の深さは0.33~0.53mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa-a間5.89m、c-c間5.84m、南北柱間はb-b間3.34m、d-d間3.16m、建物面積18.75㎡(≒5.63坪)で、南北軸はN-9°48'14"-Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間3.16m、P2-P3間1.84m、P3-P4間2.01m、P4-P5間0.44m、P5-P6間3.34m、P6-P7間1.83m、P7-P8間2.01m、P8-P9間2.01mを測る。P2・P6~8ではほぼ同等の柱穴が隣接して確認されており、少なくとも1回以上の修復等が施されている可能性があると考えられる。

1SB270 (Fig.12)

調査区内中央の西より検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P2-P8)の平面プランは円形柱または楕円形柱を呈し、残存する遺構の深さは0.33~0.48mを測る。P1は残念ながら擾乱を受けていたため不明である。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa-a間6.41m、南北柱間はb-b間3.98m、建物面積は推定で26.42㎡(≒7.93坪)で、南北軸はN-8°30'53"-Wの方位を示す。更に各柱穴間はP2-P3間2.19m、P3-P4間2.08m、P4-P5間2.14m、P5-P6間3.98m、P6-P7間2.28m、P7-P8間1.91mを測る。

1SB275 (Fig.13)

調査区内中央の西より検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P1-P10)の平面プランは円形柱または楕円形柱を呈し、残存する遺構の深さは0.26~0.52mを測る。P2は東部時において擾乱跡と認識し、残念ながら上場ライソンのみの実測に止まっている。建物の規模は東西4間×南北1間で、東西柱間はa-a間8.38m、c-c間8.38m、南北柱間はb-b間4.57m、d-d間5.21m、建物面積は推定で33.95㎡(≒10.79坪)で、南北軸はN-7°27'09"-Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間4.21m、P2-P3間2.11m、P3-P4間2.01m、P4-P5間1.98m、P5-P6間2.36m、P6-P7間4.57m、P7-P8間2.41m、P8-P9間1.85m、P9-P10間1.92m、P10-P11間2.12mを測る。

1SB280 (Fig.14)

調査区内中央の西より検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P1-P8)の平面プランは不整円形柱を呈し、残存する遺構の深さは0.32~0.73mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa-a間6.28m、c-c間6.14m、南北柱間はb-b間4.64m、d-d間4.65m、建物面積27.80㎡(≒8.34坪)で、南北軸はN-9°30'53"-Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間4.65m、P2-P3間2.23m、P3

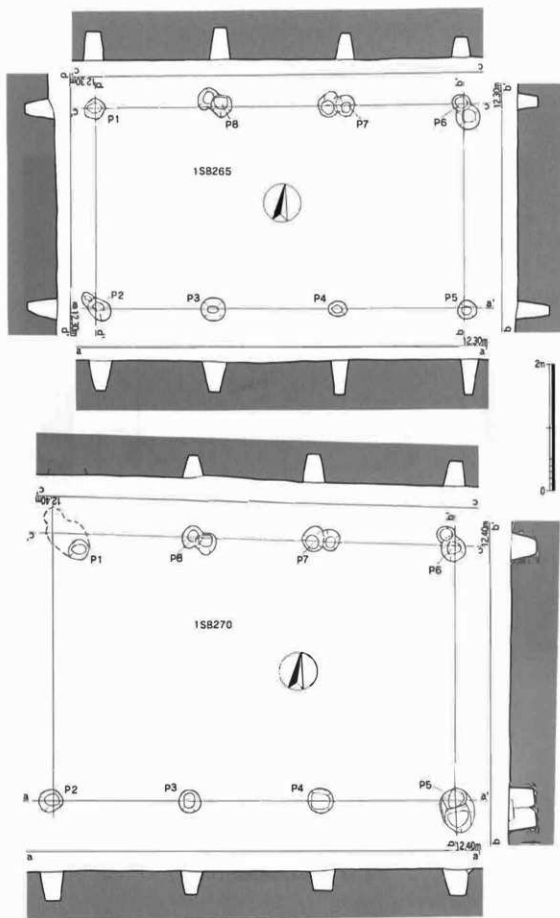


Fig.12 1SB265・270実測図 (1/60)

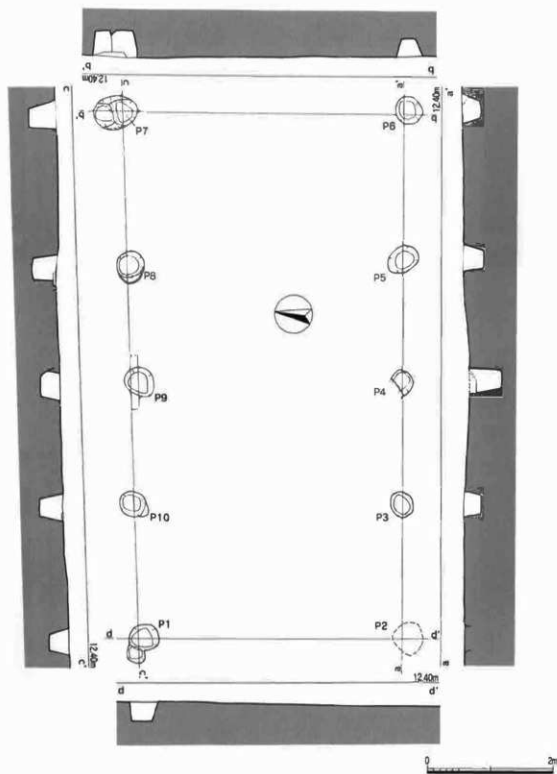


Fig.13 1SB275実測図 (1/60)

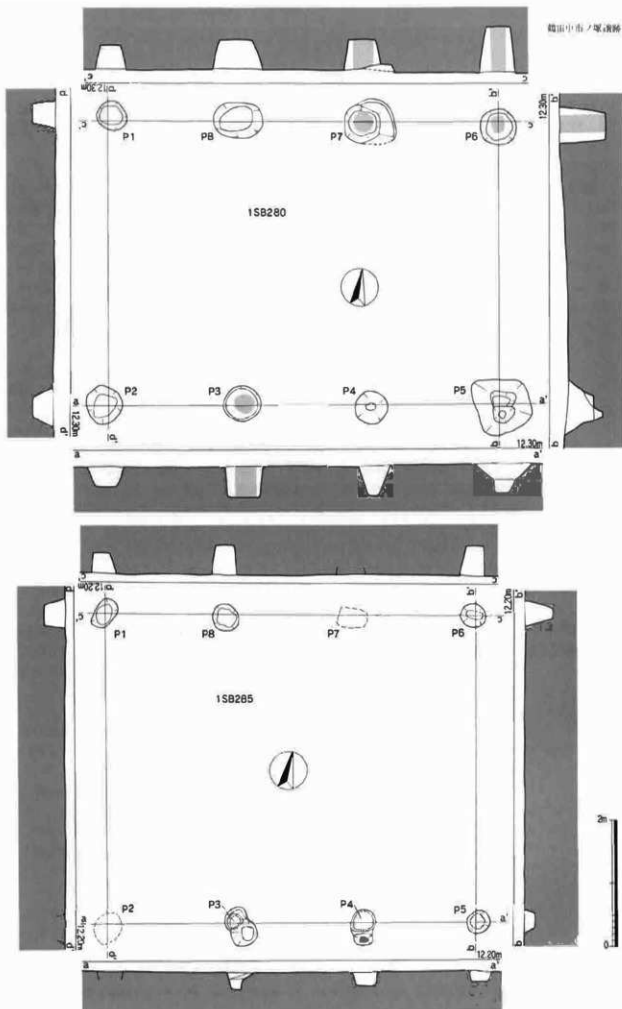


Fig.14 1SB280・285実測図 (1/60)

—P4間2.02m, P4—P5間2.03m, P5—P6間4.64m, P6—P7間2.14m, P7—P8間2.00m, P8—P1間2.00mを測る。柱穴P3・6・7においてはほぼ中央部から径0.25～0.33m前後の柱抜き取りと思われる縦溝を平面で確認したが、残念ながら土層断面では確認できていない。

1SB285 (Fig.14)

調査区内中央の南より検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴(P1—P8)の平面プランは円形。柱または楕円形形状を呈し、遺物の深さは0.13～0.48mを測る。P2・7は実測値において掘立柱と認識し、残念ながら上場ラインのみの実測に上まっている。建物の規模は東西2間×南北2間で、東西柱間はa—a'間5.91m, c—c'間5.96m, 南北柱間はb—b'間4.86m, d—d'間5.00m, 建物面積は推定で28.56㎡(≒8.57坪)で、南北軸はN—12°51'17"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間0.00m, P2—P3間2.02m, P3—P4間2.07m, P4—P5間1.82m, P5—P6間4.86m, P6—P7間2.00m, P7—P8間2.02m, P8—P1間1.94mを測る。P3・4ではほぼ同等の柱穴2穴が隣接して確認されており、少なくとも1回以上の修復等が施されている可能性がある。

1SB290 (Fig.15)

調査区内中央の南より検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴(P1—P10)の平面プランはほぼ円形形状を呈し、残存する遺物の深さは0.22～0.56mを測る。建物の規模は東西3間×南北2間で、東西柱間はa—a'間6.01m, c—c'間6.08m, 南北柱間はb—b'間3.85m, d—d'間4.16m, 建物面積は24.30㎡(≒7.29坪)で、南北軸はN—6°05'19"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間2.08m, P2—P3間2.08m, P3—P4間2.00m, P4—P5間2.01m, P5—P6間2.00m, P6—P7間2.01m, P7—P8間1.84m, P8—P9間2.07m, P9—P10間1.97m, P10—P1間2.04mを測る。柱穴P4—6・7・10は3つはほぼ中央部から径0.11～0.16m前後の柱抜き取りで確認したが、柱抜き取り痕の可能性も考えておきたい。P6においては残念ながら土層断面では確認できていないが、他の土層断面からは柱穴底面に砂ないしは粘土が敷かれていることが特徴として見える。

1SB295 (Fig.15)

調査区内南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴(P1—P8)の平面プランは楕円形形状を呈し、残存する遺物の深さは0.09～0.30mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—a'間5.05m, c—c'間5.17m, 南北柱間はb—b'間3.60m, d—d'間3.64m, 建物面積は推定で18.45㎡(≒5.54坪)で、南北軸はN—11°59'41"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間3.64m, P2—P3間1.70m, P3—P4間1.73m, P4—P5間1.62m, P5—P6間3.60m, P6—P7間1.86m, P7—P8間1.68m, P8—P1間1.63mを測る。P1・6ではほぼ同等の柱穴2穴が隣接して確認されており、少なくとも1回以上の修復等が施されている可能性がある。

1SB300 (Fig.16)

調査区内南西部で検出した円形柱建物である。柱穴(P1—P8)の平面プランはほぼ円形形状を呈し、残存する遺物の深さは0.26～0.40mを測る。建物の規模は東西2間×南北2間で、東西柱間はa—a'間3.80m, c—c'間3.90m, 南北柱間はb—b'間3.85m, d—d'間3.82m, 建物面積は14.74㎡(≒4.42坪)で、南北軸はN—9°27'18"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間1.90m, P2—P3間0.92m, P3—P4間1.83m, P4—P5間2.03m, P5—P6間1.85m, P6—P7間2.00m, P7—P8間2.00m, P8—P1間1.90mを測る。柱穴P1～3・P6～8においてはほぼ中央部から径0.10～0.18m前後の柱抜き痕を平面で確認したが、P4・5においては残念ながら確認をすることができなかった。柱抜き取り痕の可能性もあり、土層断面からは柱穴底面に粘土が敷かれていることが特徴として見える。

1SB305 (Fig.16)

調査区内南西部で検出した掘立柱建物である。柱穴(P1—P8)の平面プランはほぼ円形形状を呈し、残存する遺物の深さは0.45～0.64mを測る。建物の規模は東西2間×南北2間で、東西柱間はa—a'間3.60m, c—c'間3.71m, 南北柱間はb—b'間3.76m, d—d'間3.75m, 建物面積は14.84㎡(≒4.45坪)で、南北軸はN—6°05'19"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間1.85m, P2—P3間1.90m, P3—P4間1.83m, P4—P5間1.86m, P5—P6間1.83m, P6—P7間1.93m, P7—P8間1.82m, P8—P1間1.89mを測る。柱穴P2・P4～P2・P8

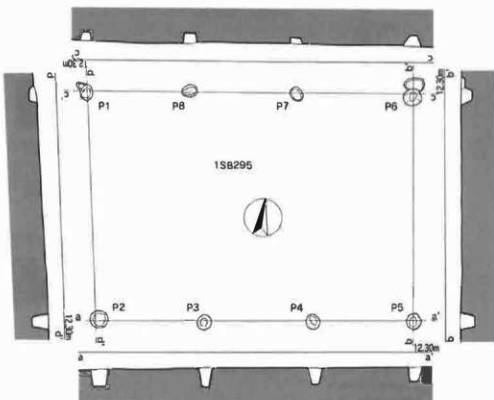
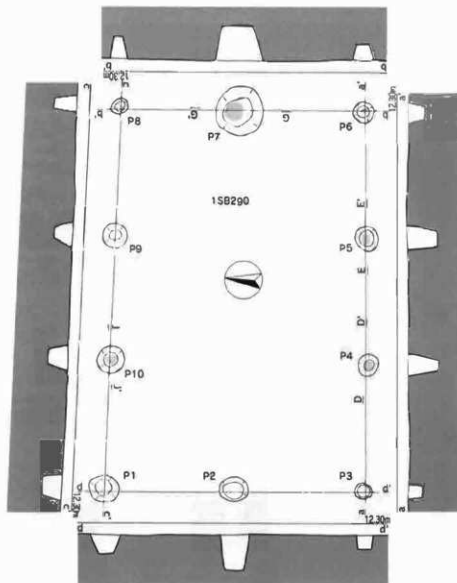


Fig.15 1SB290・295実測図 (1/60)

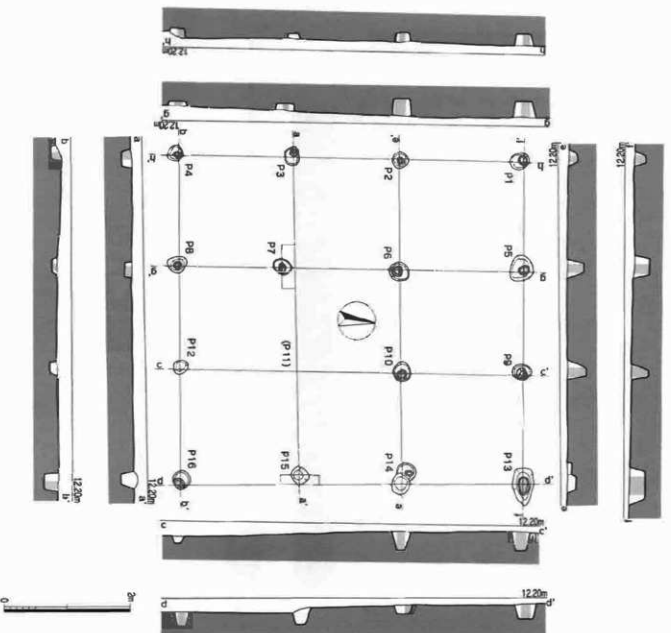


Fig.17 1SB310実測図 (1/60)

においてはほぼ中央部から径0.15～0.27m前後の柱束跡若しくは抜き取り痕を平面で確認した。土層断面からは柱穴断面に砂ないしは粘土が敷かれていることが特徴として復元る。

1SB310 (Fig.17)

調査区内南部東より検出した鹿柱の掘立柱建物である。柱穴 (P1～P10・P12～P16) の平面プランは円形または楕円形状を呈し、著しく倒平を受けているため残存する遺跡の深さは0.06～0.31mと浅く、P11は遺構を確認することができていない。建物の規模は東西3間×南北3間で、東西柱間はb-b'間5.24m、f-f'間5.21m、南北柱間はd-d'間5.40m、h-h'間5.51m、建物面積は28.31㎡ (約8.50坪) で、南北軸はN-7° 12' 42" -Wの方位を示す。更に各柱穴間は1.61～1.98mを測り、柱穴P1～10・13・14・

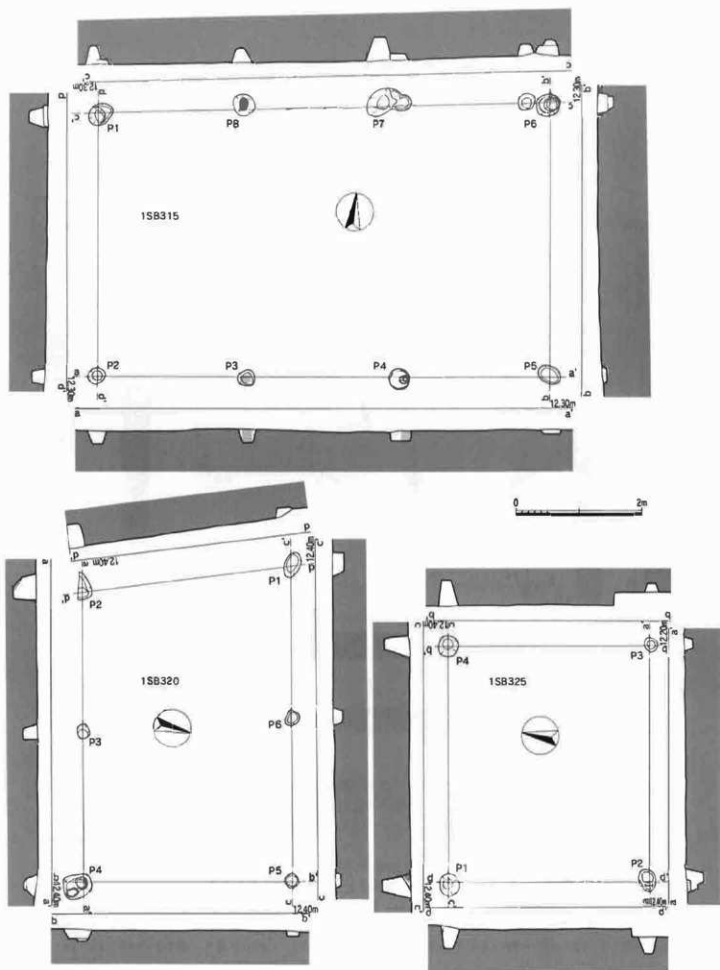


Fig.18 15B315・320・325美測図 (1/60)

161)においてはほぼ中央部から径0.12m前後の柱痕跡ないしは柱抜き痕を平面で確認することができたが、残存状況が悪かったことから土層断面では確認できていない。

1S8315 (Fig.18)

調査区内南部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴 (P1-P8) の平面プランは楕円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.07~0.38mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間隔はa-b間7.23m、c-e間2.28m、南北柱間隔はb-b'間4.32m、d-d'間4.12m、建物面積は30.50㎡ (49.75坪) で、南北軸はN-8° 41' 28" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間4.12m、P2-P3間2.39m、P3-P4間2.53m、P4-P5間2.31m、P5-P6間4.32m、P6-P7間2.72m、P7-P8間2.23m、P8-P1間2.33mを測る。P6・7ではほぼ同等の柱穴2つが隣接して確認されており、少なくとも1回以上の修復事が施されている可能性がある。また柱穴P3・4においてはほぼ中央部から径0.15~0.20m前後の柱痕跡を確認した。

1S8320 (Fig.18)

調査区内南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴 (P1-P6) の平面プランは楕円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.0~0.36mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間と推測され、東西柱間隔はa-a'間4.61m、c-c'間5.06m、南北柱間隔はb-b'間3.23m、d-d'間3.36m、建物面積は推定で15.81㎡ (49.47坪) で、南北軸はN-14° 50' 05" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間3.36m、P2-P3間2.21m、P3-P4間2.40m、P4-P5間3.23m、P5-P6間2.61m、P6-P1間2.45mを測る。

1S8325 (Fig.18)

調査区内中央の西よりで検出した掘立柱建物である。柱穴 (P1-P4) の平面プランは円形状または楕円形状。見、残存する遺構の深さは0.15~0.45mを測る。建物の規模は東西1間×南北1間で、各柱穴間はP1-P2間3.21m、P2-P3間3.70m、P3-P4間3.25m、P4-P1間3.80mを測る。建物面積は11.90㎡ (49.37坪) で、南北軸はN-10° 29' 14" -Wの方位を示す。

溝

1SD010 (Fig.19)

調査区のほぼ中央を東西方向にはしる溝で約25cmを検出した。溝の断面形は緩やかなU字状を呈し、上幅1.10m前後、下幅0.55m前後、残存する溝の深さは0.30m前後を測る。埋土は涼黒茶色砂質土を基調とする3層に分層でき、レンズ状に崩壊していた。溝からの出土遺物は僅かに土師器 (埴) 1点のみであった。

井戸

1SE020 (Fig.20)

調査区内南東よりで確認したほぼ円形状を呈する素掘りの井戸である。東西軸1.77m、南北軸1.14mを測り、遺構検出面から約1mまで掘り下げた。掘削までの出土遺物は認められなかった。

1SE030 (Fig.20, Pla.2)

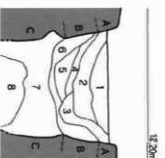
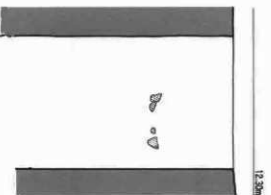
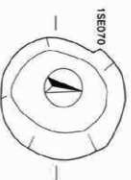
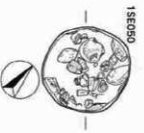
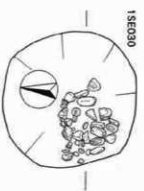
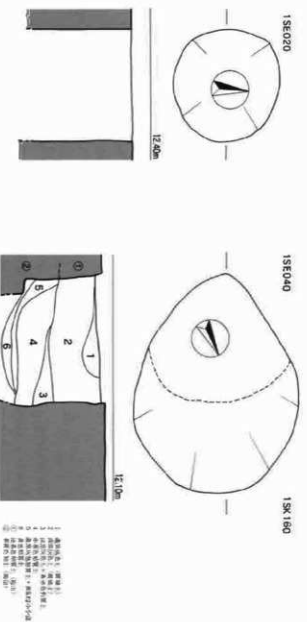
調査区内中央東よりで確認した楕円形状を呈する素掘りの井戸で、東西軸1.41m、南北軸1.43mを測る。黒色土を基調とした埋土で、危険防止のための遺構検出面から約2.2mで掘り下げを断念している。深さ0.75m付近で集石を確認し、集石の大半は0.10~0.20m程度の河原石に似たもので一気(1)に投下されたものと判断する。出土遺物は須恵器 (甗鉢)、土師器 (穴鉢・罎)、埴器 (常津底甕)、石製品 (埴白) 等が認められており、下限の参考となる。

1SE040 (Fig.20, Pla.2)

調査区内中央やや東よりで確認した不整形形状を呈する素掘り井戸である。遺構は35K160を切るように検出され、幅1.5m程度を測る。黒灰色土を基調とした埋土で、危険防止のため約1mで掘り下げを断念している。出土遺物は須恵器 (甗鉢)、土師器 (甗鉢)、埴器 (片) 等が認められている。



Fig.19 1SD010溝断面図 (1/40)



- 1 黒色土 (埋戻土)
- 2 赤褐色土 (埋戻土)
- 3 赤褐色土 (埋戻土)
- 4 赤褐色土 (埋戻土)
- 5 赤褐色土 (埋戻土)
- 6 赤褐色土 (埋戻土)
- 7 赤褐色土 (埋戻土)

Fig. 20 井戸実測図 (1/40)

1SE050 (Fig. 20, Plan 3)

調査区内中央東よりで確認したほぼ円形状を呈する素掘りの井戸で、径0.93m前後を測る。黒色土を基層とした埋土で、危険防止のため遺構検出面から約1.7mで掘り下げを断念している。深さ0.70m及び1.40m付近では集石を確認し、集石の大半は0.05～0.30m程度の河原石に似たもので一気に投下されたも

のと判断する。出土遺物は須恵器(Ⅱ)、土師器(Ⅱ)、陶磁器(片)等が認められており、下層の参考となる。

1SE060 (Fig.22)

調査区内北部の東よりで確認した不整円形状を呈する土器断りの井戸である。遺構はISK105を切るように検出されたが、期別当初は擾乱と認識していたため、土層断面を確認できていない。推定される井戸の幅は1.55m前後で、深さは遺構検出面から2.40m前後と思われる。出土遺物は土師器(簡鉢)等が認められた。

1SE070 (Fig.20, Pl.3)

調査区内北部の東よりで確認したほぼ円形状を呈する素掘りの井戸である。径1.25m前後を測り、廃除止のため遺構検出面から約1.15mで掘り下げを断念している。土層断面では黒茶色砂質土を基調とした果上で、上段から深さ約0.70m付近までには左右から積み重なるように堆積している。一見すると他でえられる井戸の堆積状況と同等のものであるが、ここで気になる点は井戸を構成する地山である。地山は淡黄茶色粘質土を基調とし、たものであるが、上段から約0.25m付近の深さでは荒目砂を含み、更に深さ約0.60m付近では荒目砂の量が増していることで井戸壁の崩落を招いている。当時の木製レベルがどこであったかまでは判別できていないが、参考資料として提示できるものである。出土遺物は皆無であった。

遺跡状況

遺跡状況等を説明するにあたっては、まず遺跡状況欄に付設する遺構(細溝・踏面等の状況)について先述する。

西側側溝

1SD129 (Fig.21, Pl.1-4)

当溝は西側側溝3条の内の西溝にあたる。溝の北端は擾乱を受けているため一旦は終息するが再度北端では溝の痕跡を僅かに検出し、南端は調査区外へ延びていくと思われる。長さ約11.55m分を測定し、上幅0.60~0.65m、下幅0.23~0.38m、残存する溝の深さ0.16~0.19mを測る。溝の断面は緩やかなU字状を呈し、上段は上層から淡黒灰色土・濃黒色土(硬化面①)・黒灰色土・灰色土(黄色粒子多混)となる。淡黒色土の硬化土は断面が凹状を呈した幅約0.30m前後、厚さ0.05m前後を測るもので、当溝にはほぼ沿うように検出された。出土遺物は須恵器(片)、土師器(皿・穴鉢・土鍋・壺・片瓦、石製品(五輪塔火輪・鏡白))を認めている。

1SD130 (Fig.21, Pl.1-4)

当溝は西側側溝3条の内の西溝にあたる。溝は途中、擾乱を受けているものの残存状況は良い。長さ約11.1m分を測定し、上幅0.84~0.96m、下幅0.23~0.57m、残存する溝の深さ0.16~0.21mを測る。溝の断面は緩やかなU字状を呈し、上段は上層から黒茶色土(やや締まっている)・淡灰褐色土(黄色粒子多混)となる。溝内からの硬化土は確認されていない。出土遺物は黒茶色土から器部(片)を認めている。

1SD135 (Fig.21, Pl.1-4)

当溝は西側側溝3条の内の中央溝にあたる。則平・擾乱を受けているため残存状況は悪く、検出長約2.3m、上幅0.45~0.62m、下幅0.26~0.41m、残存する溝の深さ0.06~0.20mを測る。溝の断面は緩やかなU字状を呈し、溝底の南端部は一段下がって深くなっている。埋土はやや締まっている黒灰色土の単一土層で、溝内からの硬化土は確認されていない。出土遺物は認めない。

1SD140 (Fig.21, Pl.1)

当溝は東側側溝3条の内の東溝にあたり、切り合っている他遺構の全てに跨っている。溝の北端一帯は擾乱を受けているものの残存状況は良く、検出長約43.5m、上幅0.50~1.15m、下幅0.21~0.72m、残存する溝の深さは北部で約0.24m、U字尖部で約0.29m、南部で約0.32mを測る。溝の断面は北部では緩やかなU字状を呈し、中央部から南端にかけては逆U字状を呈する。北部の埋土は、上層から黒色土・黒茶色土(やや締まっている)・茶色土(黄色粒子多混)の3層が西側から流れ込むが、これ堆積してい

た。一方、中央部から南部にかけての埋土は、上層から淡灰茶色砂質土（淡茶色粒子混）・暗茶色粘質土の2層が堆積する。硬化土は確認されていない。出土遺物は暗茶色粘質土から須恵器（甕）、土師器（坏）、淡灰茶色砂質土から須恵器（甕）を認めている。

1SD145 (Fig.21, Pla.1)

当溝は東側側溝2条の内の西溝にあたる。溝の途中は攪乱を受けているため途切れており、溝の北端から南端までの長さは約39.5mである。北部では上幅約0.95m、下幅約0.30m、残存する溝の深さ0.20m前後、中央部では上幅約0.95m、下幅約0.55m、残存する溝の深さ0.15m前後、南部では上幅約0.60m、下幅約0.30m、残存する溝の深さ0.38m前後を測る。溝の断面は緩やかなU字状ないしは遊台形状を呈し、淡黒茶色土を基調とする埋土であった。ここでも溝内からの硬化土は確認されていない。遺物は土師器（片）を出土している。

推定道路

1SF500 (Fig.21, Pla.1)

当道路状遺構は1SD130（西側側溝）—1SD140（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約10.00m、溝の内々幅で約9.20mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

1SF510 (Fig.21, Pla.1)

当道路状遺構は、1SD135（西側側溝）—1SD145（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約8.50m、溝の内々幅で約7.65mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

1SF520 (Fig.21, Pla.1)

当道路状遺構は、1SD125（西側側溝）—1SD145（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約7.65m、溝の内々幅で約7.00mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

1SF530 (Fig.21, Pla.1)

当道路状遺構は帯状のにびて検出された硬化面①～③を指すもので、硬化土は幅約0.30m前後、厚さ0.05m前後を測る濃黒色土で、断面は凹状を呈する。硬化面①～③は1SF500・510・520にほぼ沿うように確認されており、当調査区から検出された道路状遺構の最終段階にあたる。硬化面・硬化土は、その規模や状況から人の往来等によってできた痕跡（あぜ道のような小径）であることが予想される。

土坑

1SK015 (Fig.22)

調査区内中央の東よりで検出した隅丸長方形形状の土坑である。長軸1.96m、短軸0.80m、残存する深さは北部で0.20m、南部で0.38mを測る。主軸は座標北を示し、遺構内底はほぼフラットである。出土遺物は須恵器（鉢）、土師器（小皿）等を認めている。土坑墓としての可能性も考えておきたい。

1SK025 (Fig.22)

調査区内中央で検出し、南部は攪乱によって尖う。幅1.20m、残存する深さは0.16mを測る。出土遺物は土師器（小皿）等を認めている。

1SK035 (Fig.22)

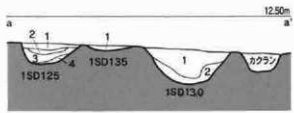
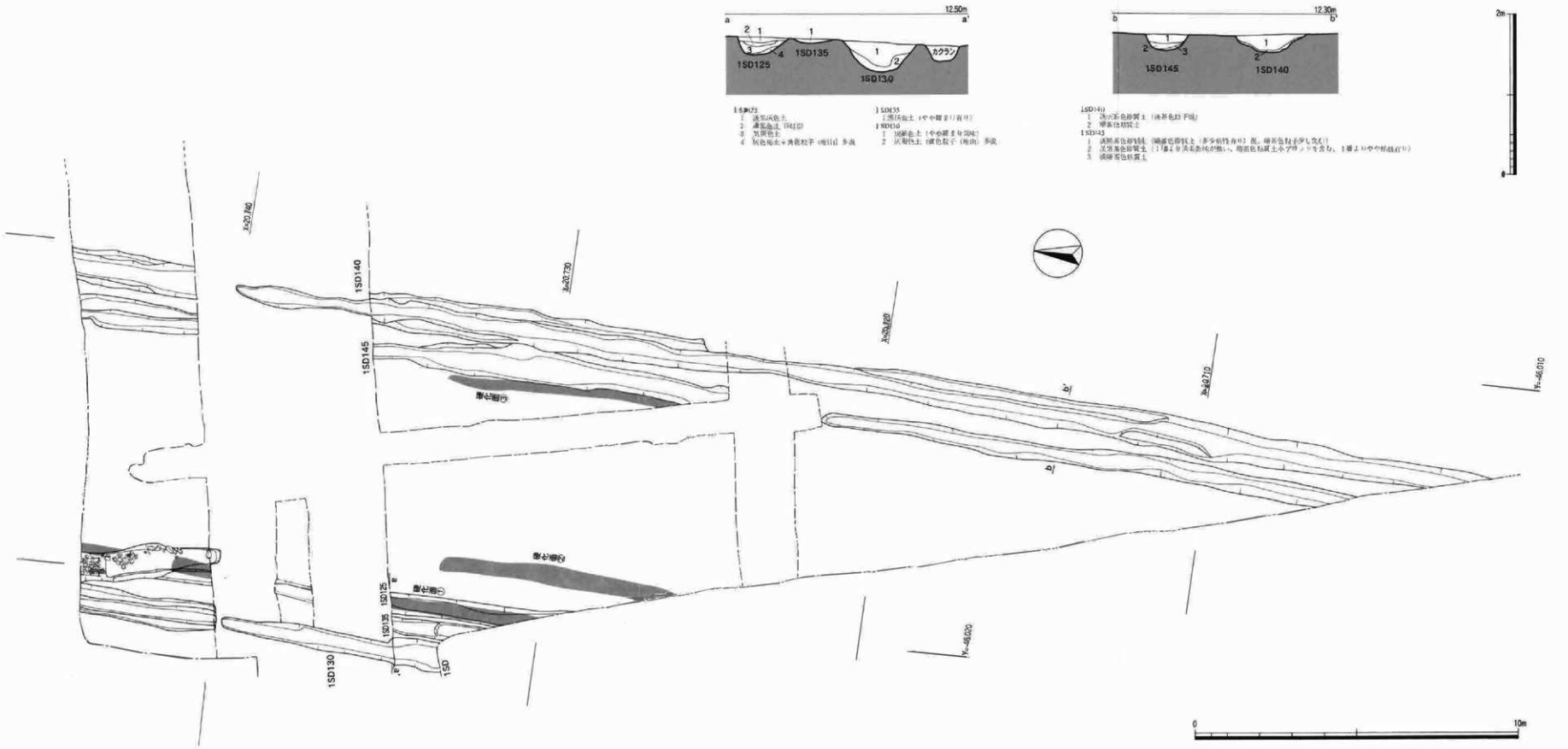
調査区内北端で検出した隅丸長方形形状の土坑である。長軸2.00m、短軸1.38m、残存する深さは約0.30mを測る。主軸は座標北を示し、遺構内底はほぼフラットである。出土遺物は土師器（小皿）等を認めている。

1SK045 (Fig.22)

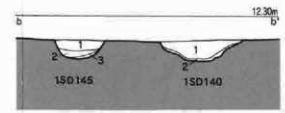
調査区内中央の西よりで検出した隅丸長方形形状の土坑である。遺構の南端部は1SK055と切り合うが境界部分で攪乱を受けていたため確認できていない。長軸は推定で2.76m、短軸は0.90m、残存する深さは0.27mを測る。主軸はN-16° 38' 37" -Wを示し、遺構内底はほぼフラットである。淡黒茶色砂質土を基調とした埋土で、出土遺物は土師器（片）が僅かに認められた。

1SK055 (Fig.22)

調査区内中央の西よりで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構の北端部は1SK045と切り合うが境界部分で攪乱を受けていたため確認できていない。長軸は推定で2.95m、短軸は1.70m、残存する深さは



- 1SD125
1 淡灰色粉土
2 淡黄色土 (砂粒)
3 灰黄色土
4 灰黄色土+黄色砂子 (砂粒) 多块
- 1SD135
1 灰黄色土 (中砂层 2) 有块
2 灰黄色土 (中砂层 1) 有块
3 灰黄色土 (中砂层 1) 有块
4 灰黄色土 (中砂层 1) 有块



- 1SD144
1 淡灰色粉土 (淡黄色砂子层)
2 淡黄色粉土
- 1SD145
1 淡灰色粉土 (淡黄色砂子层) 有块
2 淡黄色粉土 (淡黄色砂子层) 有块
3 淡黄色粉土 (淡黄色砂子层) 有块

Fig.21 道路状遺構実測図 (1/40・1/100)

0.52mを測る。主軸はN-16° 38' 37" -Wを示し、遺構内底はほぼフラットである。淡黒茶色砂質土を基盤とした埋土で、出土遺物は土師器(小皿)等を認めている。

1SK065 (Fig.22)

調査区内中央の西よりで検出した隅丸長方形の土坑である。長軸は3.05m、短軸は1.21m、残存する深さは0.12mを測る。主軸はN-19° 13' 21" -Wを示し、遺構内底はほぼフラットである。埋土は淡黒茶色砂質土の単一土層で、出土遺物は皆無であった。

1SK075 (Fig.22)

調査区内中央の西よりで検出した隅丸長方形の土坑である。長軸は2.87m、短軸は1.12m、残存する深さは0.10mを測る。主軸はN-20° 57' 24" -Wを示し、遺構内底はほぼフラットである。埋土は淡黒茶色砂質土の単一土層で、出土遺物は皆無であった。

1SK085 (Fig.22)

調査区内中央の西よりで検出した楕円形の土坑である。遺構の南東部は1SK095に切られ、幅は約1.75m、残存する深さは0.20mを測る。遺構内底はほぼフラットで、埋土は淡黒茶色砂質土の単一土層であった。出土遺物は皆無であった。

1SK095 (Fig.22)

調査区内中央の西よりで検出した楕円形の土坑である。遺構の北西部は1SK085を切り、幅は約2.30m、残存する深さは1.40mを測る。遺構内底は北部がやや深くなっている。遺物は土師器(片)が僅かに出土した。

1SK105 (Fig.22, Pia.5)

調査区内北部の東よりで確認した不整形を呈する大型の土坑で、遺構西部は1SE060に切られるように検出された。南北長は約4.45m、残存する深さは約2.45mを測り、1SE060と同じレベルに達している。遺構内底はほぼフラットな状態で、遺物は須恵器(鉢)、土師器(小皿・坏・土師・部鉢・火鉢)、瓦質土器(筒鉢)、甕磁(輪)、石製品(石皿)等が出土している。

(3) 出土遺物

擬立柱建物

1SB220-P9 (Fig.23, Pia.6)

土師器

小皿 (1) 口径9.60cm、底径7.20cm、器高1.80cmを復原する。外底は糸切りで、口縁端部に油煙痕を認める。

1SB225-P4 (Fig.23, Pia.6)

土師器

土師 (2) 完形で、全長3.90cm、内径1.15cmを測る。

1SB235-P3 (Fig.23, Pia.6)

土師器

土師 (3) 口縁高の細片で、内面には横方向の刷毛目、口縁部外面は指押さえ、体部・鉢は斜め方向の刷毛目の修整を施す。口縁部外面には葉が付着する。

1SB235-P5 (Fig.23, Pia.6)

染付

皿 (4) 口径12.60cm、高台径4.40cm、器高3.40~3.70cmを測る。内面には須恵で文様を描き、乳白色の釉を全面に施す。見込みは蛇ノ目状に釉が掻き取られ、見込み及び畳付けには釉が付着している。

1SB245-P6 (Fig.23, Pia.6)

土師器

土師 (5~7) 全て完形で、5は全長3.50cm、内径1.30cm、6は全長3.30cm、内径1.20cm、7は全長3.30cm、内径1.30cmを測る。

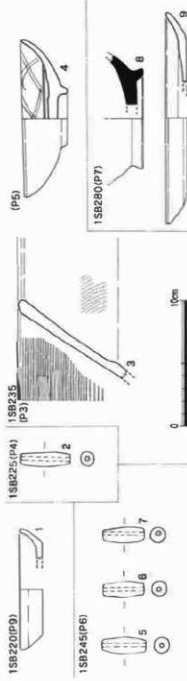


Fig.23 懸立柱建物出土器実測図 (1/3)

1SB280—P7 (Fig.23, Pl.6)

須臾器

杯(8) 高台8.00cmを復原する底部の細片である。色調は淡灰茶色で、底部内面はナデ、体部内外面はヘラケズリ、高台内外面はヨコナデの調整を施す。

土師器

皿(9) 口径16.80cm、底径12.00cm、器高1.70cmを復原する。内外面はヨコナデ調整で、外底は糸切りである。内底には小動物による引っかき痕が認められる。

溝

1SD010 (Fig.24, Pl.6)

土師器

杯(10) 口径2.60cm、底径10.00cm、器高3.10cmを復原する。体部内面の一部に油漣痕と思われる煤が付着し、内底には小動物による引っかき痕が認められる。外底は糸切りで、内外面はヨコナデ調整である。

井戸

1SE030 (Fig.25, Pl.6)

土師器

小皿(11) 口径10.00cm、底径6.60cm、器高2.50cmを復原する。内外面はヨコナデで、外底は糸切りである。内外面には煤が薄く付着しており、二次焼成を受けた可能性がある。

土鍋(12) 口縁部の細片で、肩部は玉縁状を呈する。

鉢(13) 口径40.00cmを復原する。内面は横方向の刷毛目、口縁部から外面にかけては工具によるナデの調整である。内外面には煤が薄く付着し、二次焼成を受けている。

火鉢(14・15) 14は口縁部の細片で、内面には横方向の細かい刷毛目、外面には花文と思われるスタンプを押印する。15は底部の細片で、外面には花文と思われるスタンプが押印される。体部内面はナデ、内底は刷毛目、外面は工具によるナデ調整が施される。

須臾器

鉢(16・17) 16は口縁部の細片で、外面に縦方向の刷毛目が施される。内面の調整は不明。17は内面に横方向の細かい刷毛目、外面はナデ調整を施し、内面には煤が薄く付着する。

指鉢(18) 底径13.00cmを復原する底部の細片である。体部内面には7本単位の指目を斜め方向に施し、内底には不定方向に指目を施す。内面はヨコナデ、外面上位は指押さえ後ナデで、下位はヘラケズリ調整である。外底は調整不明で外面には煤が付着している。

常滑産陶器

甕(19) 口縁部の細片で、常滑産甕のN字状の口縁部を呈する。外面はヨコナデ、内面は工具によるナデ調整である。

Fig.24 1SD010

出土器実測図 (1/3)

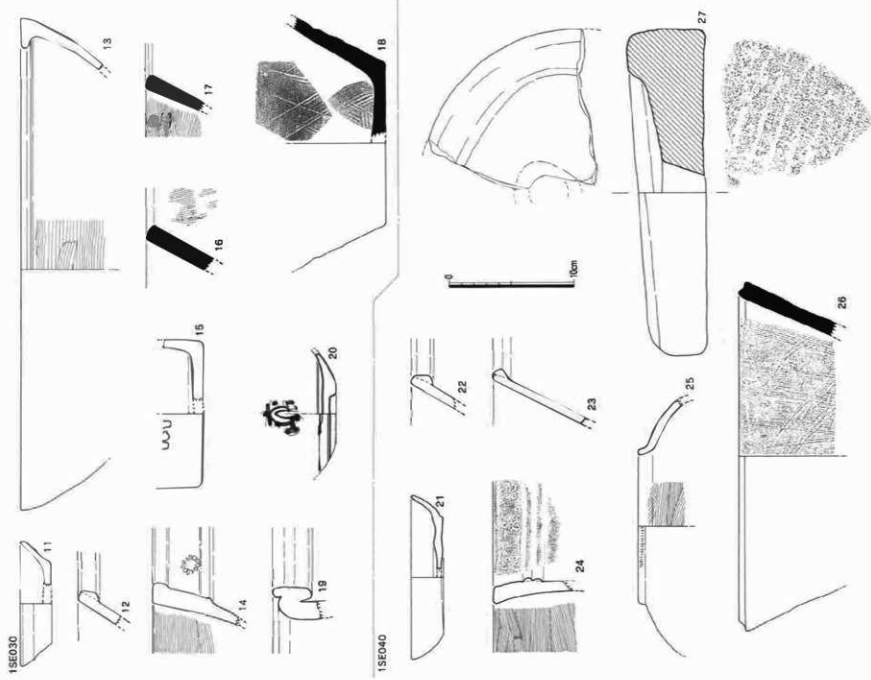


Fig. 25 1SE030・040出土遺物実測図（1/3）

染付

皿 (20) 底部の細片で、底径は3.43cmを測る。素地は精選された乳白色で、釉調は青味がかった透明釉を塗付け以外に施す。見込み及び外面には呉須で文様を描き、塗付け付近には目動線を看取する。

1SE040 (Fig.25, Pl.a.7)

土師器

皿 (21) 口径13.00cm、底径9.60cm、器高2.50cmを復原し、内外面はヨコナデ、外底は糸切りである。土割 (22・23) 共に口縁部の細片で、端部は玉縁状を呈する。外面には葉が附着している。

瓦質土器

火鉢 (24) 口縁部の細片で、内面は横方向の細かい刷毛目、外面はヨコナデで、2条の貼付突帯を施す。更にその上位には菊花文のスタンプを押し印する。

茶釜 (25) 口径13.00cmを復原する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は刷毛目、体部外面は工具によるナデ調整を施し、口縁端部外面には刺突文を施す。

須恵器

細鉢 (26) 口径27.60cmを復原し、内面には刷毛目の後7本単位の罫目を放射状に施す。外面はナデ調整である。

石製品

挽臼 (27) 外径26.00cmを復原する上臼で、中心軸からやや外れたところに供給口が貫通する。安山岩製と思われ、二次産成を受けている。

1SE050 (Fig.26, Pl.a.7)

瓦質土器

細鉢 (28・29) 28・29は同一個体と思われる。28は口縁部の細片で、口径27.60cmを復原する。内面の調整は不明であるが6～7本単位の罫目が放射状に施されている。外面はナデ後粗い刷毛目を施す。29は底部の細片で、底径13.00cmを復原する。内底には4本単位の罫目が不定方向に施される。

龍窯系青磁

碗 (30) 口径16.00cmを測り、淡青灰色の素地に青緑色の釉を施す。外面には鱗差弁が施されている。

染付

碗 (31) 底部の細片で、高径径は4.40cmを測る。やや微砂粒を含む乳灰白色の素地に乳白色の釉を内外面に施釉する。見込み及び外面には呉須で文様を描き、塗付けは釉が掻き取られている。

石製品

挽臼 (32) 外径31.00cmを復原する上臼で、中心軸からやや外れたところに供給口が貫通する。中心部下端には削穴が施されている。安山岩製と思われる。

遺物状遺構

1SD125一淡黒灰色土 (Fig.27, Pl.a.7)

土師器

土鍋 (33) 素口縁の細片で、内面は横方向の刷毛目、外面の口縁部及び体部上位は指押さえ、体部下位は斜め方向の刷毛目調整を施す。外面には葉が厚く附着している。

1SD130一黒茶色土 (Fig.27, Pl.a.7・8)

土師器

片 (34・35) 34は口径13.00cm、底径9.30cm、器高3.340cm、35は口径15.00cm、底径13.00cmを復原する。34・35の調整は内面及び体部外面はヨコナデで、外底は手持ちによるヘラケスリである。

須恵器

葉 (36) 体部の細片で、内面は同心円、外面は正格子の叩きを施す。色調は青灰色で粘土に砂粒及び黒色乾子を少量含む。

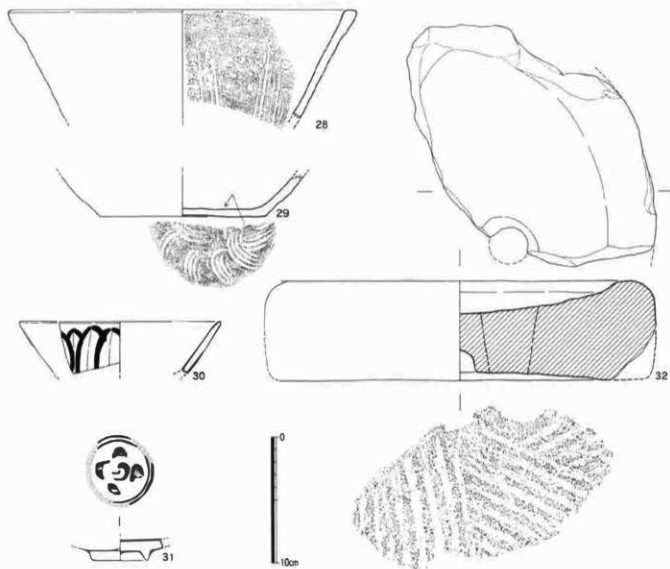


Fig.26 1SE050出土遺物実測図 (1/3)

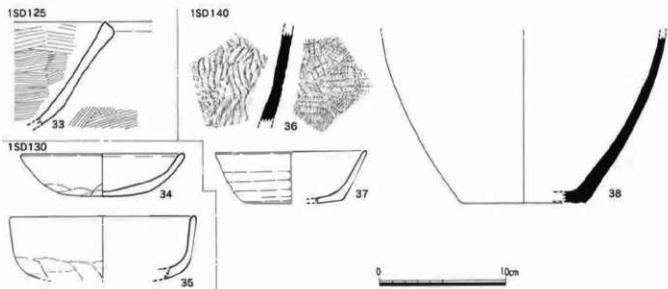


Fig.27 道路状遺構出土土器実測図 (1/3)

土師器

杯 (37) 口径12.00cm、底径8.00cm、器高4.00~4.20cmを測る。調整は内面及び底部外面はヨコナデで、外底は回転ヘラケズリである。

1SD140—暗茶色粘質土 (Fig.27, Pla.8)

須恵器

甕 (38) 底部の破片で、底径10.00cmを復原する。内面は同心円明き後ヨコナデ、外面は正格子明き後ケズリ調整を施す。外底はヘラ切りと思われる。

土坑

1SK055 (Fig.28, Pla.8)

土師器

甕 (39) 口径10.40cmを復原する細片で、小皿になる可能性も考えておきたい。口縁部には焼成後に径0.25cm前後を測る穿孔が貫通する。

小皿 (40・41) 40は口径9.00cm、底径5.60cm、器高2.50cm、41は口径9.60cm、底径6.50cm、器高2.50cm、調整は共に内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。41は内外面に葉が厚く付着している。

1SK056

土師器

小皿 (42) 口径9.60cm、底径6.50cm、器高2.10cmを復原し、調整は内外面がヨコナデ、外底は糸切りである。

1SK060 (Fig.28, Pla.8)

瓦質土器

擂鉢 (43・44) 共に素口縁である。43は内面が横方向の刷毛目後放射状に掻目、外面は縦方向の刷毛目を施す。44は内面が横方向の刷毛目後放射状に掻目、外面はナデを施す。

1SK105 (Fig.28, Pla.8)

土師器

小皿 (45) 口径9.00cm、底径7.60cm、器高1.90cmを復原する。調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。

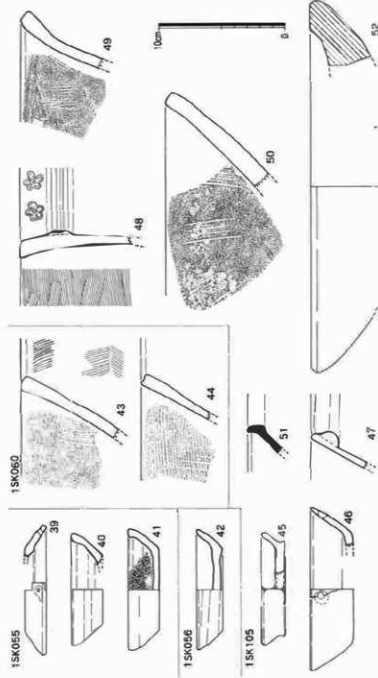


Fig.28 土坑出土遺物実測図 (1/3)

坏 (46) 口径13.00cm、底径8.70cm、器高3.40cmを複製する。調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。口縁部には焼成後に径0.50cm前後を測る穿孔が貫通する。外周一部に煤が付着している。

土鍋 (47) 玉縁状の口縁部を呈する細片で、内面はナデ調整である。外面には煤が厚く付着しているため、調整は不明である。

瓦質土器

火鉢 (48~50) 48は口縁部の細片で断面→方向の細かい刷毛目、外面はヨコナデである。2条の貼付突帯を施し、その上位には菊花文のスタンプを押し印する。49は口縁部が外反した細片で、内面には刷毛目後に8本単位の指目を施す。外面はナデ調整である。50は口縁部がやや内湾した細片で、内面には刷毛目後に4本単位の指目を施す。外面は調整不明である。

栗澤系須恵器

鉢 (51) 口縁部は玉縁状を呈する。内外面の調整はヨコナデで、極僅かに黒色灰子が粘土に含まれる。

石製品

石皿 (52) 口径29.40cmを複製する。石材は砂岩製で、挽臼の受け皿になる可能性も考えておきたい。調整は不明である。

ヒット

1SP001 (Fig.29, Pla.8)

栗澤系須恵器

鉢 (53) 口縁部は玉縁状を呈する。内外面の調整はヨコナデで、極僅かに黒色灰子が粘土に含まれる。

1SP002 (Fig.29, Pla.8)

石製品

石鍋 (54) 石材は滑石製で、口径19.00cmを複製する。口縁部は斜め上方へ立ち上がり、肩部の断面形は方形状を呈する。外面にはノミ痕が顕著に看取される。

1SP023 (Fig.29)

土師器

小皿 (55) 口径9.80cm、底径7.60cm、器高1.90cmを複製する。調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。

1SP029 (Fig.29, Pla.9)

土師器

土鍋 (56) 玉縁状の口縁部を呈する細片で、内面は横方向の刷毛目調整である。外面には煤が厚く付着しているため、調整は不明である。

1SP034 (Fig.29, Pla.9)

土師器

小皿 (57) 口径7.00cm、底径4.50cm、器高1.70~2.20cmを測る。調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。

1SP044 (Fig.29, Pla.9)

土師器

小皿 (58) 口径10.50cm、底径6.90cm、器高1.50~1.70cmを測る。調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。

1SP084 (Fig.29, Pla.9)

土師器

小皿 (59) 口径6.70cm、底径4.50cm、器高1.70cmを測る。内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。

1SP089 (Fig.29, Pla.9)

染付

皿 (60) 口径10.60cmを複製し、乳灰白色の素地に藍色の透明釉を施し、表面には貫入を看取する。内外面にはくすんだ呉須で文様を描く。

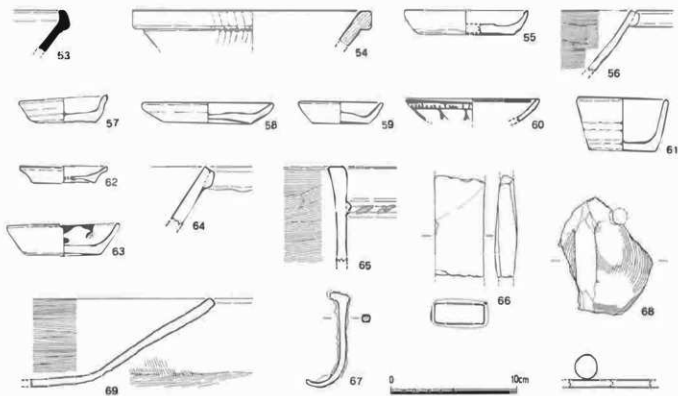


Fig.29 その他の出土遺物実測図 (1/3)

1SP122 (Fig.29, Pla.9)

土師器

坏 (61) 口径7.20cm、底径5.40cm、器高4.20cmを測る。調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。

攪乱 (Fig.29, Pla.9)

土師器

小皿 (62・63) 62は口径7.00cm、底径5.00cm、器高1.30cm、63は口径9.00cm、底径6.10cm、器高2.40cmを測る。共に調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。63は内外面に油煙痕が付着する。

土鍋 (64) 玉縁状の口縁部を呈する細片である。内面及び体部外面はナデで、口縁部はヨコナデである。外面には煤が付着している。

瓦質土器

火鉢 (65) 口縁部の細片で内面は横方向の細かい刷毛目、外面はナデ調整である。1条の貼付突帯を施し、その突帯には縄目状の文様を押印する。

石器

砥石 (66) 石材は砂岩製と思われ、上下部は欠損している。表面は全て砥面として使用されている。

鉄製品

釘 (67) 先端部は湾曲しており、頭部はやや「く」状を呈する。断面形は正形状を呈する。

表土 (Fig.29, Pla.9)

瓦質土器

蓋 (68) 器厚は0.60cmを測る。ほぼ平らな盤状の蓋に径1.75cmの把手を取り付ける。中心軸からやや外れた場所に1.00cm程度の穿孔が施されている。内外面は刷毛目調整である。

調査区外表探 (Fig.29)

土師器

土鍋 (69) 素口縁を呈する破片である。内面及び体部外面下位は刷毛目で、体部外面上位は指押さえである。外面には煤が厚く付着している。

(4) 小結

調査の結果、欄立柱遺構7列、欄立柱建物26棟、溝1条、井戸5基、道路状遺構4路、土坑10基等が確認された。先述したが、調査区には整理段階において座標値にズレが生じていることが判明した。現段階においては現場での検証が困難であると判断し、遺構図は地図上において補正している。従って、ここでは方位を現場での遺構等における他遺跡における検出遺構と比較・検討することは避けることとした。

欄立柱遺構・欄立柱建物

当遺跡で確認された欄立柱遺構・欄立柱建物は後者の「IV.まとめ」(Tab.2・3)」に表した。

欄立柱遺構はすべて東西方向を示しており、欄立柱遺構並びに各柱穴における規模や形状は、欄立柱建物と類似していることからその可能性も否めない。欄立柱建物は東西棟建物21棟、南北棟建物1棟、方形形状の建物4棟が確認され、うち1棟は総柱建物であった。各柱穴は古代の道路状遺構を切っていることから、当地の土地利用は、道路状遺構廃絶後に集落として形成されたこととなる。しかし、出土遺物からの集落の開基は判断しがたい状況であり、建物の下限は16C後半頃と考えられる。

溝

東西方向には1SDF010を確認した。東側隣地である第2次調査(調査区B)で延長部と思われる2SD102を検出しており、検出長は約42mを測る。中世の遺物である土師器(坏)1点が僅かに出土したのみであるため時期の判断は困難であるが、欄立柱建物と同時期に相当するものと考えられる。

井戸

5基を確認したが、危険防止のため残念ながら発掘はしていない。すべて素堀りの井戸で、井戸は調査区のはほぼ中央から東よりの南北方向に配置されていることから、当時における水脈がほぼ南北ライン上にあったものと判断できる。更に、井戸壁である地山の状況は、遺跡検出面から約60cm下がったレベルに境に、締まりのある粘質土から荒目砂を含む粘質土へと移行していた。このレベルにあわせて井戸壁の崩壊も招いていたことから、かなり浅いレベルでの染み水があったことが想定される。井戸穴からは13後半～16C代にかけての出土遺物を認めるので、集落が機能していた時期を示すものとして提示できる。

道路状遺構

調査区からは道路状遺構に付設する側溝、礫化土、礫化面が検出された。遺構の切り合いから古い順に1SF500→1SF510→1SF520→1SF530と4路の整列が想定される。

さて、今回確認された1SF500は、律令期に整備された古代官道である「西海道」の可能性が強い。古代官道の詳細については後章の「IV.まとめ」でふれることとするが、概略すると、西海道は九州地方において大宰府を中心とする各国府を直線的に繋いだ驛路のことで、道路の幅員は9～12m位であったことが周知されている。英後市の北側に位置する久留米市で、既に調査事例として古代官道が報告されており、また、歴史地理学的研究から市場を復元していたことが推測されていた。(当該地はその駅路の想定ライン上に位置する)。先述したとおり、1SF500は1SD130(西側側溝)と1SD140(東側側溝)の距離間における溝の心々幅で10.00m、溝の内々幅で9.20～9.35mを計測する道路で、側溝内からは8C代の遺物を出土している。このことは、道路状遺構の立地・規模・出土遺物からみても推定された西海道にはほぼ一致する資料といえよう。

道路状遺構は1SF500の他に、1SF510・1SF520・1SF530が復原でき、その先後関係は先に述べたところである。遺構の幅員は溝の心々幅で10.00m(1SF500)→8.50m(1SF510)→7.65m(1SF520)と縮小し、1SF530に至っては個溝を持たない小径であった。このことは、古代官道が律令体制の形骸化に伴って縮小し、やがては終焉を迎えたことが考えられ、道路状遺構廃絶から終焉までの過程が顕著に窺える資料である。最終段階とされる1SF530からの出土遺物は、残念ながら若狭馬場であったことからその時期は不明であるが、13後半～16C代に比定される中世の遺構が道路状遺構を切っているため、少なくとも13C前半までには廃絶していたことは明らかである。



鶴田中市ノ塚遺跡第1次調査調査区全景（空中写真：真上から）



鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）道路状遺構（空中写真：南から）

2. 鶴田中市ノ塚遺跡 (第2次調査)

(1) はじめに (Fig.30)

当遺跡は筑後市大字鶴田字中市ノ塚408-1外に所在し、標高12m位の低位段丘上に立地する。開発事業者であるコガホホームから鶴田中市ノ塚遺跡 (第1次調査) の隣接地について第2期目の宅地分譲を計画しているとの連絡を受けたことにより、市教委では鶴田中市ノ塚遺跡 (第1次調査) と同様に関係予定地内の全域である4,463㎡について発掘調査を実施した。

筑後市教育委員会は平成6年11月15日から平成7年3月31日まで発掘調査を実施し、この間、重機による表土除去 (有限会社福岡建設に委託)、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影 (空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託) 等を行った。発掘調査は小林勇作が担当し、塚本英子 (現：三瀬町教育委員会)、大島真一郎 (現：黒木町教育委員会)、野田洋子の協力を得た。また、遺構の実測及び写真撮影は小林、大島、野田が担当した。

調査区は便宜上、南東部調査区を「調査区A」、北東部調査区を「調査区B」、南部調査区を「調査区C」と称した。調査の結果、調査区B・Cにおいて掘立柱建物、井戸、溝、土坎等が検出されたが、調査区Aからは主要な遺構は検出されなかった。



Fig.30 鶴田中市ノ塚遺跡 (第2次調査) 調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構
掘立柱建物

2SB200 (Fig.31)

調査区C内の北西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴 (P1-P6) の平面プランは円形または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.20~0.36mを測る。建物の規模は東西2間 (5.55~5.60m) ×南北1間 (2.70~2.85m)、建物面積15.36㎡ (每4.61坪) で、南北軸はN-15°33'58"-Wの方位を示す。更に各柱穴跡はP3-P4間3.05m、P4-P5間2.85m、P5-P6間2.90m、P6-P1間2.70mを測る。P6からは径0.15m前後の柱礎跡が確認されている。

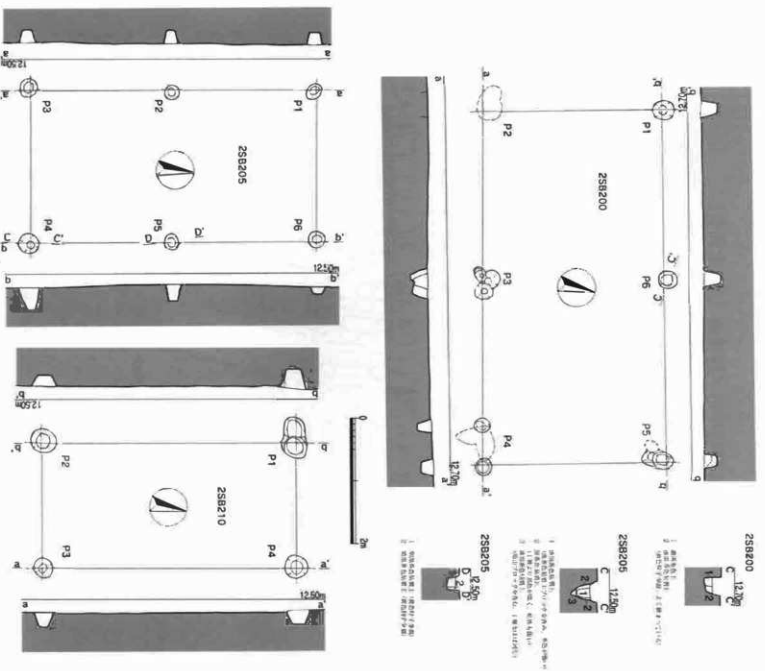


Fig.31 258200・205・210発掘図 (1/60)

258205 (Fig.31)

跡2区C内の北西角で検出した南北軸の柱列は建物である。柱穴 (P1~P6) の平面プランはほぼ円形求を呈し、残存する柱穴の径さは0.11~0.35mを測る。建物の規模は東西1間 (2.35~2.50m) ×南北2間 (2.55m)、建物面積10.93㎡ (年3.28坪) で、南北軸はN-8° 53' 33" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.30m、P2-P3間2.25m、P3-P4間2.50m、P4-P5間2.25m、P5-P6間2.30m、P6-P1間2.35mを測る。P4・5からは径0.16mの柱状跡が確認された。

2SB210 (Fig.31)

調査区C内の北西部で検出した南北棟の独立柱建物である。柱穴 (P1~P4) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは1.0R~0.30mを測る。建物の規模は東西1間 (2.00m) × 南北1間 (3.97~4.05m)、建物面積7.93㎡ (≒2.38坪) で、南北軸はN-13° 45' 38" -Wの方位を示す。

2SB215 (Fig.32)

調査区C内の北西部で検出した南北棟の独立柱建物である。柱穴 (P1~P4) の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.20~0.28mを測る。建物の規模は東西1間 (2.10~2.15m) × 南北1間 (4.35~4.40m)、建物面積9.05㎡ (≒2.71坪) で、南北軸はN-10° 45' 45" -Wの方位を示す。P3からは須置器 (鉢) が出土した。

2SB220 (Fig.32)

調査区C内の北西部で検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴 (P1~P8) の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.08~0.29mを測る。建物の規模は東西3間 (5.22m) × 南北1間 (3.15~3.20m)、建物面積16.64㎡ (≒4.99坪) で、南北軸はN-g° 37' 57" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間3.20m、P2-P3間1.87m、P3-P4間1.68m、P4-P5間1.75m、P5-P6間3.16m、P6-P7間1.70m、P7-P8間1.37m、P8-P1間2.15mを測る。P3からは土師器 (火鉢) が出土している。

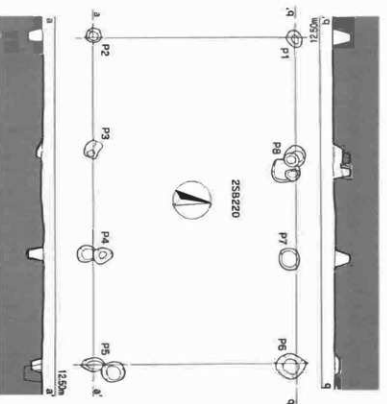
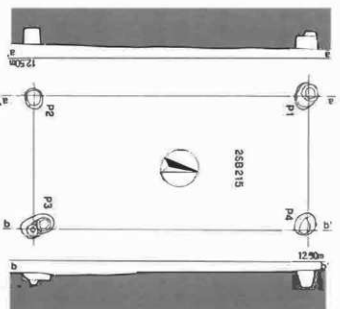


Fig.32 2SB215・220実測図 (1/60)

25B225 (Fig.33)

調査区C内の北西部で検出した南北棟の独立柱建物である。柱穴(P1~P6)の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.27~0.46mを測る。建物の規模は東西1間(3.30~3.40m)×南北2間(4.51~4.63m)、建物面積15.18㎡(≒4.55坪)で、南北軸はN-14°30'—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1~P2間2.40m、P2~P3間2.23m、P3~P4間3.30m、P4~P5間2.23m、P5~P6間4.51m、P6~P1間3.40mを測る。

25B230 (Fig.33)

調査区C内の西端で検出した南北棟の独立柱建物である。柱穴(P1~P6)の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.10~0.44mを測る。建物の規模は東西1間(3.10~3.30m)×南北2間(4.45~4.57m)、建物面積14.37㎡(≒4.31坪)で、南北軸はN-17°45'53"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1~P2間2.37m、P2~P3間2.20m、P3~P4間3.30m、P6~P1間3.10mを測る。P5は埋没を受けていたため不明である。

25B235 (Fig.33)

調査区C内の西端で検出した南北棟の独立柱建物である。柱穴(P1~P4)の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.17~0.35mを測る。建物の規模は東西1間(2.27~2.35m)×南北1間(3.17~3.25m)、建物面積7.67㎡(≒2.30坪)で、南北軸はN-14°27'08"—Wの方位を示す。

25B240 (Fig.33)

調査区C内の西端で検出した南北棟の独立柱建物である。柱穴(P1~P4)の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.07~0.20mを測る。建物の規模は東西1間(1.90~1.95m)×南北1間(2.80~2.95m)、建物面積5.42㎡(≒1.62坪)で、南北軸はN-13°26'55"—Wの方位を示す。

25B245 (Fig.34)

調査区C内の西端で検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P1~P6)の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.26~0.52mを測る。建物の規模は東西2間(4.24m)×南北1間(3.50m)、建物面積15.28㎡(≒4.58坪)で、南北軸はN-12°53'37"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP2~P3間2.44m、P3~P4間1.80m、P4~P5間3.50m、P5~P6間2.00mを測る。P1は埋没を受けていたため不明である。

25B250 (Fig.34)

調査区C内の西端で検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P1~P6)の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.07~0.38mを測る。建物の規模は東西2間(3.65~3.78m)×南北1間(3.35~3.55m)、建物面積13.13㎡(≒3.93坪)で、南北軸はN-12°14'10"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1~P2間1.95m、P2~P3間1.95m、P3~P4間1.85m、P4~P5間3.55m、P5~P6間1.85m、P6~P1間1.80mを測る。P2~5においてはほぼ同等の柱穴が密接して2穴確認されており、少なくとも1回以上の修繕跡がされている可能性が考えられる。

25B255 (Fig.34, Pl.11)

調査区C内の西端で検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P1~P10)の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.37~0.54mを測る。建物の規模は東西3間(5.75~5.80m)×南北2間(3.85m)、建物面積22.61㎡(≒6.78坪)で、南北軸はN-10°18'17"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1~P2間2.00m、P2~P3間1.85m、P3~P4間2.00m、P4~P5間2.00m、P5~P6間1.8m、P8~P9間1.97m、P9~P10間1.88m、P10~P1間1.90mを測り、P7は確認されていない。P5~9・10については径0.11~0.14mの柱染跡を確認し、P10土層断面からは柱穴底部に灰色粘質土が覆われていた。

25B260 (Fig.35)

調査区C内の西端で検出した東西棟の独立柱建物である。柱穴(P1~P8)の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.08~0.23mを測る。建物の規模は東西3間(4.40~4.42m)×南北1間

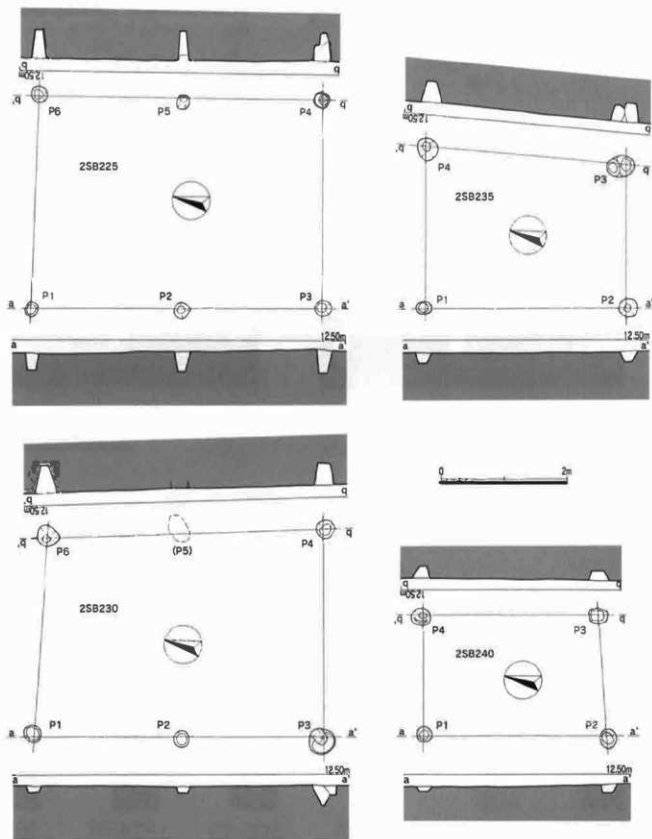


Fig.33 2SB225・230・235・240実測図 (1/60)

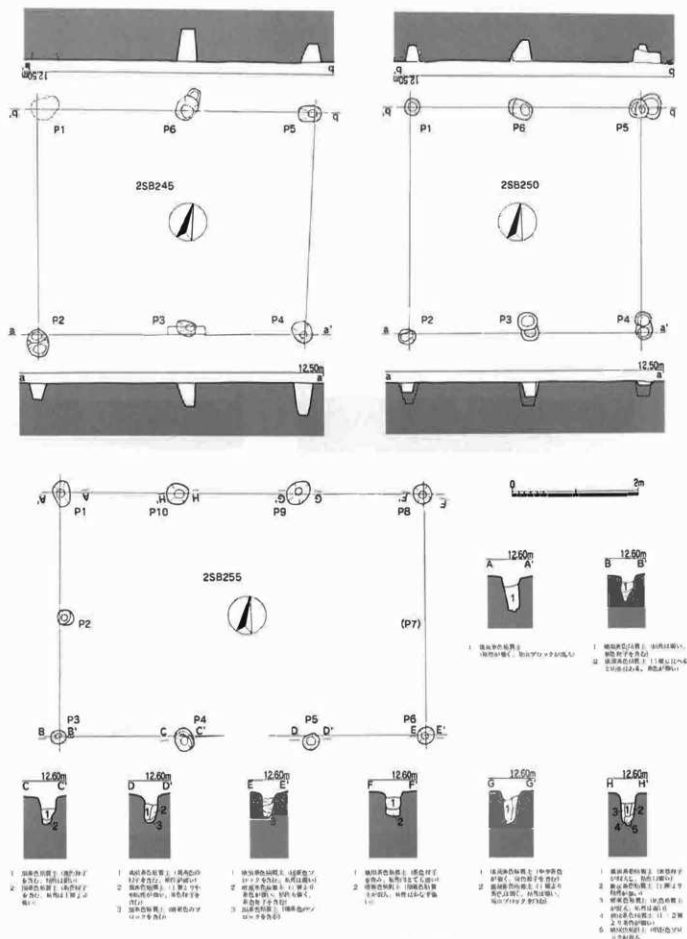


Fig.34 2SB245·250·255实测图 (1/60)

(2.85～2.95m)、建物面積0.277㎡(≒3.83坪)で、南北軸はN-15°01'37"―Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1―P2間2.95m、P2―P3間1.45m、P3―P4間1.40m、P4―P5間1.57m、P5―P6間2.85m、P6―P7間1.45m、P7―P8間1.45m、P8―P1間1.50mを測る。

2SB265 (Fig.35, Pia.12)

調査区C内の南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴 (P1―P10) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.30～0.55mを測る。建物の規模は東西4間 (7.57～7.73m) ×南北1間 (4.35～4.40m)、建物面積33.00㎡ (≒9.93坪) で、南北軸はN-9°09'04"―Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1―P2間3.5m、P2―P3間.80m、P3―P4間2.00m、P4―P5間1.87m、P5―P6間1.90m、P6―P7間1.40m、P7―P8間2.00m、P8―P9間1.93m、P9―P10間2.00m、P10―P1間1.80mを測る。P1・2・4～6においてはおおむね0.10～0.20mの柱痕跡を確認した。

2SB270 (Fig.36, Pia.12)

調査区C内の南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴 (P1―P10) の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.30～0.61mを測る。建物の規模は東西3間 (8.97～9.05m) ×南北1間 (4.10～4.15m)、建物面積37.31㎡ (≒11.20坪) で、南北軸はN-5°37'―Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1―P2間4.15m、P2―P3間2.55m、P3―P4間2.45m、P4―P5間2.05m、P5―P6間2.12m、P6―P7間4.10m、P7―P8間2.20m、P8―P9間2.00m、P9―P10間2.40m、P10―P1間2.45mを測る。P1～9:1においてはおおむね0.10～0.18mの柱痕跡を確認し、P1・3・5:1においては柱穴底部に粘質土を敷き詰めていた。とここで、当該柱建物においてはP4～9間からP11、P6～7間からはP12が確認されている。調査時では当該柱建物には関係ないものとして判断していたが、P1・3・10の1間×1間、P4～9の2間×2間の2棟がそれぞれ独立する建物であることも考えられる。

2SB275 (Fig.36)

調査区C内の南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴 (P1―P8、うちP4は覆土を受ける) の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.14～0.45mを測る。建物の規模は東西3間 (5.68～6.15m) ×南北1間 (2.97～3.08m)、建物面積17.30㎡ (≒5.19坪) で、南北軸はN-15°49'56"―Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1―P2間2.97m、P2―P3間2.15m、P3―P4間3.08m、P6―P7間2.22m、P7―P8間1.92m、P8―P1間1.54mを測る。P6においてはおおむね0.15mの柱痕跡を確認し、柱穴底部に粘質土を敷き詰めていた。

2SB280 (Fig.37)

調査区C内の南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴 (P1―P10) の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.08～0.59mを測る。建物の規模は東西3間 (6.03～6.67m) ×南北2間 (3.67～3.95m)、建物面積24.67㎡ (≒7.40坪) で、南北軸はN-12°03'40"―Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1―P2間2.00m、P2―P3間1.67m、P3―P4間2.15m、P4―P5間2.05m、P5―P6間2.47m、P6―P7間2.18m、P7―P8間1.75m、P8―P9間1.90m、P9―P10間2.28m、P10―P1間1.85mを測る。P4・5:1においてはほぼ0.12m前後の柱痕跡を確認している。

2SB286 (Fig.38, Pia.12・13)

調査区C内の南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。当該調査区から検出した最大級の掘立柱建物で、柱穴 (P1―P12) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.26～0.66mを測る。建物の規模は東西4間 (8.45～8.54m) ×南北2間 (5.08～5.30m)、建物面積43.98㎡ (≒13.20坪) で、南北軸はN-10°01'28"―Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1―P2間2.53m、P2―P3間2.75m、P3―P4間2.25m、P4―P5間1.98m、P5―P6間2.02m、P6―P7間2.20m、P7―P8間2.80m、P8―P9間2.50m、P9―P10間2.20m、P10―P11間1.92m、P11―P12間2.12m、P12―P1間2.30mを測る。全ての柱穴からはほぼ0.09～0.25mを測る柱痕跡若しくは柱抜き取り痕を確認しており、土層断面から柱の周囲には粘質土が敷き詰められている様子を認めることができた。

2SB290 (Fig.39)

調査区C内の西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴 (P1―P8) の平面プランは円形状また

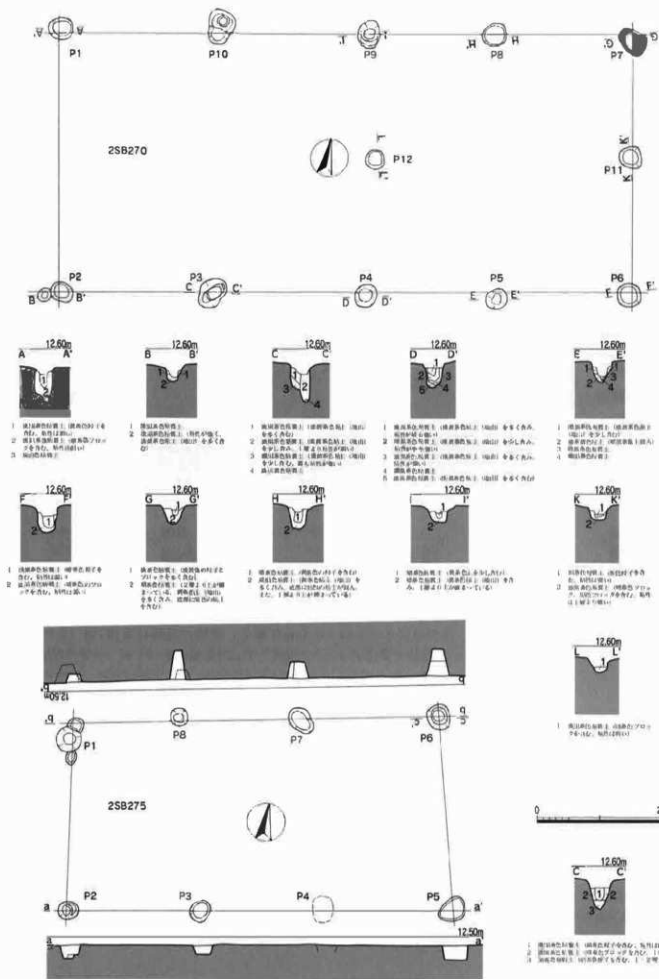


Fig.36 2SB270 · 275實測圖 (1/60)

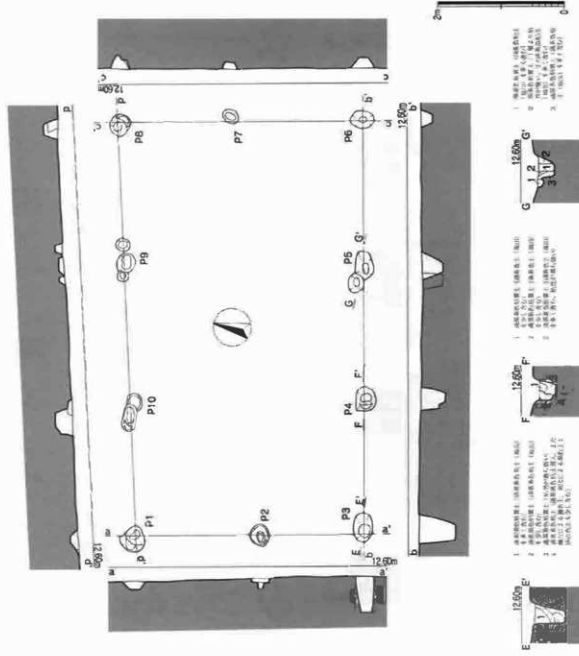


Fig.37 28280実測図 (1/60)

は楕円形状を呈し、残存する土柱の深さは0.14～0.46mを測る。建物の規模は東西3間(5.75～5.82m)×南北1間(2.75～2.98m)、建物面積16.32㎡(毎4.90坪)で、南北軸はN-7°48'—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間2.75m、P2—P3間2.05m、P3—P4間1.70m、P4—P5間2.00m、P5—P6間2.98m、P6—P7間1.92m、P7—P8間1.95m、P8—P1間1.95mを測る。P7・8においては径0.15m前後の柱痕跡を確認した。

28285 (Fig.39)

調査区C内の西部で検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴(P1～P8)の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.19～0.46mを測る。建物の規模は東西3間(5.88～5.91m)×南北1間(4.28～4.35m)、建物面積25.31㎡(毎7.60坪)で、南北軸はN-10°52'16"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間4.28m、P2—P3間1.95m、P3—P4間1.95m、P4—P5間1.98m、P5—P6間4.35m、P6—P7間2.15m、P7—P8間1.66m、P8—P1間2.10mを測る。P4・7・8においては径0.10～0.15mの柱痕跡を確認した。柱穴P1～8は切り合った縦敷の柱穴が確認されており、幾度の建て直しが行われていることを示唆する。

28300 (Fig.40)

調査区C内の西部で検出した南北棟の獨立柱建物である。柱穴(P1～P8)の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.06～0.29mを測る。建物の規模は東西1間(3.56～3.76m)×南北3間

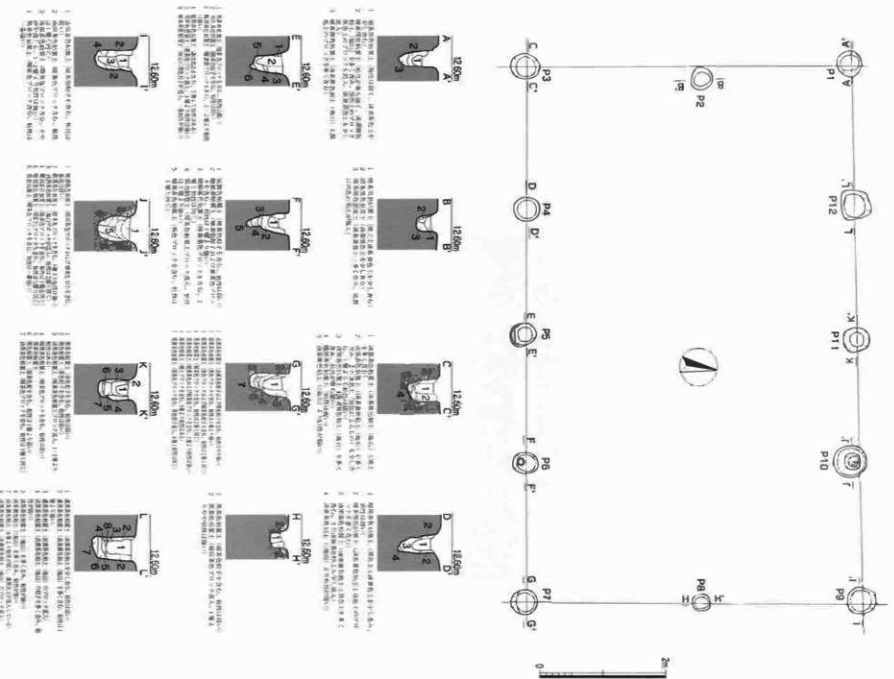


Fig. 38 2SB285 洲圖 (1/60)

(5.06～5.11m)、建物面積18.41㎡(年5.52坪)で、南北軸はN—12°、43'、27" — Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間1.68m、P2—P3間1.72m、P3—P4間1.66m、P4—P5間3.76m、P5—P6間1.17m、P6—P7間2.72m、P7—P8間1.22m、P8—P1間3.56mを測る。

2SB305 (Fig.40)

調査区C内の西端で検出した南北棟の独立柱建物である。柱穴 (P1—P6) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.05～0.24mを測る。建物の規模は東西1間 (2.04～2.15m) ×南北2間 (4.58～4.61m)、建物面積10.12㎡(年3.03坪)で、南北軸はN—11°、34'、19" — Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間2.30m、P2—P3間2.31m、P3—P4間2.15m、P4—P5間2.47m、P5—P6間2.11m、P6—P1間2.04mを測る。

溝

2SD050 (Fig.41, Pla.13)

調査区B内のほぼ中央部で検出した南北方向の溝で、約10m分を確認した。溝の北端は2SD060と隣接するが切り合いは無い。溝の断面は逆台形状を呈し、溝底はほぼフラットな状態である。上幅約1.30m、下幅約0.55m、深さ約0.75mを測る。黒茶色土を基調とした黒土で、土層断面では東西からの流れ込んだ堆積状況が観察できた。堆積状況から溝は空堀で、土壌等の構成はなかつたものと考える。出土遺物は須恵器(鉢)、土師器(小皿・指輪)、楽付(片)等を認めたと。

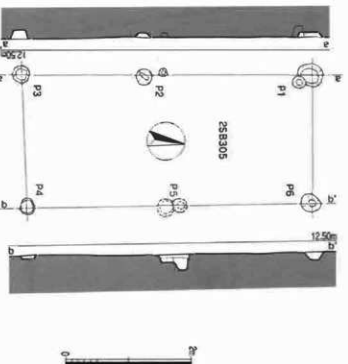
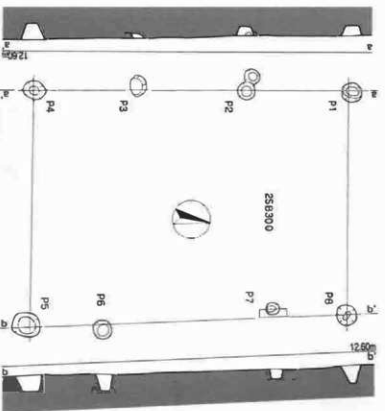


Fig.40 2SB300・305築構図 (1/60)

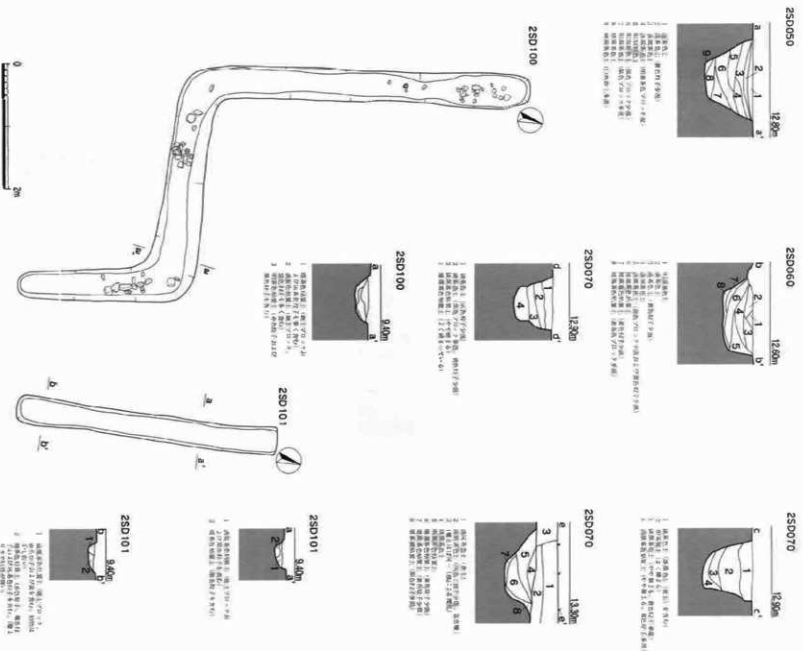


Fig.41 溝渠断面図 (1/60)

2SD0060 (Fig.41, Pl.14)

調査区B内の北部から中央部にかけて検出した南北方向の溝で、約23m分露出していた。溝軸の方位はN-7°41'18"-Wで、2SD0050とはほぼ同位を示す。溝の断面は連台形状を呈し、溝底はほぼフラットな状態である。上頂約1.25m、下頂約0.95m、深さ約0.35mを測る。黒茶色土を基調とした粘土で、土層

断面では東西からの流れ込んだ埋戻状況が観察できた。堆積状況から2SD050と同じく、空堀で土堤のような施設を備えている場所であったと考ええる。出土遺物は須恵器（鉢）、土師器（鉢・楕鉢）、埴付（陶）、陶器（常滑焼・楕鉢）等を認めた。

2SD070 (Fig.41, Ph.14 - 15)

調査区C内のほぼ中央部から調査区C内の東側にかけて検出した南北方向の溝である。溝の北部は2SD050から東方へ約3.5m間隔を開け、溝軸方位N-7° 41' 18" -Wを示しながら約55m分厚である。溝の断面は逆台形状を呈し、溝底はほぼフラットな状態である。上幅約0.95m、下部約0.55m、深さ約0.80mを測る。黒灰色土を基調とした埋土で、上層断面では概ねレンズ状堆積を呈していた。埋積状況から、溝は空堀で土堤のような構造はなかったものと考ええる。出土遺物は土師器（小皿・楕・鉢・鉢）、青磁（片）、埴付（片）等を認めた。

2SD100 (Fig.41)

調査区C内の西部で検出した。上幅約0.45-0.78m、下部0.26-0.38m、深さは約0.25mを測り、断面は逆台形状を呈する。溝の平面プランは、2SB295の西側及び南西隅を沿うように鉤状に屈曲して検出されており、2SB295の埋落ち溝である可能性が高い。ところで、溝の埋土中からは広範囲にわたって焼土が確認され、溝底からは多くの小石と土師器（小皿）、埴付（陶）等が出土している。この状況から想定されるのは、2SB295が焼失したために焼土が流れ込んだと考えるのが妥当で、このことは2SB295が埋没が遅く替えられている建物であったことから理解できる。溝軸はN-13° 45' 58" -Wを示す。

2SD101 (Fig.41)

調査区C内の西部で検出した南北溝で約4.1m分を確認した。溝の北部は擾乱を受けていたため終息しているが、元は2SD100に繋がっていたものと想定されることから雨落ち溝であったと考えられている。埋土には2SD100と同じく広範囲にわたって焼土が確認されたが小石等は出土していない。溝軸の方位はN-9° 38' 52" -Wを示し、東方には2SB265が隣接する。出土遺物は土師器（鉢・土鍋）等を認めた。

2SD102 (付図2)

調査区B内のほぼ中央部で検出した東西方向の溝である。著しく削平を受けており残存状況は極めて悪かった。第1次調査で確認した溝（1SD010）の延長部であり、出土遺物は皆無であった。

井戸

2SE010 (Fig.42, Ph.16)

調査区C内北西部で確認した茶漕りの井戸

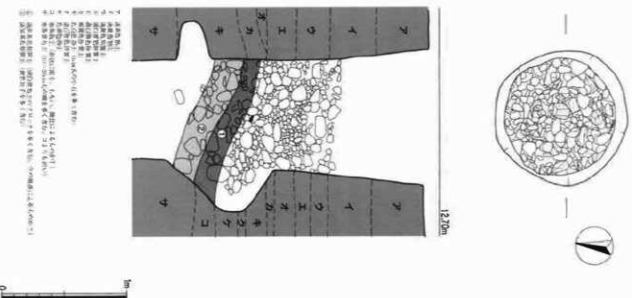


Fig.42 2SE010茶漕り 図 (1/30)

である。平面プランはほぼ円形状を呈し、径1.07m前後を測る。遺構検出前から約70cmまで手掘りによる掘削を施したが、危険防止のためこれより下位は重機で半載した。黒茶色砂質土を基調とした掘土であったが、遺構検出前から約70cmの深さでは大小様々な石が多量に混入して確認された。土層断面ではこの集石は最大で1.30mの厚を呈し、下位では次第に密度が薄くなっていく状況であった。ところで、非戸の下位は遺構検出前から約1.20～1.75mの深さで壁面が抉られていた。これは、このレベルにおいて非戸の壁面がもろくもろくなっているためで、当時の木造レベルを示唆するものである。出土遺物は須恵器(掛鉢)、黒耳器(小皿・土鍋・茶釜)、石製品(埴臼・五輪笠)等が認められた。

2SE020 (付図⑧)

調査区C内北西端部で確認した表掘りの非戸である。平面プランは楕円形状を呈し、径1.45～1.70m前後を測る。遺構検出前から約70cmまで手掘りによる掘削を施したが、危険防止のためこれより下位は掘削を断念した。掘土は黒茶色砂質土を基調とし、掘削までの出土遺物は土師器(土鍋・掛鉢)、青磁(皿)等を認めた。

土坑

2SK005 (Fig.43)

調査区B内北西部で検出した隅丸長方形の土坑で、黒茶色土を基調とした掘土で長軸1.50m、短軸0.94m深さ0.17mを測る。土師器(小皿・杯)が出土した。

2SK030 (Fig.43, Pla.17)

調査区C内南部で検出した不定形を土坑で、長軸2.18m、短軸1.75m、深さ0.10mを測る。遺構底部からは0.15～0.32m位の石を確認したが、加工や使用の痕跡は認められなかった。遺物は土師器(土鍋・掛鉢)が出土している。

2SK035 (Fig.43, Pla.17)

調査区C内南部で検出した不定形を土坑で、遺構の「掛鉢」2SK044に隣接するが途中増設を受けていたため切り合いは不明である。軸0.92m、深さ0.16mを測る。遺構底部からは0.15m位の石を確認したが、加工や使用の痕跡は認められなかった。遺物は須恵器(掛鉢)、土師器(土鍋)が出土している。

2SK055 (Fig.43)

調査区B内北西部で検出した隅丸長方形の土坑である。掘土は上層から淡茶色土、淡黒茶色土の2層で、長軸1.76m、短軸1.16m、深さ0.23mを測る。遺物は土師器(杯)が増かに出土した。

2SK065 (Fig.43, Pla.18)

調査区B内東部中央で検出した土坑で平面プランは不整形円形状を呈する。長軸3.06m、短軸2.12m、深さ0.45mを測り、掘土は黒茶色土を基調とした2層である。遺物は土師器(片)、石器(ヤズカイノ刺片)が出土している。

2SK075 (Fig.43, Pla.18)

2SK065の北部で検出した隅丸長方形の土坑で長軸4.64m、短軸1.54mを測る。遺構内層は北部と南部で畚みがあり、北部の深さは約0.40m、南部の深さは約0.65mを測る。遺物は須恵器(鉢)、土師器(片)が出土している。

2SK076 (Fig.43, Pla.19)

調査区C内北東部で検出し、遺構の北部は擾乱を受けている。軸0.99m、深さ0.40mを掘り、ほぼ定形の土師器(小皿)が検出土した。掘土は黒茶色土であった。

2SK085 (Fig.43)

調査区C内北西部中央で検出し、煙丸長方形の掘土坑である。長軸5.46m、短軸3.57m、深さ0.10～0.20mを掘り、掘土は上層から淡灰茶色土、灰茶色土の2層であった。遺物は須恵器(鉢)、土師器(片)が出土した。

2SK095 (Fig.43)

調査区C内北西部中央で検出した土坑で平面プランは不整形円形状を呈する。軸2.83m、深さ0.25mを掘り、掘土は淡黒茶色土を基調とする2層であった。遺物は須恵器(杯)、土師器(片)が出土した。

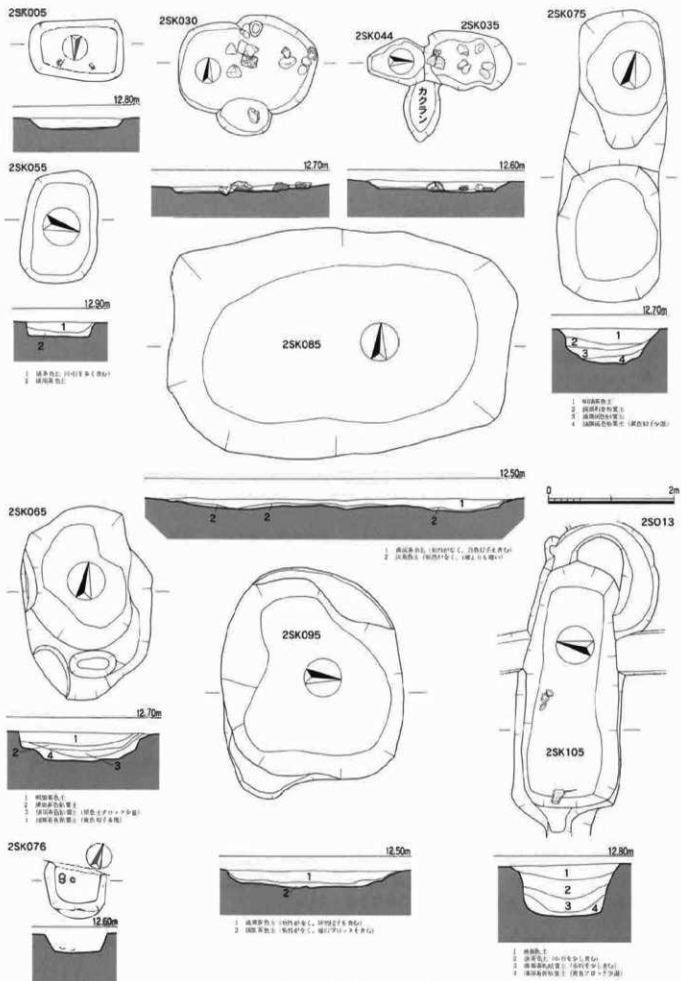


Fig.43 土坑実測図 (1/60)

2SK105 (Fig.43, Pla.19)

調査区B内北西部で検出した隅丸長方形の土坑である。遺構の東部は擾乱である2S-013に切られ、土は赤茶色土、淡黒茶色粘質土を基調とした4層でレンス状に堆積する。遺構底面はほぼフラットで、幅縁φ2m、短軸1.75m、深さ0.81mを測る。遺物は土師器(小皿・坏)、陶器(片)等が出土した。

(3) 出土遺物

竪立柱建物

2SB215—P3 (Fig.44, Pla.20)

須恵器

鉢 (1) 口縁部の細片で、口径28.00cmを復原する。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデ、内面は煤が付着しているため調整不明であるが、僅かに刷毛目調整を認める。胎土は微砂粒を多く含む。

2SB255—P7 (Fig.44, Pla.20)

土師器

火鉢 (2) 口縁部の細片である。外面には煤が濃く付着し、内外面はヨコナデ調整である。

2SD060 (Fig.45, Pla.20)

土師器

土鍋 (3・4) 3は素口縁で胴体には煤が厚く付着する。口縁端部はヨコナデ、内面は横方向の細かい刷毛目、口縁部外面は指押さえ、体部外面は斜め方向の刷毛目が施される。4は玉縁状口縁で外面には煤が薄く付着する。口縁端部は工具によるナデ、内面は横方向の細かい刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は指押さえ、体部外面下位はケズリ調整が施される。

瓦質土器

火鉢 (5) 底部の破片で、底径36.20cmを復原する。逆台形状の脚を有し、外面には三角状の断面形を呈した突帯を2条貼り付ける。調整は体部内外面がヨコナデ、底部内外面は刷毛目である。

常滑属陶器

甕 (6) 口縁部はN字状を呈する。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ後一部ヨコナデ、体部外面はヘラケズリの調整を施す。

石製品

砥石 (7) 石材は不明で下部が欠損する。全面を使用している。

2SD070 (Fig.45, Pla.20)

土師器

小皿 (8・9) 共に内外面ヨコナデで、外底は糸切りである。8は口径8.90cm、底径5.50cm、器高1.80cm、9は口径9.10cm、底径5.30cm、器高1.60~2.10cmを測る。

土鍋 (10) 玉縁状口縁を呈した細片である。口縁端部はヨコナデ、内面は工具によるナデ、外面は煤が厚く付着しているため調整不明である。

火鉢 (11) 口縁部の細片で、口径25.8cmを復原する。外面には三角状の断面形を呈した突帯3条とボタノオIの残骸が貼り付けられている。内外面はヨコナデ調整である。

土鉢 (12) 完形で長さ3.30cm、最大外径1.40cm、内径0.30cmを測る。

陶器

甕 (13) 口縁部の細片で、口径22.00cmを復原する。淡灰色の基地に濃緑色の釉を濃く施し、表面には貫入が認められる。胎土は1~2mm程度の砂粒を多く含む。

染付

皿 (14) 底部の細片で、高径7.50cmを復原する。灰白色の基地にやや青みがかつた透明釉を施すが、



Fig.44 2SB215・255出土土器実測図 (1/3)

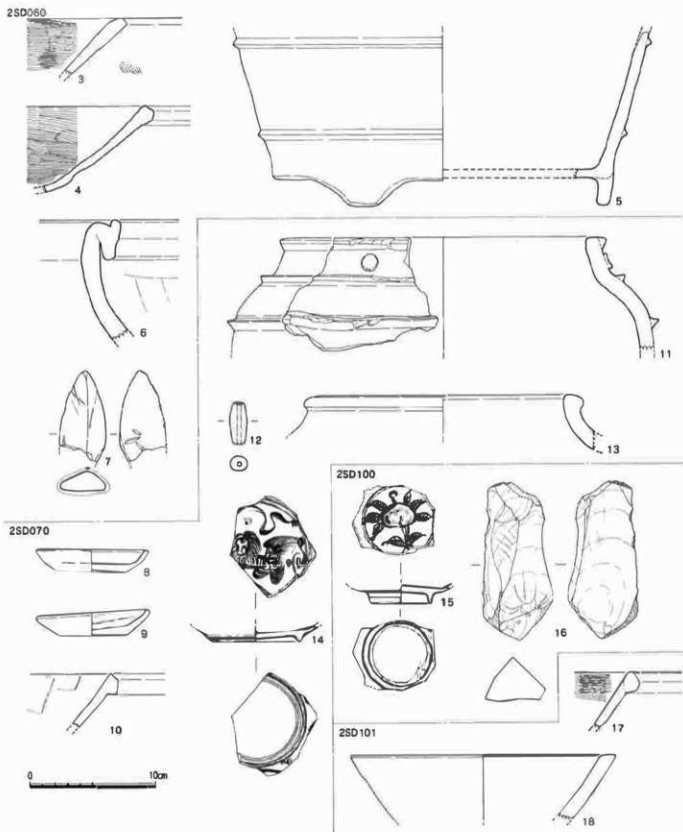


Fig.45 溝出土遺物実測図 (1/3)

壁付けは露胎である。見込みにはやややくすんだ呉須で花文を描く。

2SD100 (Fig.45, Pla.20・21)

染付

碗 (15) 底部の細片で、高台径4.80cmを測る。乳白色の素地にやや青みがかかった透明釉を施すが、壁付けは露胎である。見込みにはやくすんだ呉須で花文を描き、高台内には筋が施されている。

石葺

石核 (16) 石材はサヌカイトで、佐賀産と思われる。かなり風化しており、表面下位には加工痕が認められる。

2S_D01 (Fig.45, Pla.21)

土師器

土鍋 (17) 玉縁状口縁を呈した細片である。口縁端部はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目、外面は指押さえである。

火鉢 (18) 口縁部の細片で、口径21.00cmを復原する。内外面はヨコナデ調整である。

井戸

2SE010 (Fig.46, Pla.21)

土師器

小皿 (19) 口径8.60cm、底径6.20cm、器高1.60cmを復原する。内外面はヨコナデで、外底は糸切り。

土鍋 (20) 玉縁状口縁を呈した細片である。口縁端部はヨコナデで、外面は煤が厚く付着しているため調整不明である。

茶釜 (21・22) 21は口縁部の細片で、口径20.50cmを測る。調整は口縁端部ヨコナデ、口縁部内外面に刷毛目、肩部内面指押さえ、体部外面ナデ、体部内面ヨコナデである。22は体部の細片である。外面には鈎を貼り付け、鈎の下面は煤が厚く付着する。内面は体部上位は横方向の刷毛目、下位はヨコナデの調整で、外面は鈎上面及び体部上位がヨコナデ、下位は横方向の刷毛目の調整を施す。

瓦質土器

鉢 (23) 口縁部は紫口縁でやや外反する。内面はやや細かい刷毛目調整であるが、外面は煤が付着し、表面刷毛目のため調整不明である。

須磨器

擂鉢 (24) 底部の細片で、底径16.00cmを復原する。7本単位の擂目を体部及び底部の内面に施す。胎土に砂粒を多く含む。

石製品

挽臼 (25・26) 25は上臼で底径は26.00cm、高さ9.50cmを測る。側面に挽き手用の棒差し口を施し、楕円には窪目を施す。26は下臼の取出口の先端部で断面は凹形装を呈する。最大径10.10cm、高さ5.95cmを測る。

石塔 (27) 石材は凝灰岩製で塔身の一部と思われる。表面・側面の中央部には「月輪」、表面の右下には「月」が工具で彫られている。

2SE020 (Fig.47, Pla.22)

土師器

土鍋 (28) 玉縁状口縁を呈した細片である。口縁部はヨコナデ、体部内面は刷毛目後ナデ、体部外面は煤が厚く付着しており調整不明である。

擂鉢 (29) 口縁部の細片で、口径27.00cmを測る。体部内面は横方向の細かい刷毛目後に放射状に窪目を施し、口縁端部から体部外面にかけては刷毛目の調整を施す。

瓦質土器

鉢 (30・31) 共に口縁端部に沈線を呈し、外面には煤が厚く付着する。31は口縁端部内面に面を作る。

青磁

皿 (32) 口径11.40cm、高台径4.40cm、器高3.30cmを復原する。胎土に砂粒を多く含む暗灰色の素地に刷

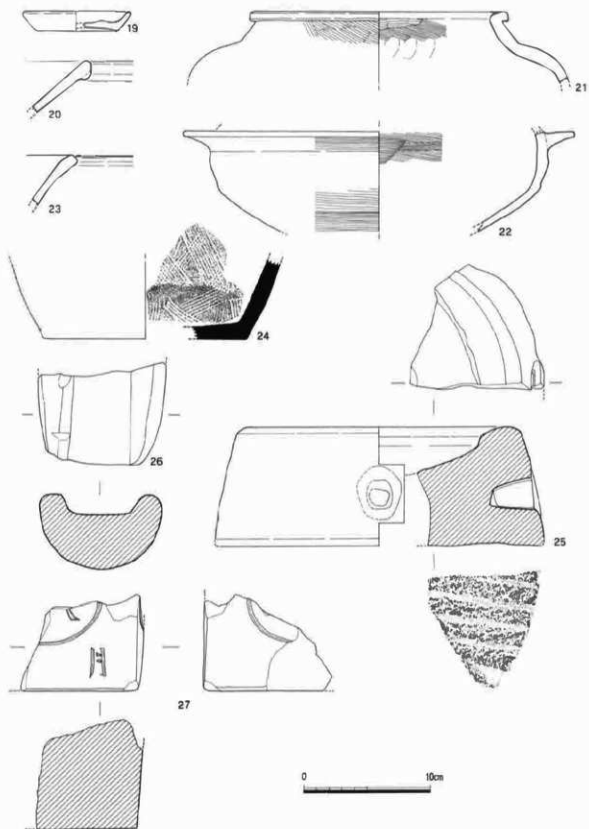


Fig.46 2SE010出土遺物実測図 (1/3)

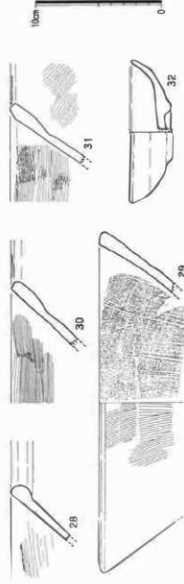


Fig.47 2SE020出土器実測図 (1/3)

緑色の透明釉を内外面に施すのが、量付けは露胎である。朝鮮系青磁の可能性がある。

土坑

2SK005 (Fig.48, Pla.22)

土師器

小皿 (33) 口径9.00cm、底径6.00cm、器高1.90cmを復原し、外底は糸切りで内外面はヨコナデである。
 坏 (34~36) 34~36は口径13.15~14.60cm、底径10.00~10.90cm、器高2.55~3.00cmを復原し、外底は糸切りで内外面はヨコナデである。36は内面に磁が薄く付着している。

2SK023—カクラン (Fig.48, Pla.22)

土師器

小皿 (37~39) 37~39は口径6.80~8.90cm、底径4.80~5.90cm、器高1.40~2.10cmを測り、外底は糸切りで内外面はヨコナデである。

2SK025 (Fig.48, Pla.22)

土師器

小皿 (40) 口径7.80cm、底径5.90cm、器高1.70cmを復原し、外底は糸切りで内外面はヨコナデである。口縁部の一部に油煙痕と思われる磁が厚く付着する。

坏 41・42) 41は口径11.00cm、底径4.30cm、器高3.10cm、42は口径11.00cm、底径4.20cm、器高3.20cmを復原し、共に外底は糸切り、内外面はヨコナデである。

銅製品

古銭 (43~46) 何れも完形の「沘武通寶」(1368年初鋳)である。銭文は真書の書体で、43は普通に「新」があるがその他の背面は無文である。径は2.15~2.35cmを測る。

2SK030 (Fig.48, Pla.22)

土師器

鉢 (47) 口縁端部に沈線を呈する。内面及び底面外縁は横方向の細かい刷毛目、口縁部内外面はヨコナデ、体部外縁は縦方向の細かい刷毛目を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部外縁は斜め方向に指押さえ、体部外下位はヘラケズリ、外底はナデの調整である。

2SK035 (Fig.48, Pla.22)

須恵器

擂鉢 (48) 口径29.00cm、底径15.20cm、器高13.15cmを復原する。内面は9本単位の捕目を放射状に、内底は不整凹状に部目を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部外縁は斜め方向に指押さえ、体部外下位はヘラケズリ、外底はナデの調整である。

2SK037 (Fig.48, Pla.22)

土師器

鉢 (49) 玉縁状口縁を呈し、口径50.00cmを復原する。口縁部及び体部の内面は横方向の細かい刷毛目、底部外縁は刷毛目、口縁部内外面はヨコナデ、体部外縁は斜め方向の刷毛目、体部外下位は刷

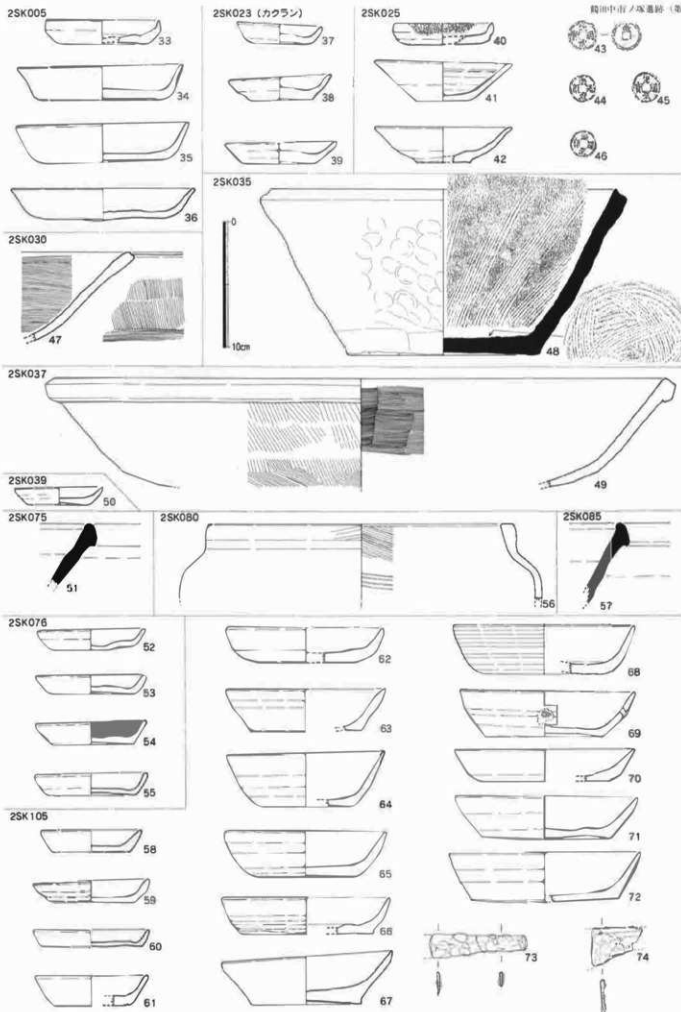


Fig.48 土坑出土遺物実測図及び古銭拓影 (1/3)

毛目埃ヨコナテの調整である。外面には煤が付着する。

2SK039 (Fig.48, Pla.22)

土師器

小皿 (50) 口径7.00cm、底径5.00cm、器高1.40cmを測る。外底は糸切りで、内外面はヨコナテである。

2SK075 (Fig.48, Pla.22)

栗播系須臾器

鉢 (51) 玉縁状口縁を呈し、内外面はヨコナテである。胎土は2mm程度の砂粒、微砂粒を多く含む、黒色粒子を少し含む。

2SK076 (Fig.48, Pla.23)

土師器

小皿 (52~55) 52~55は口径8.70~9.00cm、底径6.40~6.90cm、器高1.60~1.80cmを測る。外底は糸切りで、内外面はヨコナテである。

2SK080 (Fig.48, Pla.23)

土師器

火鉢 (56) 口径24.00cmを復原する。口縁部内外面は柳毛目、頸部内外面はヨコナテ、肩部内面は柳毛目、肩部外面はヨコナテ後脚毛目の調整を施す。内面には煤が付着する。

2SK085 (Fig.48, Pla.23)

栗播系須臾器

鉢 (57) 玉縁状口縁を呈し、内外面はヨコナテである。胎土は2mm程度の砂粒、微砂粒を多く含む、黒色粒子を少し含む。

2SK105 (Fig.48, Pla.23)

土師器

小皿 (58~61) 58~61は口径8.00~9.20cm、底径5.90~7.80cm、器高1.40~2.25cmを復原する。外底は糸切りであるが、60には板状圧痕が認められる。何れも内外面はヨコナテの調整である。

坪 (62~72) 62~72は口径12.60~15.20cm、底径7.40~11.80cm、器高2.60~4.20cmを復原する。62~71の外底は回転糸切りであるが、72は静止の状態で糸切りを行っているようである。何れも内外面はヨコナテの調整で、69の体部には焼成後1次の穿孔を施している。

鉄製品

刀子 (73) 茎尻から刃部にかけての軸片で先端は欠損する。現存長7.25cmを測り、片刃か両刃かの区別は不明である。

鎌 (74) 現存長4.10cmを測り、鎌の断面は凸状を呈する。

ビット

2SP027 (Fig.49, Pla.23)

土師器

小皿 (75) 口径9.40cm、底径8.80cm、器高2.00cmを測る。内外面はヨコナテ、外底は静止の状態で糸切りを行っているようである。

2SP052 (Fig.49, Pla.24)

土師器

小皿 (76) 口径9.00cm、底径7.20cm、器高1.65cmを測る。内外面はヨコナテ、外底は糸切りである。

2SP053 (Fig.49, Pla.24)

土師器

土師 (77) 長さ4.45cm、外径0.80cm、内径0.25cmを測る。

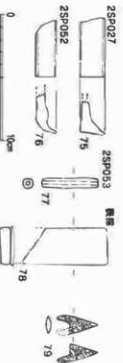


Fig.49 その他の出土遺物実測図 (1/3)

表掘 (Fig.49, Pla.24)

石製品

- 砥石 (78) 石材は泥岩製で、表面を砥面として使用している。現存長は6.70cmを測る。
石槌 (79) 石材は黒曜石製で、扱りが深く片側面を欠損する。

(4) 小結

調査の結果、掘立柱建物22棟、溝5条、井戸3基、土坑10基等が確認された。

掘立柱建物

掘立柱建物は調査区Cから東西棟建物13棟、南北棟建物9棟が確認されており、遺構のプランは後者の「W.まとも (Tab.4)」に表した。当遺跡の各掘立柱建物は、鶴田中戸ノ塚遺跡 (第1次調査) で確認された掘立柱建物群が示す規模とはほぼ同等であることから、相互に関連した一連の遺構として認められ、また、調査区C内の西側に集中して配置されていることから、地形的な規制がかかっていたことが窺える。掘立柱建物から出土した遺物は、僅かに25B215—P3から東播系須恵器 (片)、25B255—P7から土師器 (火鉢) が認められているのみであるため、時期の特定には至っていないが、遺物に付設する25D101 (雨落ち溝) からは14C代を比定する遺物が確認されており、参考資料として提示できよう。

さて、25B295は建物の西辺及び南辺を沿うように倒伏し確認された雨落ち溝 (25D100) を有する掘立柱建物である。注目されるのは、25B295が火災を受けた建物であったことである。その理由として、雨落ち溝である25D100からは多量の焼土や小石が認められていること、建物を構成する各柱の周囲には焼かぬながら炭化物を含んでいたこと、また、建て終えを示唆する規模の柱穴が確認されていることによる。調査において火災建物として認識されるものは当遺跡のみであった。

今回の調査では、掘立柱建物の柱穴を意図的に半掘することで、柱穴の構造が顕著に覆えた。全般的にみると、柱穴の平面プランは円形または円形形状を呈し、確認された柱穴は10～15cm程度を測る。一部の柱穴内部では、柱穴の下端にあたる柱穴底部に砂質土や粘質土、粘土が敷き詰められており、柱を支える周辺の埴土は粗いながらも風化状に粘質土を詰めている状況であった。

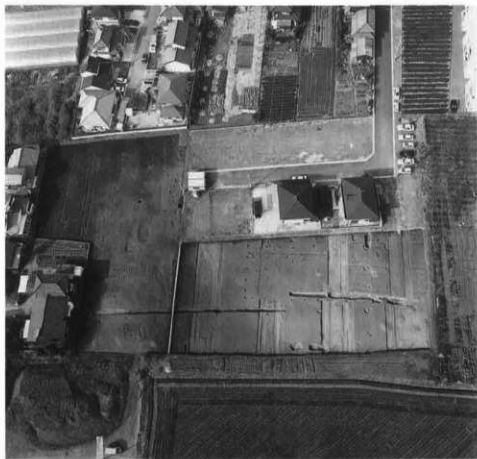
溝

調査区B及びC内からは、南北方向には13の25D050・060・070が確認された。各溝の配置状況は、調査区北部に25D060 (N—7° 41' 18" —W) が位置し、その南部に25D050が付設される。これより東方へ約4mの間隔をあけて、同位を示す25D070が調査区内を貫通する。出土遺物のみでみると25D060からは14C後半に比定される常滑産 (楚)、25D070からは16C後半に比定される染付 (皿) が認められている。整理すると、溝は掘立柱建物とはほぼ同位を示し、また同時期に比定できることから、一連の集落に設けられた遺構であったことが理解でき、溝の性格は集落を囲んだ区画溝であった可能性が考えられる。

井戸

3基 (25E010・020・045) を確認し、井戸の配置状況は鶴田中戸ノ塚遺跡 (第1次調査) に似ている。3基の井戸は調査区C内のほぼ中央を南北方向に縦列しており、井戸に不可欠な飲み水の水源は、井戸が配置するライン上にあったと推測される。

ところで、井戸の調査はその特質を構造から大変危険な作業が伴う。市内で行った発掘調査からも、これまで幾つかの井戸が検出されたが、その大半は危険防止のため掘進までには至っていない。そこで、今回の調査では全ての作業が終了した後に重機で半掘することを試みた。対象としたのは25E010で、半掘したところでは、井戸上部の状況が顕著に覆えた。とりわけ注目されるのは、井戸壁を構成している埴土の状況である。地山は標高11.80～12.60mで粘土、標高11.67～11.80mで粘土層、標高11.33～11.67mで砂質土、標高10.90～11.33mで砂質土+砂土、標高10.90m以下では赤茶色土を呈し、井戸壁においては西方で標高11.40m付近、東方で標高10.90m付近で扱られたように崩落していた。つまり、地山が粘質土から砂質土へと移行したレベルにおいて飲み水があったことが理解でき、水源レベルは標高10.90～11.40mでであったと推測される。井戸からは14C代を主体とした遺物が認められている。



鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）調査区全景（空中写真：真上から）



鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）掘立柱建物群（空中写真：真上から）

3. 駒田中市ノ塚遺跡（第3次調査）

(1) はじめに (Fig.50)

当遺跡は京阪市大字駒田中市ノ塚A17-1外に所在し、標高12.5m位の低段段丘上に立地する。発掘調査は市営住宅駒田団地建設事業に伴い、建物部分である1,777㎡を交換した。調査期間は平成7年10月25日から平成8年7月31日まで実施し、この間、重機による表土除去（有限会社福海建設に委託）、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影（空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託）等を行った。発掘調査及び写真撮影は小林勇作、遺構の実測は小林、永田佳子、江崎真直、奥村太郎が担当した。

調査は排土置き場に制限があったことから前半部分を「東区」、後半部分を「西区」に分けて実施し、調査区内には掘列状遺構、掘立柱建物、溝、井戸、遺張状遺構、土壁等が確認されたが、遺構の大半は、発掘前に施されていた深溝によって著しく擾乱を受けていた。

(2) 掘出遺構

掘列状遺構

3SA120 (Fig.51)

調査区内のほぼ中央部から掘出した南北方向の掘列状遺構で、P1-P7 (6間分：10.05m) を確認した。掘形は掘立柱遺構と類似するためその可能性も捨て切れないが、掘削からは関連する遺構が認められなかったので掘列状遺構とした。柱穴の平面ラジスはほぼ円形を呈し、P1-P2間1.82m、P2-P3間1.80m、P3-P4間1.79m、P4-P5間1.85m、P5-P6間1.87m、P6-P7間0.92mを測る。方位はN-7°52'59"-Wを示す。

3SB110 (Fig.51)

調査区内の北西部で掘出した東西棟の掘立柱建物で、柱穴 (P1-P10) の平面ラジスは円形または楕円形を呈する。建物の規模は東西4間 (8.37m) ×南北1間 (3.95~4.25m)、建物面積34.23㎡ (与10.27坪) で、南北軸はN-10°48'29"-Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間4.25m、P2-P3間2.35m、P3-P4間1.90m、P4-P5間0.95m、P5-P6間2.07m、P6-P7間3.95m、P7-P8間2.03m、P8-P9間2.10m、P9-P10間1.97m、P10-P11間2.27mを測る。P3・7-10においては径0.15~0.25mの柱頭跡を確認し、遺物はP2で施釉陶器(白磁)、P3で灰磁器(灰)、P4で土師器(鳥形土製品)が出土している。



Fig.50 駒田中市ノ塚遺跡（第3次調査）調査地点位置図（1/2,500）

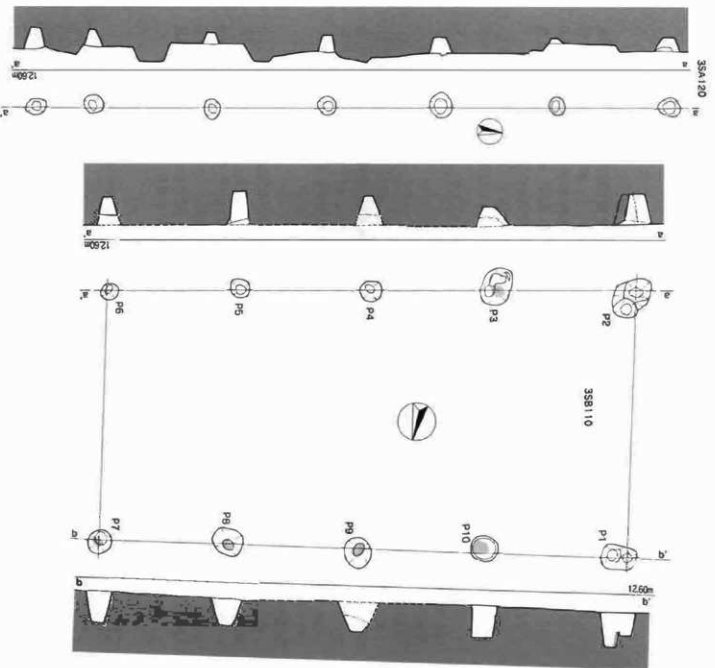


Fig.51 3SA120、3SB110実測図 (1/60)

3SB111 (Fig.52)

調査区内の北西部で検出した東西棟の独立柱建物で、柱穴 (P1~P12) の平面プランは円形または楕円形を示す。建物の規模は東西4間 (7.85~8.07m) ×南北2間 (5.05~5.32m)、建物面積40.16㎡ (±12.06坪) で、南北軸はN-11° 29' 20" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.77m、P2-P3間2.45m、P3-P4間2.05m、P4-P5間1.90m、P5-P6間2.12m、P6-P7間2.00m、P7-P8間2.65m、P8-P9間2.40m、P9-P10間2.05m、P10-P11間2.00m、P11-P12間1.75m、P12-P1間2.05mを測り、P4・P11においては径0.12~0.25mの柱痕跡を確認した。P5~7・9~12においては同等の柱穴が深接して2穴確認されており、少なくとも1回以上の修復等が施されている可能性が考えられる。

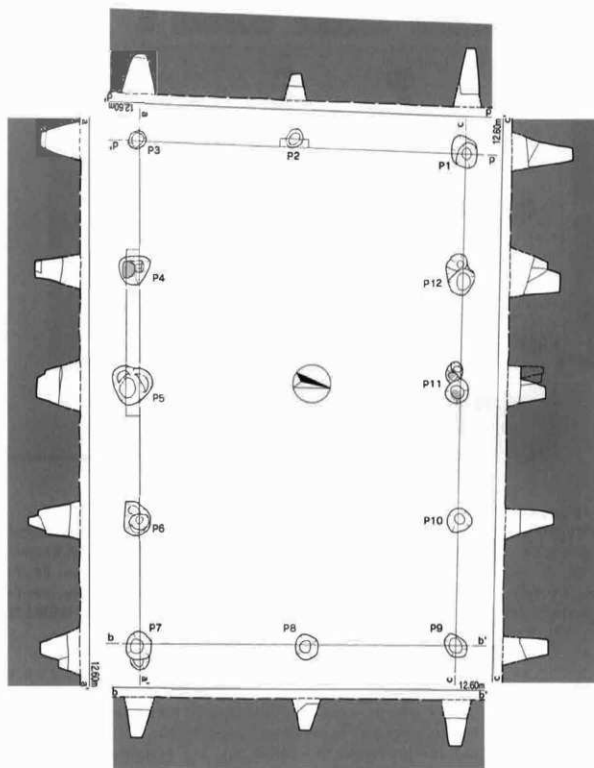


Fig.52 3SB111実測図 (1/60)

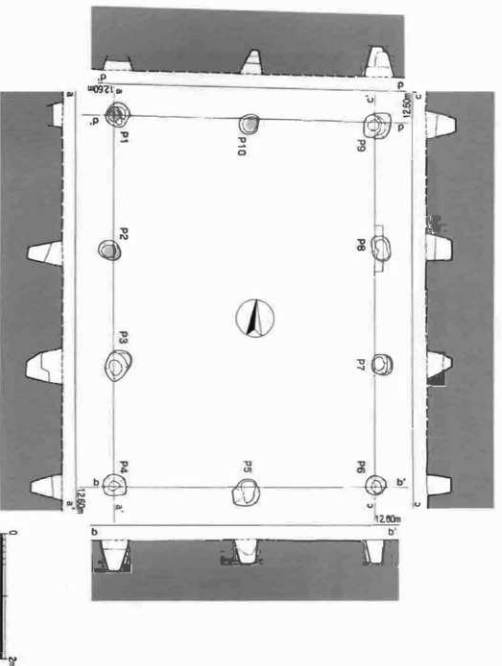


Fig. 53 3SB112家構図 (1/60)

3SB112 (Fig.53)

調査区内の中央部で検出した南北棟の掘立柱建物で、柱穴 (P1～P10) の平面プランは円形または楕円形を呈する。建物の規模は東西2間 (4.12～4.18m) × 南北3間 (5.73～5.93m)、建物面積24.08㎡ (47.23坪) で、南北軸はN—5° 48' 56″ —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間2.22m、P2—P3間1.83m、P3—P4間1.88m、P4—P5間2.15m、P5—P6間2.03m、P6—P7間1.95m、P7—P8間1.78m、P8—P9間2.00m、P9—P10間1.95m、P10—P11間2.17mを測り、P1・2・10においては径0.15～0.26mの柱痕跡を確認した。なお、P1はレベル数値に差が 5あり、立面図では上縁のみを示した。

3SB113 (Fig.54)

調査区内の西部で検出した東西棟の掘立柱建物で、柱穴 (P1～P12) の平面プランは円形または楕円形を呈する。建物の規模は東西3間 (8.59～8.62m) × 南北2間 (4.80～4.85m)、建物面積40.80㎡ (97.1229坪) で、南北軸はN—11° 18' 35″ —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間2.50m、P2—P3間2.30m、P3—P4間2.27m、P4—P5間2.00m、P5—P6間2.15m、P6—P7間2.17m、P7—P8間2.55m、P8—P9間2.32m、P9—P10間2.20m、P10—P11間2.20m、P11—P12間1.75m、P12—P1間2.47mを測り、P1・4—7・9においては径0.15～0.32mの柱痕跡を確認した。

3SB114 (Fig.55)

調査区内の西部で検出した東西棟の掘立柱建物で、柱穴 (P1～P10) の平面プランは円形または楕円形を呈する。建物の規模は東西3間 (7.15～7.27m) × 南北2間 (3.56～3.62m)、建物面積35.91㎡ (47.78坪) で、南北軸はN—2° 31' 14″ —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP6—P7間1.86m、P7—P8間1.76m、P8—P9間2.35m、P9—P10間2.43m、P10—P11間2.37mを測り、P10においては径0.15mの柱痕跡を確認した。P2は擾乱、P4・5は3SR055によって消失し、P1から土師器 (小皿) が出土した。

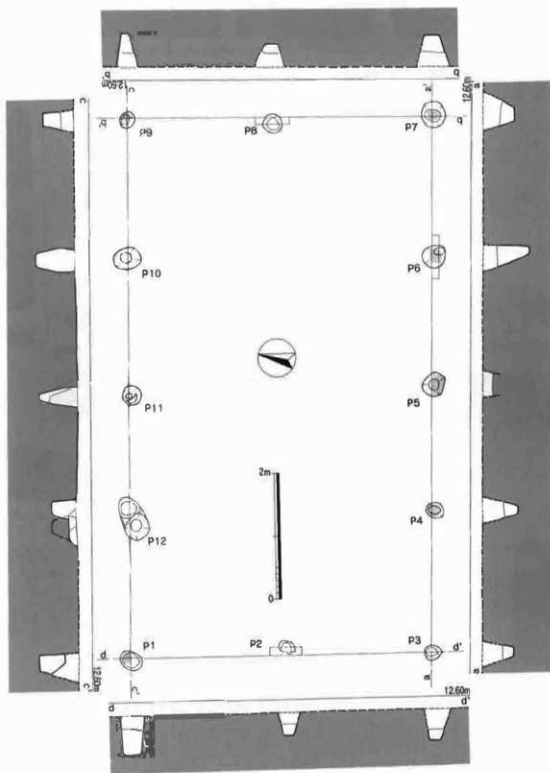


Fig.54 3SB113実測図 (1/60)

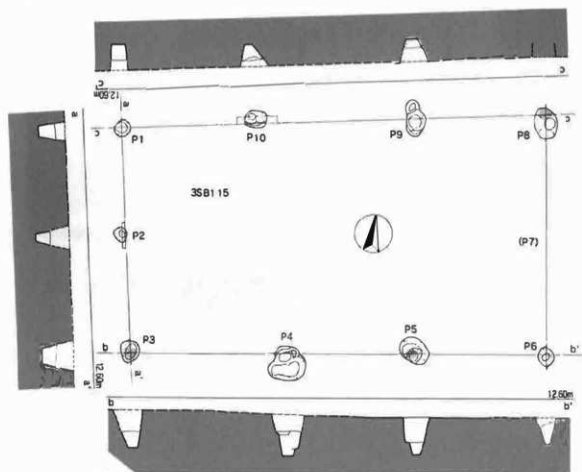
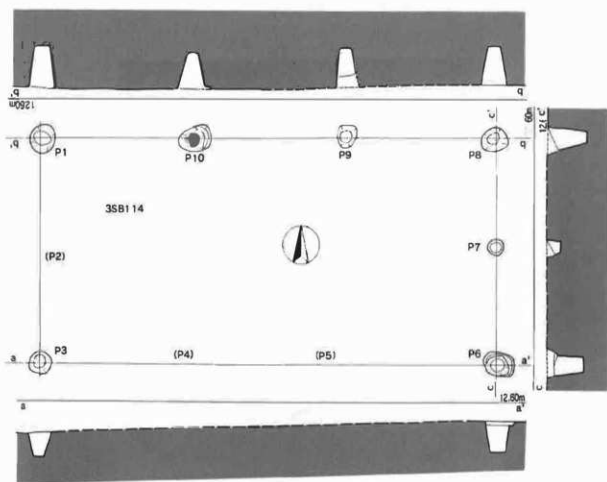


Fig.55 3SB114・115実測図 (1/60)

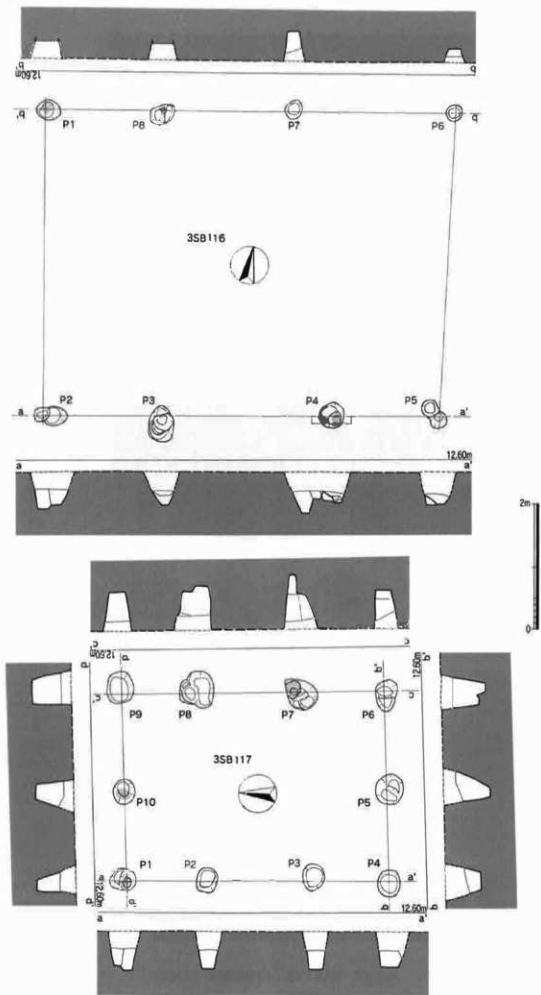


Fig.56 3SB116·117實測圖 (1/60)

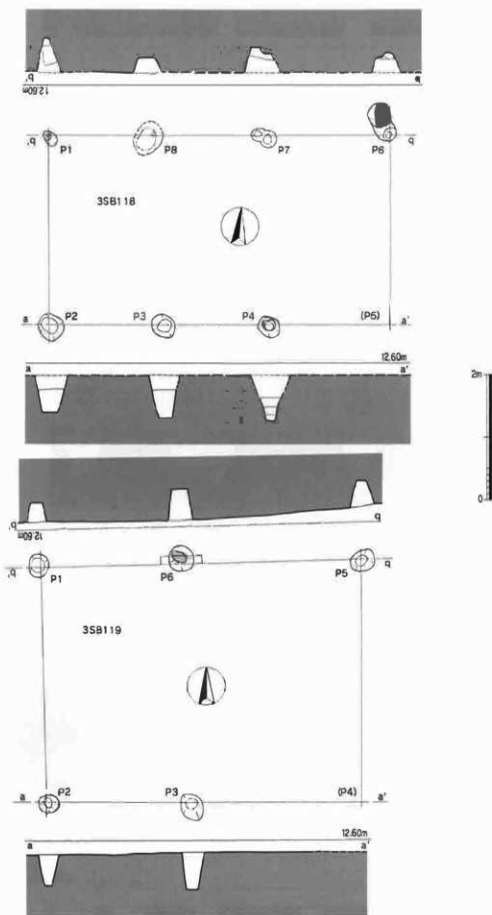


Fig.57 3SB118・119実測図 (1/60)

3SB115 (Fig.55)

調査区内の南西部で検出した東西棟の擬立柱建物で、柱穴 (P1—P10) の平面プランは円形または楕円形を示す。建物の規模は東西3間 (6.58—6.75m) ×南北2間 (3.56—3.80m)、建物面積24.58㎡ (47.28坪) で、南北軸はN—10° 07' 53" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間1.68m、P2—P3間1.88m、P3—P4間2.47m、P4—P5間2.03m、P5—P6間2.08m、P9—P10間2.62m、P10—P11間2.03mを測り、P3—5・8においては径0.15—0.22mの柱痕跡を確認した。なお、P8はレベル数値に誤りがあり、立面図では上場線のみを示した。

3SB116 (Fig.56)

調査区内の南西部で検出した東西棟の擬立柱建物で、柱穴 (P1—P8) の平面プランは円形または楕円形を示す。建物の規模は東西2間 (6.10—6.48m) ×南北1間 (4.85m)、建物面積30.97㎡ (与9.30坪) で、南北軸はN—8° 38' 43" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間4.85m、P2—P3間1.75m、P3—P4間2.20m、P4—P5間2.15m、P5—P6間4.85m、P6—P7間2.57m、P7—P8間2.06m、P8—P9間1.85mを測り、P1—4・8においては径0.14—0.20mの柱痕跡を確認した。なお、P1・8はレベル数値に誤りがあり、立面図では上場線のみを示した。

3SB117 (Fig.56)

調査区内の南西部で検出した南北棟の擬立柱建物で、柱穴 (P1—P10) の平面プランは円形または楕円形を示す。建物の規模は東西2間 (3.07—3.09m) ×南北3間 (4.18—4.20m)、建物面積12.42㎡ (与3.72坪) で、南北軸はN—4° 45' 49" —Wの真立を示す。更に各柱穴間はP1—P2間1.29m、P2—P3間1.72m、P3—P4間1.17m、P4—P5間1.42m、P5—P6間1.67m、P6—P7間1.45m、P7—P8間1.65m、P8—P9間1.10m、P9—P10間1.60m、P10—P11間1.47mを測り、P1・7・10においては径0.15—0.25mの柱痕跡を確認した。

3SB118 (Fig.57)

調査区内の南西部で検出した東西棟の擬立柱建物で、柱穴 (P1—P8) の平面プランは円形または楕円形を示す。建物の規模は東西3間 (5.44m) ×南北1間 (3.00m)、建物面積16.14㎡ (与4.84坪) で、南北軸はN—3° 54' 01" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間3.00m、P2—P3間1.85m、P3—P4間1.65m、P6—P7間1.95m、P7—P8間1.92m、P8—P11間1.57mを測り、P8においては径0.12mの柱痕跡を確認した。P5は複乱によって消失している。

3SB119 (Fig.57)

調査区内中央の南西部で検出した東西棟の擬立柱建物で、柱穴 (P1—P6) の平面プランは円形または楕円形を示す。建物の規模は東西2間 (5.15m) ×南北1間 (3.70m)、建物面積19.11㎡ (与5.73坪) で、南北軸はN—1° 30' 26" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間3.70m、P2—P3間2.27m、P5—P6間2.90m、P6—P11間2.25mを測り、P6においては径0.18m前後の柱痕跡を確認した。P4はSE0201によって消失している。

遺**3SD001 (Fig.58, Pls.25)**

調査区内の東端で確認したが、掘削操作に伴う深溝 (複乱) を著しく受けていた。南北方向の溝で、検出長は約25.00m、上幅1.50—2.20m、下幅0.50—0.80m、残存する遺溝の深さは0.60—1.07mを測る。溝の断面形は北部でU字状、中部で逆台形を示し、溝底はほぼフラットを採得であった。掘土は黒赤色土を基調とし、遺物は土師器 (小皿・土師・片)、磁器 (片)、陶器 (片) が出土した。

3SD004 (Fig.58)

調査区内の東部で確認した南北方向の溝である。検出長は約10.50m、上幅0.45m前後、下幅0.30m前後、残存する遺溝の深さは0.23m前後を測る。溝の断面形は逆台形を示し、溝底はほぼフラットを採得であった。遺物は土師器 (棒状土製品・火鉢)、磁器 (皿・碗・片)、陶器 (葉・片)、瓦・瓦製品等が出土した。

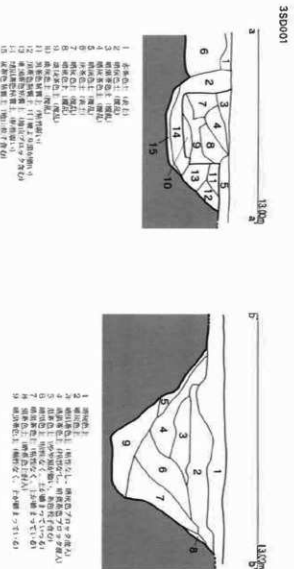


Fig. 58 溝土層断面実測図 (1/40)

3SD005 (Fig.58)

調査区内の単体で確認した南北方向の溝で3SD004に隣接する。検出長は約4.60m、上幅0.95m前後、下幅0.50m前後、残存する遺物の深さは0.30m前後を測る。溝の断面形は逆U字形を呈し、溝底はほぼフラットな状態であった。遺物は土師器（片）が出土した。

井戸

3SE020 (付図⑦, Pla.26)

調査区内中央の南端で検出した素堀りの井戸である。平面プランは楕円形状を呈し、径1.90~2.10mを測る。遺構検出面から約1.00mでは黒茶色土を基調とした埋土であったが、井戸内における壁が砂層に変わりもろくなっている状況であったため、危険防止上掘削を断念した。出土遺物は須恵器（鉢）、土師器（小皿・土鍋・火鉢・片）、染付（片）、石製品（不詳）が認められた。

3SE040 (付図⑧)

調査区内の北西部で検出した素堀りの井戸であるが、調査区境界付近で確認したため遺構検出面から約0.50mまで掘削した。（径は推定で1.80mを測るものと思われる。遺物は土師器（土鍋・指鉢・火鉢・片）、鉄製品が認められた。

3SE045 (付図⑨, Pla.26)

調査区内の中央部で検出した素堀りの井戸である。平面プランは円形形状を呈し、径1.10m前後を測る。

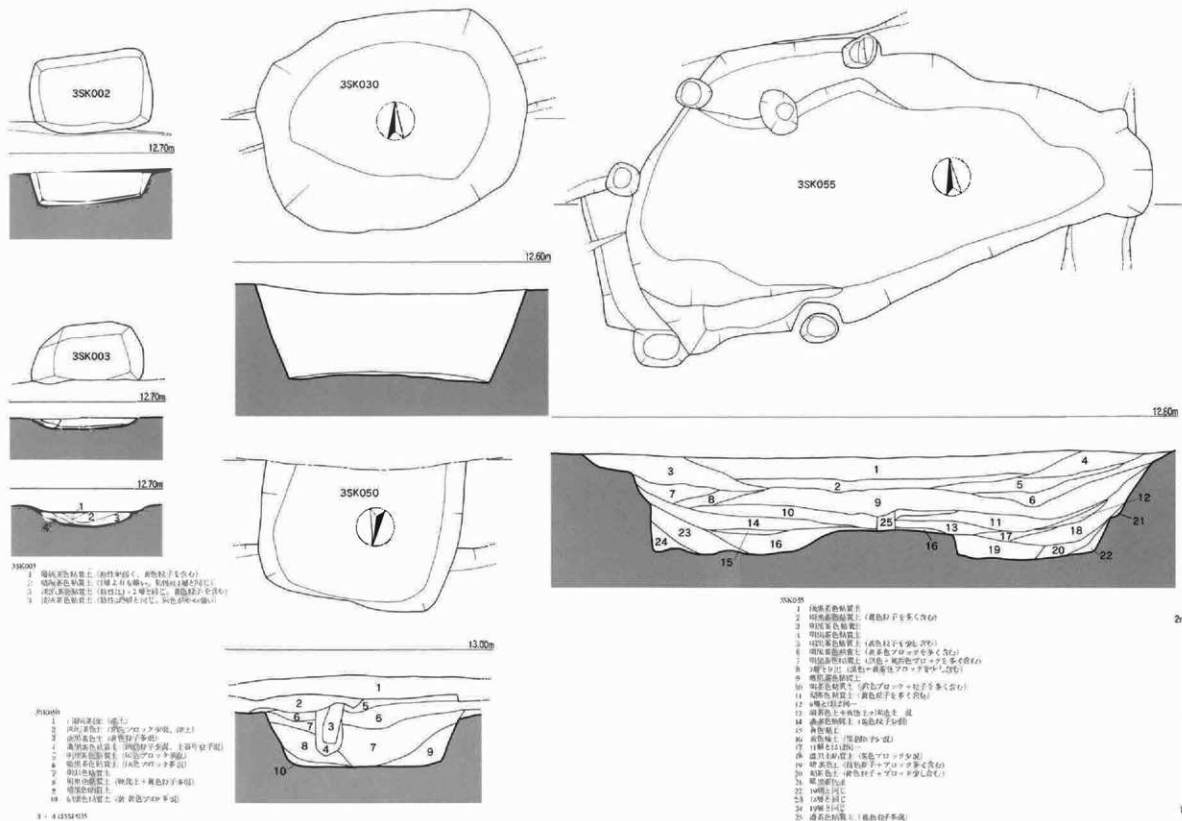


Fig.60 土坑実測図 (1/40)

遺構検出前から約1,000mのレベルでは大小様々な石が多量に混入して確認され、これまでの黒茶色土であった。ところが井戸内における壁が砂層に覆わり、もろくなっている状況であったため、これより下位は危険防止上掘削を断念した。出土遺物は須置器（片）、土師器（溝埴・丸鉢・片）、瓦質土器（片）が認められた。

道路状遺構

道路状遺構を説明するにあたって、まず遺構状遺構に付随する溝埴（溝埴・路相等の状況）について先述する。

西側側溝

3SD060 (Fig.59, Plu.25・27～30)

当溝は西側側溝3条の内の西溝にあたり、中央溝である3SD070Hに切られる。溝は攪乱を受けているものの残存状況は良く、検出長約24.30m、上幅0.40～1.15m、下幅0.08～0.50m、残存する溝の深さ0.42～0.58mを測る。溝の断面はU字状ないしは逆台形状を呈し、溝内における埋土からは硬化土は確認されていない。出土遺物は須置器（壺）、土師器（片）を認めている。

3SD070 (Fig.59, Plu.25・27～30)

当溝は西側側溝3条の内の中央溝にあたり、溝は攪乱を受けているものの残存状況は良い。検出長約24.50m、上幅0.65～0.90m、下幅0.25～0.35m、残存する溝の深さ0.30～0.42mを測る。溝の断面はU字状を呈し、溝内における埋土からは幅約0.25mの硬化土が確認された。硬化土は黒茶色土または灰茶色土を呈し、溝に沿うように帯状に確認された。出土遺物は土師器（片）を概かに認めた。

3SD100 (Fig.59, Plu.25・27～30)

当溝は西側側溝3条の内の東溝にあたり、溝は攪乱を受けているものの残存状況は良い。検出長約24.50m、上幅0.50～0.65m、下幅0.15～0.42m、残存する溝の深さ0.20～0.45mを測る。溝の断面はU字状を呈し、溝内における埋土からは幅約0.30mの硬化土が確認された。硬化土は暗黒茶色土を呈し、溝に沿うように帯状に確認された。出土遺物は皆無であった。

東側側溝

3SD080 (Fig.59, Plu.25・27～30)

当溝は東側側溝2条の内の西溝にあたり、東溝である3SD090を切る。溝は攪乱を受けているものの残存状況は良く、検出長約24.20m、上幅0.82～0.92m、下幅0.23～0.50m、残存する溝の深さ0.23～0.41mを測る。溝の断面はU字状ないしは逆台形状を呈し、溝内における埋土からは南部で硬化土を確認している。出土遺物は土師器（片）を認めた。

3SD090 (Fig.59, Plu.25・27～30)

当溝は東側側溝2条の内の東溝にあたり、西溝である3SD080に切られる。溝は攪乱を受けているものの残存状況は良く、検出長約34.20m、上幅0.93～1.15m、下幅0.40～0.65m、残存する溝の深さ0.42～0.53mを測る。溝の断面はU字状ないしは逆台形状を呈し、溝内における埋土からは硬化土は確認されていない。出土遺物は須置器（片）、土師器（壺・片）を認めた。

推定道路

3SF200 (Fig.59, Plu.25・27～30)

当道路状遺構は3SD060（西側側溝）—3SD090（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約10.00m、溝の内々幅で約9.00mを測る。道路中央部分からは溝面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

3SF210 (Fig.59, Plu.25・27～30)

当道路状遺構は3SD070（西側側溝）—3SD080（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約8.50m、溝の内々幅で約8.00mを測る。道路中央部分からは溝面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

3SF220 (Fig.59, Plu.25・27～30)

当道路状遺構は3SD100（西側側溝）—3SD080（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約7.60m、溝の内々幅で約7.10mを測る。道路中央部分からは溝面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

3SF230 (Fig.59, Pla.25・27~30)

当道路状遺構は帯状にのびて検出された礫化面及び礫化土を指すもので、一部は面的に広く確認され、帯状の礫化面は幅約0.30m前後、厚さ0.05~0.13mを測る黒茶色土または灰茶色土で、断面は凹状を呈す。3SD080及び3SD100の溝内、朝澤間の道路中央部で部分的に確認されており、当調査区から検出された道路状遺構の最終段階にあたるものと考えられる。その規模や状況から現在のあぜ道(小径)に類似するものと想定される。

土坑

3SK002 (Fig.60)

調査区内の北東部で検出した隅丸長方形状の土坑である。長軸1.30m、短軸0.85m、残存する遺構の深さは0.38mを測る。土師器(小皿)が出土した。

3SK003 (Fig.60)

調査区内の北東部で検出した隅丸長方形状の土坑で、南部は攪乱を受けている。長軸1.21m、残存する遺構の深さは0.20mを測り、土師器(小皿)が出土した。

3SK030 (Fig.60, Pla.31)

調査区内の中央部で検出した隅丸長方形状の土坑である。長軸2.88m、短軸2.38m、残存する遺構の深さは1.23mを測る。遺物は須恵器(鉢)、土師器(杯)、青白磁(皿)が出土した。

3SK050 (Fig.60)

調査区内の南西部で検出したが、南部は調査区外へ展開する。幅2.12m、残存する遺構の深さは0.62mを測る。黒茶色土を基調とする埋土で、土層断面では3SP035が切っている様子が顕著に認められる。遺物は土師器(小皿・杯)が出土した。

3SK055 (Fig.60, Pla.31)

調査区内の西部で検出した不整形形状の大塚土坑である。長軸6.25m、短軸3.00m、残存する遺構の深さは西部で1.02m、中央部で0.72m、東部で1.14mを測る。遺物は土師器(小皿・杯・土鍋)、白磁(片)、石製品(石剣)が出土した。

(3) 出土遺物

獨立柱建物

3SB110—P2 (Fig.61, Pla.32)

陶器

小蓋 (1) 口縁部が一部欠損したほぼ完形である。口径3.00cm、底径5.60cm、器高7.65cmを測る。素地は精選された淡灰茶色で、器黒茶色の鉄軸を外底以外に施釉する。外底はへら切り、その他はヨコナデ調整である。

3SB110—P3 (Fig.61, Pla.32)

須恵器

杯 (2) 底部の破片で、外底はへら切り、高台部及び内面はヨコナデ調整である。

3SB110—P4 (Fig.61, Pla.32)

土師器

鳥形土製品 (3) 土台及び尾の部分欠損する。長さ5.00cm、高さ4.60cm、最大幅2.50cmを測る。

3SB114—P1 (Fig.61, Pla.32)

土師器

小皿 (4~6) 何れも外底は糸切り、内底はナデ、その他の内外面はヨコナデ調整である。4は口径8.30cm、底径6.40cm、器高1.45cm、5は口径8.20cm、底径6.40cm、器高1.55cm、6は口径8.70cm、底径6.40cm、器高1.80cmを測る。6は口縁部の一部に油塗と思われる層が付着している。

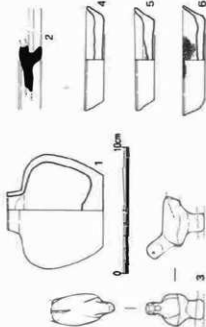


Fig.61 獨立柱建物出土器実測図 (1/3)

溝

3SD001 (Fig.62, Pln.32)

土師器

小皿 (7) 外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整である。口径9.00cm、底径7.00cm、器高1.70cmを復原する。

3SD004 (Fig.62・66, Pln.32・34)

土師器

風車 (8) 火入れ部の細片で、開口部及び口縁部には嵌が付着している。口縁部内面には受け部が貼り付けられ、口縁部外面には菊花文を押しする。

棒状土製品 (9) 断面が方形を呈した棒状二製品で、片側が欠損する。最大軸4.60cmを測り、表面は二次焼成のため、一部が赤褐色に変色している。更に鉱物磨擦による付着物が看取される。

白磁

皿 (10) 底部の細片で、高台径4.50cmを測る。精造された乳白色の素地に胎色の透明釉を内面及び体部外面に薄く施軸する。見込みは碗ノ目状に軸を掻き取り、嵌付けには嵌が付着している。

染付

小杯 (11) 口縁部の細片で、口径7.00cmを復原する。乳白色の素地に透明釉を内外面に施し、外面には呉須で文様が描かれている。

皿 (12) 口径11.60cm、高台径7.20cm、器高3.20cmを復原する。乳白色の素地に透明釉を外底以外に施軸し、内面には呉須で文様を描く。

瓦

平瓦 (13・14) 13は表面及び芯ともに暗黒灰色を呈し、焼成は瓦質である。厚みは2.00cmで、調整は不明である。14は表面が淡黒灰色、芯は淡灰白色を呈し、焼成は瓦質である。厚みは1.90cmで、調整は不明である。

丸瓦 (15) 芯は淡灰白色、表面は暗黒灰色または淡茶色を呈する。内面 葺目? 裏が破る。

鉄製品

釘 (48) 断面形は長方形を呈し、頭部は折り曲げる。現存長は約4.00cmである。

井戸

3SE020 (Fig.63, Pln.33)

粟播系須器

鉢 (16) 玉縁状口縁を呈し、内外面はヨコナデ調整である。胎土は微砂粒を多く含む。

土師器

茶釜 (17) 口縁部の細片で、口縁端部は凹状に沈線を施す。内面及び口縁部外面はヨコナデ、体部外面は横方向の刷毛目調整である。

瓦質土器

鉢 (18) 口径7.60cmを復原し、外面には煤が厚く付着する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は刷毛目、体部外面は指押しえ後刷毛目、底部は刷毛目調整である。

3SE040 (Fig.63・66, Pln.33)

瓦質土器

火鉢 (19) 口縁部の細片で、端部は逆L字状を呈する。口縁部内面から外面にかけてはヨコナデ、内面は刷毛目調整で、外面には3条の沈線及び渦文を施す。

鉄製品

釘 (49) 先端部と思われ、断面形は方形を呈する。現存長は3.70cmである。

3SE045 (Fig.63, Pln.33)

須器

皿 (20) 体部の細片で、上位に径1.40cmの孔を認める。内面及び外面下位はヘラケズリ、体部中位は

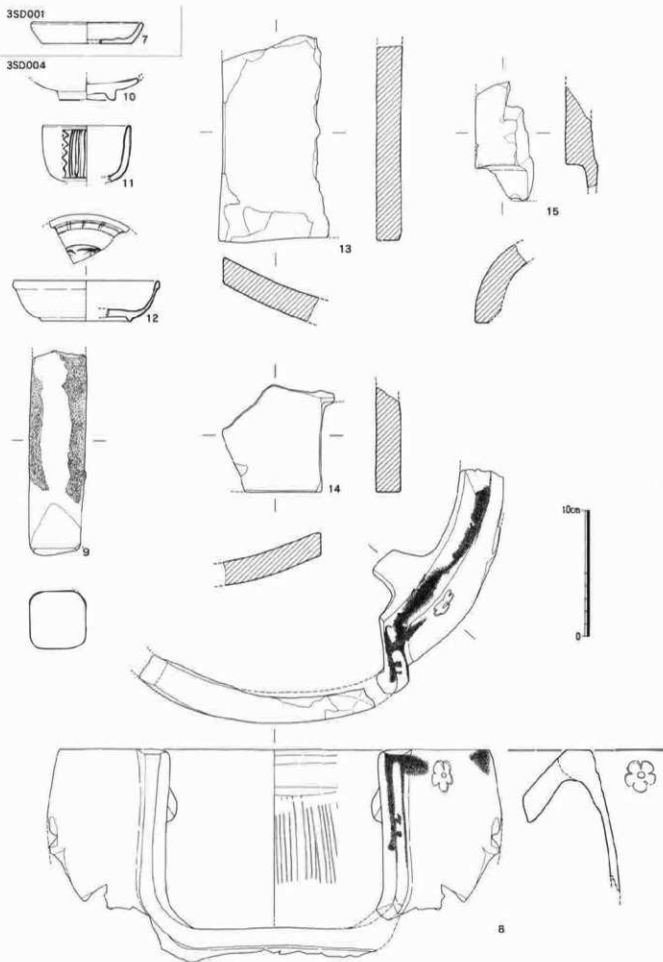
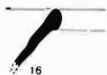
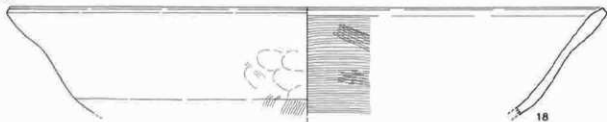
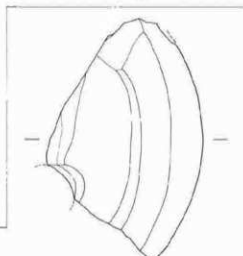
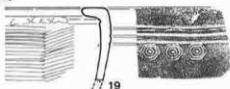


Fig.62 溝出土遺物実測図 (1/3)

3SE020



3SE040



3SE045

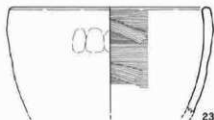
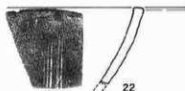


Fig.63 3SE020・040・045出土遺物実測図 (1/3)

ナデ、体部上位は工具にて線刻を施す。

土師器

茶釜 (21) 口縁部の細片である。口縁部内面及び端部はナデ、肩部内面は細かい横方向の刷毛目、体部内面はナデ、外面は工具によるナデ調整を施す。

拵鉢 (22) 口縁部の細片で、内面には縦方向の拵目を認める。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面は指押しさえである。内面には煤が付着してる。

瓦質土器

火鉢 (23) 口径5.60cmを複製する。内面は刷毛目、口縁端部及び口縁部外面はヨコナデ、体部外面上位は指押さえ、下位はナデ調整である。

石製品

挽臼 (24) 外径31.00cmを複製する上臼で、中心軸からやや外れたところに供給口が貫通する。石材は安山岩製と思われる。

道路状遺構

3SD090 (Fig.64, Pla.33)

須臾器 (25) 口縁部の細片で口径は8.00cmを複製する。内外面はヨコナデ調整で、外面の一部に自然釉が認められる。胎土は微砂粒・黒色粒子を少量含む淡灰茶色で、色調は暗黒灰色・淡赤茶色を呈する。

土師器

甕 (26) 口径18.00cm、器高3.20cm、つまみ径2.00cmを複製する。つまみ、口縁部外面、内面はヨコナデで、天井部外面は面転ヘラケズリ調整である。内面の一部に小動物による引っかき痕が残る。

土坑

3SK002 (Fig.65, Pla.33)

土師器

小皿 (27・28) 共に外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整である。27は口径7.70cm、底径5.10cm、器高2.40cmを測り、口縁部の一部に煤が付着している。28は口径9.60cm、底径6.20cm、器高1.65cmを測る。

3SK003 (Fig.65, Pla.33・34)

土師器

小皿 (29～32) どれも外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整である。29は口径7.00cm、底径6.00cm、器高1.15cm、30は口径7.10cm、底径5.90cm、器高1.35cm、31は口径6.90cm、底径6.00cm、器高1.30cm、32は口径7.20cm、底径1.0cm、器高1.30cmを測る。

3SK030 (Fig.65・66, Pla.34)

栗播系須臾器

鉢 (33) 玉縁状口縁を呈し、内外面はヨコナデ調整である。胎土は微砂粒を多く含み、黒色粒子を少し含む。

土師器

杯 (34・35) 34は口径12.20cm、底径8.00cm、器高3.50cmを測り、内面の一部に煤が付着している。外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整である。35は口径14.10cm、底径11.80cm、器高3.40cmを測る。外底は糸切りで収縮圧痕が残り、内外面はヨコナデ調整である。

青白磁

皿 (36) 輪花の皿で、黒色粒子を多く含む乳灰白色の素地に青緑色の透明釉を内外面に施す。

鉄製品

刀子 (50) 現存長17.80cm、刃部長13.00cm、刃部最大幅1.60cm、茎幅1.15cm、茎厚0.25cmを測る。

3SK050 (Fig.65, Pla.34)

小皿 (37・38) 共に外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整である。37は口径8.60cm、底径6.00cm、器高2.75cmを測る。38は口径9.35cm、底径8.20cm、器高1.95cmを測り、内面の一部には小動物による引っかき痕が残る。

杯 (39～44)

どれも内外面はヨコナデ調整で、外底は糸切りである。39・40・42・43には板状圧痕が認められ、43は内面の一部には小動物による引っかき痕が残る。39は口径12.20cm、底径10.60cm、器高2.60cm、40は口径13.00cm、底径11.30cm、器高2.80cm、41は口径13.00cm、底径10.60cm、器高3.00cm、42

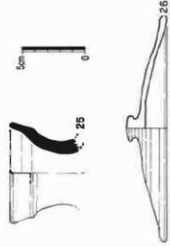


Fig.64 3SD090出土土器裏面図 (1/3)

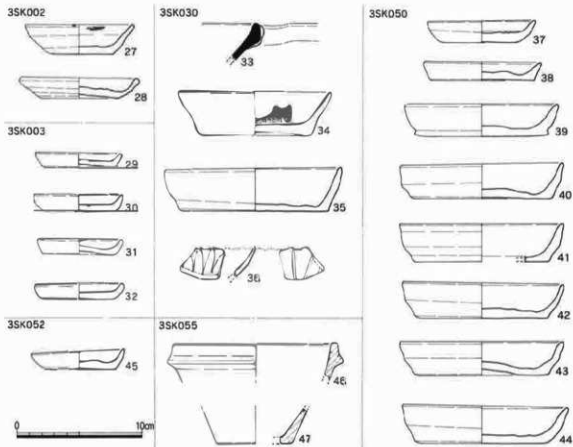


Fig.65 土坑出土土器実測図 (1/3)

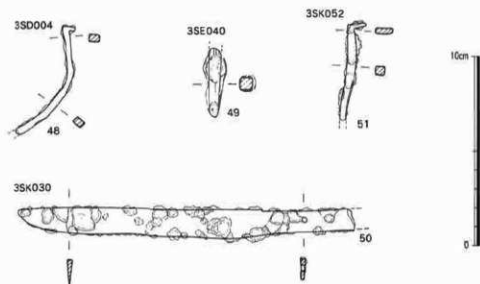


Fig.66 鉄製品実測図 (1/2)

は口径12.80cm、底径10.60cm、器高2.80cm、43は口径13.00cm、底径10.60cm、器高2.70cm、44は口径13.20cm、底径10.60cm、器高3.05cmを測る。

3SK052 (Fig.65・66, Pla.34)

土師器

小皿(45) 外底は糸切り、内外面はヨコナテ調整で、口径7.50cm、底径6.00cm、器高1.40cmを測る。

鉄製品

釘(51) 断面形は方形を呈し、頸部は折り曲げる。現存長は5.10cmである。

3SK055 (Fig.65, Pla.34)

石製品

滑石製石鐮(46・47) 共に内外面は工具によるケズリ調整で、同一個体であった可能性がある。46は口縁部の細片で、口径13.20cmを復原する。鐮の前面形は台形状を呈し、47は底部の細片で、底径6.00cmを復原する。

(4) 小結

調査の結果、棚列状遺構1列、掘立柱建物10棟、溝3条、井戸3基、道路状遺構4路、土坑5基等が確認された。

棚列状遺構・掘立柱建物

当遺跡で確認された棚列状遺構・掘立柱建物は後章の「Ⅴ.まとめ (Tab.5)」に表した。

南北方向の棚列状遺構(3SA120)を確認し、規模や形状が掘立柱建物と類似していることからその可能性も否めない。掘立柱建物は東西棟建物8棟、南北棟建物2棟が確認され、当調査区から確認された各掘立柱建物は、鶴田中市ノ塚遺跡(第1・2次調査)で確認された掘立柱建物群が示す規模や方位等とはほぼ同等であることから相互に関連した遺構として捉えられ、また、調査区内の西側に集中して配置されていることから地形的な規制の基で形成されたことが窺える。掘立柱建物は古代の道路状遺構を切っていることから、道路状遺構廃絶後に設置されたものと理解できるが、掘立柱建物からは時期を特定できる遺物には恵まれていない。しかし、3SB110-P2~4及び3SB114-P1からは僅かながら遺物を認めており、年代特定の参考資料として提示できよう。

溝

調査区内の東端で確認された南北方向の溝(3SD001)は、出土遺物から中世に比定される。土層層面から流水を伴わない空堀であった溝と考えられ、土地を区画するための溝であったことが想定される。

3SD001の西側で確認された南北溝(3SD004)は、出土遺物から18C代に比定される溝である。

井戸

3基(3SE020・040・045)が確認されたが、危険防止のためすべて完掘には至っていない。しかし、井戸の配置状況は第1・2次調査と同様に調査区の中央部に集中しており、当時の水脈を考えるうえで貴重な資料といえる。井戸からは13~15C代を主体とする遺物が認められており、集落が機能していた時期を示すものとして提示できる。

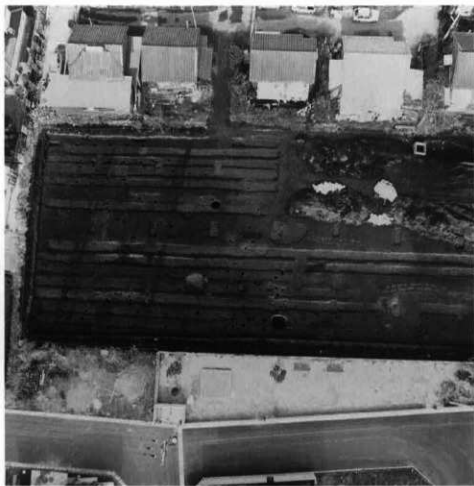
道路状遺構

当調査区からは道路状遺構に付設する舗装、硬化土、硬化面が検出された。遺構の切り合いから古い順に3SF200→3SF210→3SF220→3SF230と4路の道路変遷を復原することができる。

3SF200は、その規模と配置状況から鶴田中市ノ塚遺跡(第1次調査)で復原された1SF500の延長部と捉えられ、律令期に整備された古代官道(西海道)と想定される。同様に、3SF210→1SF510、3SF220→1SF520、3SF230→1SF530の延長部と捉えることができ、当該地においてもほぼ同等規模の道路状遺構であったと考えられる。3SF200の東側傾溝である3SD090からは8C後半~9C代に比定される遺物が認められており、年代特定の参考資料として提示できよう。



鶴田中市ノ塚遺跡（第3次調査）東調査区全景（空中写真：真上から）



鶴田中市ノ塚遺跡（第3次調査）西調査区全景（空中写真：南から）

4. 鶴田中市ノ塚遺跡 (第4次調査)

(1) はじめに (Fig.67)

当遺跡は筑後市大字鶴田字中市ノ塚417-1外に所在し、標高12.5m位の低位段丘上に立地する。発掘調査は市営住宅鶴田団地建替事業に伴い、建物部分である1,046㎡ (調査区A:565㎡、調査区B:481㎡) を実施した。調査期間は平成9年2月25日から同年3月31日まで実施し、この間、重機による表土除去 (有限会社福高建設に委託)、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影 (空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託) 等を行った。発掘調査は小林勇作が担当し、末吉隆弥 (現:川崎町教育委員会) の協力を得た。また、遺構の実測及び写真撮影は小林、末吉、江崎真浩が担当した。

調査区は便宜上、南部調査区を「調査区A」、北部調査区を「調査区B」と称し、調査の結果、調査区Aからは道路状遺構、井戸、溝、土坑等が検出され、調査区Bからは道路状遺構、土坑等が検出された。



Fig.67 鶴田中市ノ塚遺跡 (第4次調査) 調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 調査区A—検出遺構

溝

4SD003 (Fig.68)

調査区内の東側で検出した南北方向の溝である。約6.5m分を確認し、北部は途切れている。埋土は上層から灰色土→灰色土（茶褐色土及び乳灰色土のブロック混じり）→暗灰色土の3層がほぼレンズ状に堆積していた。上幅0.85m前後、下幅0.38m前後、遺構検出面からの深さ0.65m前後を測り、断面は逆台形状を呈する。遺物は土師器（片）、青磁（片）が出土した。

道路状遺構

4SD010 (Fig.68, Pla.35)

調査区内の西端で検出した南北方向の溝で、周辺調査の状況から道路状遺構の東側偏溝の一部と思われる。遺構は北端部で4SK008に切られ、中央部で4SK030を切るように検出され、約7.5m分を確認した。埋土は上層から淡黒茶色土→淡茶色土（黄色土粒子及び茶色土を少し含む）の2層が堆積しており、上幅1.15～1.35m、下幅0.28～0.38m、遺構検出面からの深さ0.17m前後を測り、断面は逆台形状を呈する。遺物は土師器（片）が出土した。

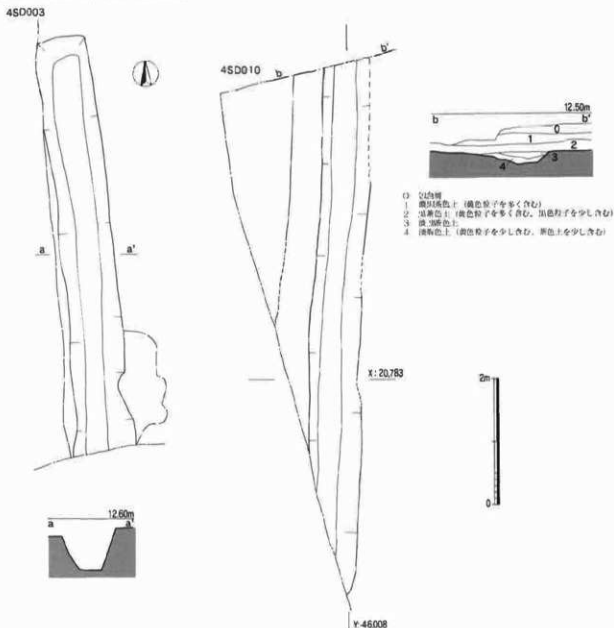


Fig.68 4SD003・010実測図 (1/60)

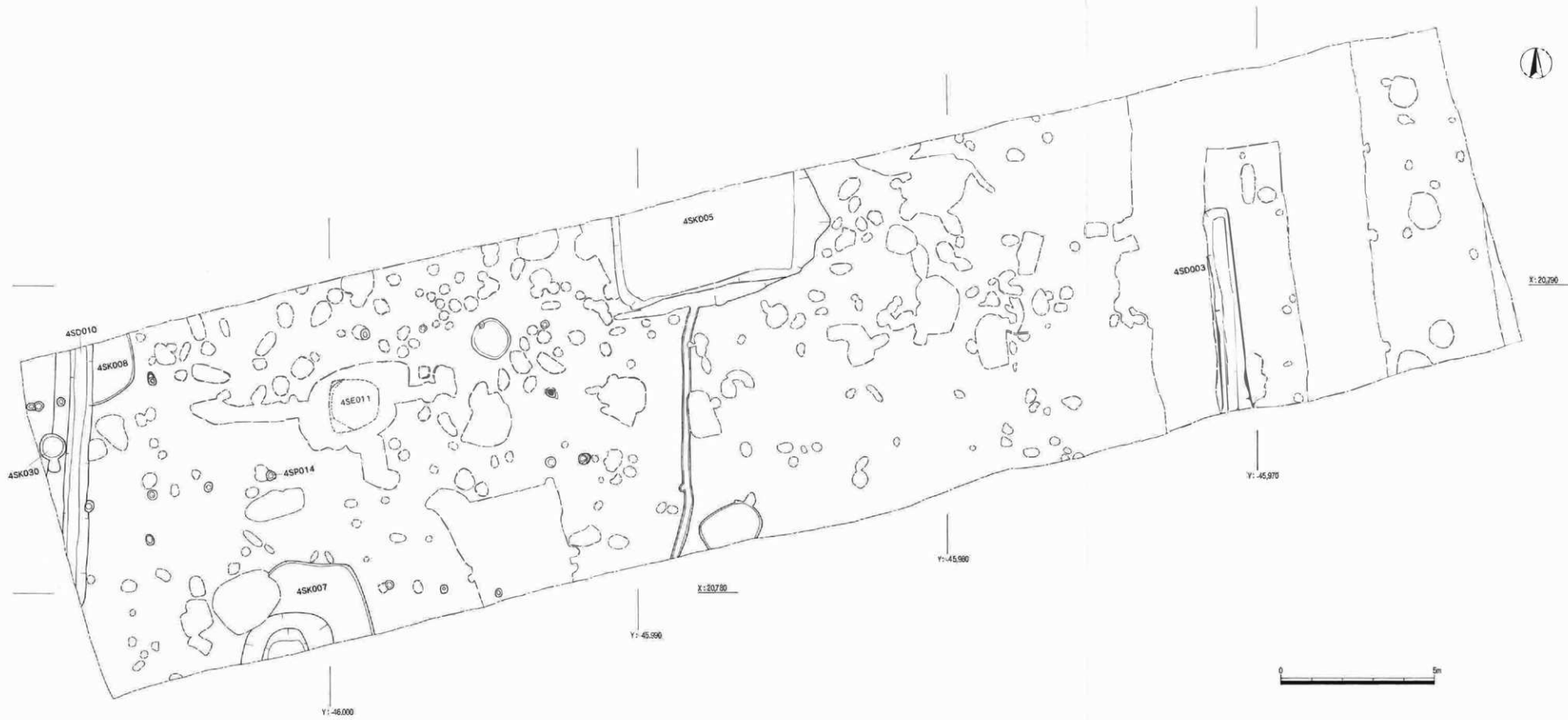
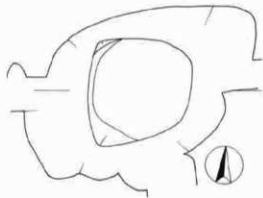


Fig.69 福田中市ノ塚遺跡(第4次調査)調査区A遺構全体実測図(1/100)

井戸

4SE011 (Fig.70, Pla.36)

調査区内の西側で検出した素掘りの井戸で、遺構の上部は祝乱を受けていた。平面プランは隅丸形状を呈し、遺構検出面から約1.5m掘り下げた。埋土は上層から明黒色土 (2~3cm大の礫を少し含み、粘性弱) → 暗黒色土 (5cm大の礫を少し含み、粘質やや強) → 暗黒色土 (黄褐色土ブロックを多く含む) → 暗黒褐色土 (粘性強) → 灰色砂土 (5~10cm大の礫を多く含む) であった。遺物は土師器 (小皿・土鍋・掘鉢・片)、須恵器 (鉢)、青磁 (片)、白磁 (片) が出土した。



土坑

4SK005 (Fig.71)

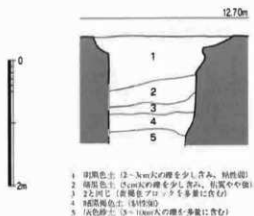
調査区内の中央で確認した大型の土坑で、遺構の北部は調査区外へ展開する。最大幅7.75m、遺構検出面からの深さ約0.35mを測り、遺物は土師器 (小皿・土鍋・掘鉢・片)、陶器 (片) が出土した。

4SK007 (Fig.71)

調査区内の南西部で確認した土坑で、遺構の南部は調査区外へ展開する。最大幅4.68m、遺構検出面からの深さ約0.37mを測り、遺構の底面は楕円状を呈する。遺物は土師器 (坏・土鍋・片) が出土した。

4SK030 (Fig.71, Pla.36)

調査区内の西端で4SD010に切られるように確認された。平面プランは南部にテラスを有した帆立貝状を呈し、長軸2.40m、短軸1.57m、遺構検出面からの深さ約0.41mを測る。遺構の底面には0.12~0.30m大の石が円形状に配置され、中央部には0.07~0.15mの小石が底面からやや浮いた状態で確認された。確認された石や埋土は特に焼けた痕跡は認められていないが、灰の可能性が考えられる。他の遺物は出土していない。



- 1 明黒色土 (2~3cm大の礫を少し含み、粘性弱)
- 2 暗黒色土 (5cm大の礫を少し含み、粘質やや強)
- 3 2と同じ (黄褐色土ブロックを多量に含む)
- 4 暗黒褐色土 (粘性強)
- 5 灰色砂土 (5~10cm大の礫を多く含む)

Fig.70 4SE011実測図 (1/60)

(3) 調査区A—出土遺物

井戸

4SE011 (Fig.72, Pla.38)

土師器

土鍋 (1・2) 1は玉縁状口縁を呈した口縁部の細片で、内面は横方向の刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は指押さえの調整である。外面には煤が付着している。2は断面が台形状を呈した口縁部の細片である。口縁端部には回転縄文、内面は粗い刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はやや細かい刷毛目を施す。口径30.40cmを復元する。

瓦質土器

掘鉢 (3・4) 3は口縁部の細片で、内面はヨコナデ後縦方向に横目、口縁部内面は刷毛目後ヨコナデ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデの調整を施す。4は口径27.80cmを復元する。内面は刷毛目後3本単位の横目を縦方向に施し、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目後ナデの調整である。

白磁

碗 (5) 口径7.50cmを復元する。口縁部はやや外反し、微砂粒を少量含んだ乳白色の素地に乳白色の釉を内外面に施す。表面には貫入が認められる。

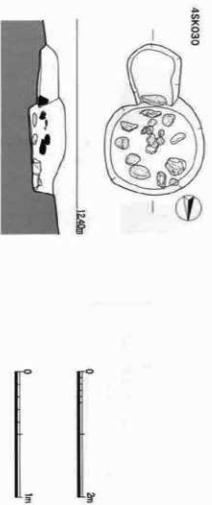
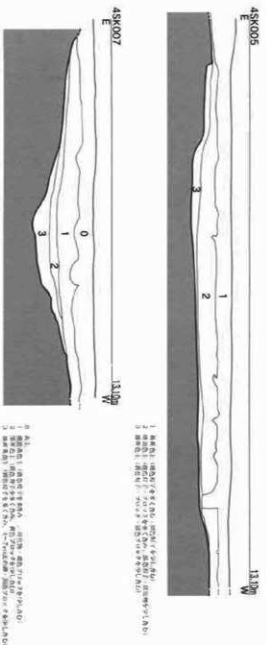


Fig.71 4SK005・007・030発掘図(1/30・1/60)

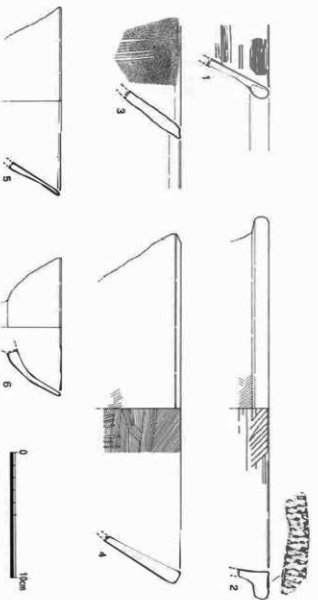


Fig.72 4SE01出土器発掘図(1/3)

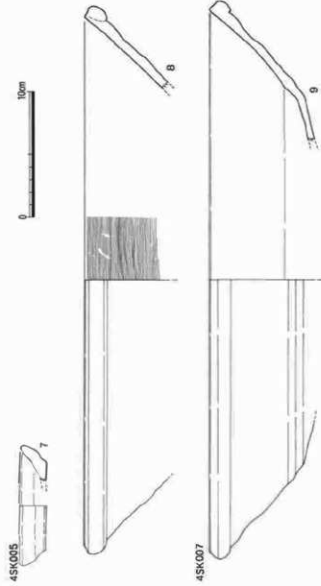


Fig. 73 4SK005・007出土土器実測図 (1/3)

龍原系青磁

小甕 (6) 口径11.00cmを復原する。精選された暗青灰色の素地に青緑色の透明釉を薄くかける。

土坑

4SK005 (Fig.73, Pla.38)

土師器

小皿 (7) 口径9.90cm、底径7.00cm、高2.10cmを復原する。外底は糸切りで、内外面はヨコナデ調整である。

土鍋 (8・9) 共に断面は玉縁状を呈する。8は口径43.40cmを復原し、内面は刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部上位外面は指押さえ、下位はナデの調整で、外面には煤が厚く付着している。9は口径44.40cmを復原し、口縁部外面及び内面上位はヨコナデ、体部外面は指押さえ後刷毛目、底部内外面は刷毛目の調整で、外面には煤が厚く付着している。

ヒット

4SP014 (Fig.74, Pla.38)

染付

碗 (10・11) 共に底部の細片である。10は高台径4.40cmを測り、黒色粒子を少し二含みやや粗い暗灰茶色の素地に暗乳白色の釉を内面に施す。表面は貫入が認められ、墨付けは釉を掻き取っている。内外面には異形で文様を描く。11は高台径5.00cmを測る。やや粗い淡黄白色の素地に乳黄白色の釉を施すが、墨付け及び高台内は露胎である。表面は貫入が認められる。

包含層 (Fig.74, Pla.38)

石器

石鏃 (12) 石材は黒曜石製で、扱りの浅い二等辺三角状を呈する。両脚は欠損する。

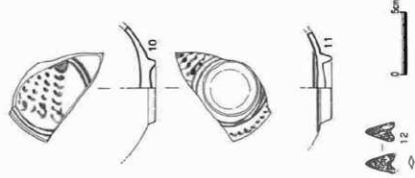


Fig. 74 その他の出土遺物
実測図 (1/3)

(4) 調査区B—株出遺構

道路状遺構

道路状遺構を説明するにあたって、道路施設に伴う溝溝並びに礫土について先述する。

西側側溝

4SD065 (Fig.76, Pla.35)

当溝は西側側溝3条の内の西溝にあたる。他遺構との切り合いはなく、長さ約11.6m分を確認し、上幅0.95～1.27m、下幅0.25～0.62m、残存する溝の深さ0.23～0.33mを測る。溝の断面は概ね緩やかなU字状を呈し、埋土は上層から暗茶褐色土(かなり粘まっている)→暗茶褐色粘質土(黄褐色粘質土のプロック及び粒子を多く含む)の2層が堆積する。出土遺物は須恵器(片)、土師器(片)を認めた。

4SD070 (Fig.76, Pla.35)

当溝は西側側溝3条の内の中央溝にあたり、溝の南端から中央にかけては4SD085に切られている。長さ約11.6m分を確認し、上幅0.76～0.90m、下幅0.15～0.40m、残存する溝の深さ0.20～0.38mを測り、溝の断面は逆台形状を呈する。出土遺物はない。

4SD095 (Fig.76, Pla.35)

当溝は西側側溝3条の内の東溝にあたり、溝の南端から中央にかけては4SD070を切っている。長さ約10.5m分を確認し、上幅0.33～0.75m、下幅0.23～0.38m、残存する溝の深さ0.07～0.15mを測る。溝の断面はU字状を呈し、上層から暗茶褐色土(かなり粘まっている)→明茶褐色土(粘まりが強い)の3層が堆積していた。出土遺物は僅かに土師器(片)を認めた。

東側側溝

4SD075 (Fig.76, Pla.35)

当溝は東側側溝3条の内の西溝にあたる。4SD080を切るように掘出し、長さ約11.6m分を確認した。北端の上幅0.23m、下幅0.35m、残存する溝の深さ0.26m、南端の上幅0.50m、下幅0.30m、残存する溝の深さ0.2m、南端の上幅0.30m、残存する溝の深さ0.25mを測る。溝の断面は概ね逆台形状を呈し、埋土は北部で上層から明乳茶色土(粘まりが強い)→明黒褐色土(粘まりが強い)→明茶褐色土(黄褐色粘質土プロック少し含む、粘まりが強い)の3層が堆積していた。出土遺物は僅かに土師器(片)を認めた。

4SD080 (Fig.76, Pla.35)

当溝は東側側溝3条の内の中央溝にあたる。西溝4SD075に切れ、東溝4SD085を切るように掘出し、長さ約11.6m分を確認した。北端の上幅約1.20m、下幅約0.30m、残存する溝の深さ0.25m、南端の上幅0.95m、下幅0.35m、残存する溝の深さ0.25mを測る。溝の断面は概ね逆台形状を呈し、埋土は北部で上層から暗茶褐色土(粘まりが強い)→暗茶褐色粘質土(黄褐色粘質土プロック及び粒子を多く含む)の2層が堆積する。出土遺物は須恵器(片)、土師器(杯・片)を認めた。

4SD085 (Fig.76, Pla.35)

当溝は東側側溝3条の内の東溝にあたり、長さ約11.6m分を確認した。溝の大半を中央溝4SD080に切られているため上層は不明で、下幅は0.20～0.50m、残存する溝の深さは約0.22mを測る。溝の断面は概ねU字状を呈し、埋土は北部で暗茶褐色粘質土(黄褐色粘質土プロックを多く含む)の単一層であった。出土遺物は皆無であった。

推定道路

4SF100 (Fig.76, Pla.35)

当道路状遺構は遺構の切り合いや過去の調査事例等から4SD065(西側側溝)→4SD085(東側側溝)間を想定したもので、溝の芯々幅11.00mを測る(溝の内々幅は遺構が切り合っていたため測定不能)。側溝間においては路面や路盤を不変する痕跡は認められていない。

4SF110 (Fig.76, Pla.35)

当道路状遺構は遺構の切り合いや過去の調査事例等から4SD070(西側側溝)→4SD080(東側側溝)間を想定したもので、溝の芯々幅約2.0mを測る(溝の内々幅は遺構が切り合っていたため測定不能)。側溝間においては路面や路盤を示唆する痕跡は認められていない。

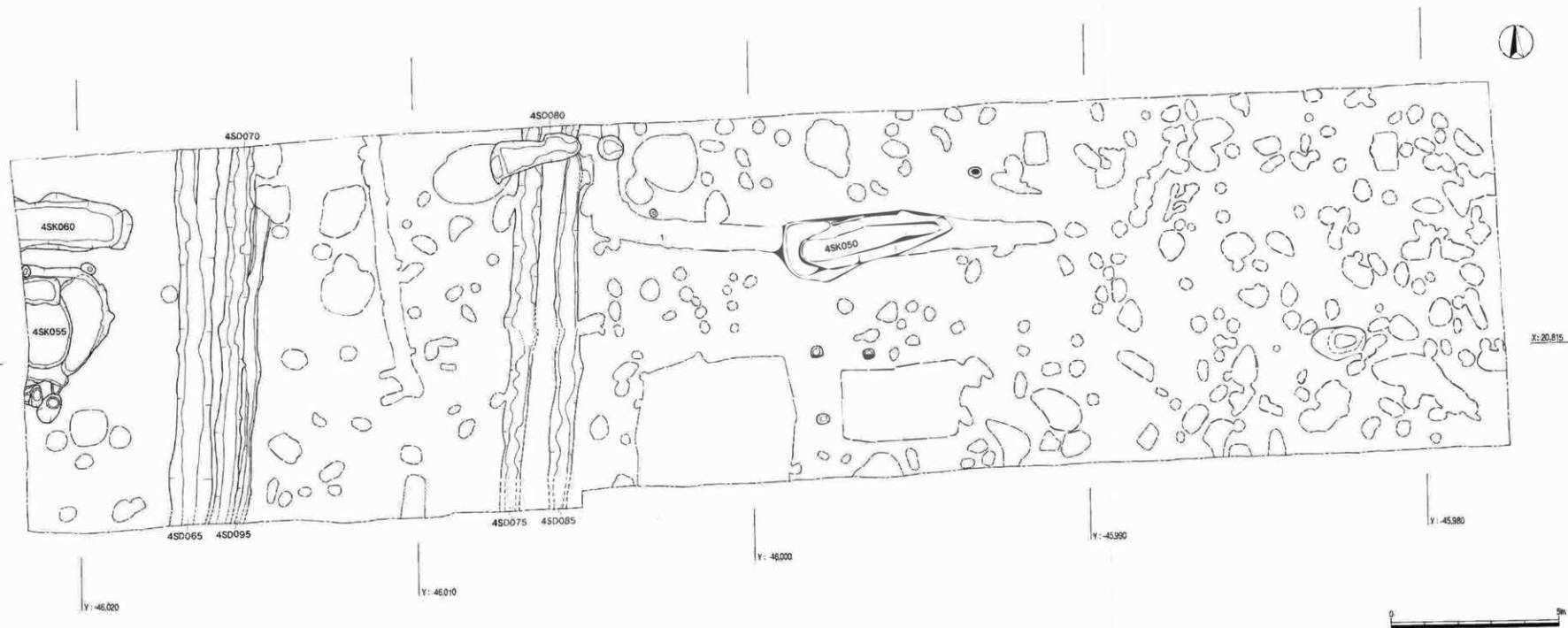


Fig.75 龍田中市/塚遺跡(第4次調査)調査区B選構全体実測図(1/100)

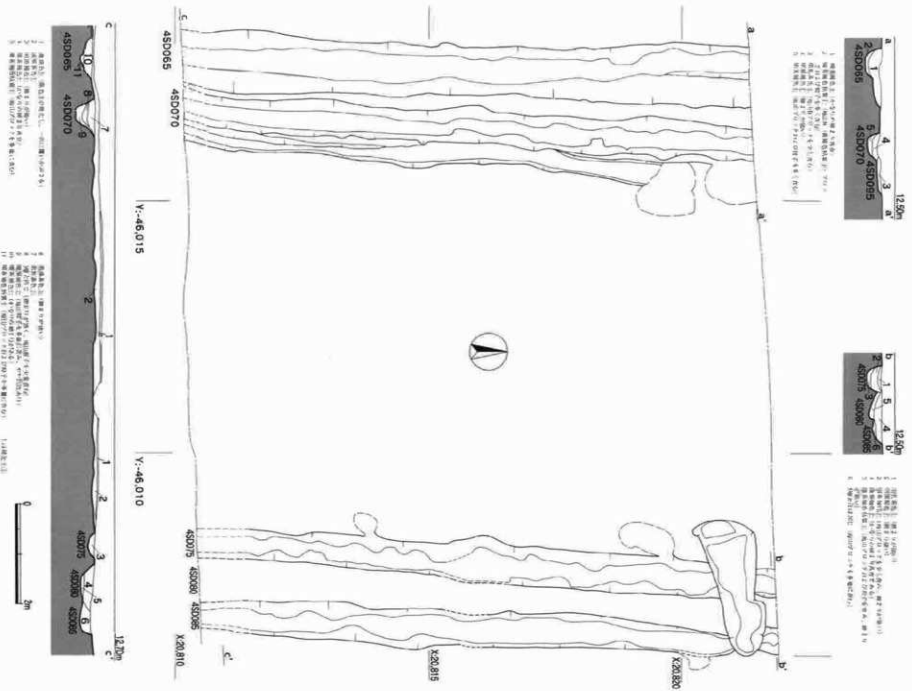


Fig.76 道路标准图例 (1/75)

4SF120 (Fig.76, Pla.35)

当道路状遺構は遺構の切り合い関係から4SD095（西側側溝）—4SD075（東側側溝）間を指すもので、溝の芯々幅8.10m、溝の内々幅で約7.50mを測る。側溝間においては路面や路盤を示唆する痕跡は認められていない。

4SF130 (Fig.76, Pla.35)

当道路状遺構は南壁土層断面で確認された硬化土①を指すものである。鶴田中市ノ原遺跡（第1・3次調査）で確認された帯状硬化土とは異なり、厚さ0.03m前後、幅6.10mを測る濃黒色土が固的に捉えられるものであった（硬化土①は南壁土層断面では確認されたものの、調査区内及び北壁土層断面では確認できていないため重機による表土剥ぎの際に削平した可能性が高い）。更に硬化土の硬さにおいても帯状硬化土よりやや軟質であった。この状況から当道路状遺構は第1・3次調査で確認された帯状硬化土にあたる道路状遺構とは異質の痕跡であることが理解できるが、現在のところ时期的なものとしては大差のないものと判断している。

土坑

4SK050 (Fig.77)

調査区内の中央で検出した隅丸長方形形状の土坑である。長軸5.15m、短軸1.30m、遺構検出面からの深さ約0.49mを測り、土坑内西側にはテラスを有する。土坑は土層断面から少なくとも1度以上の掘り直し

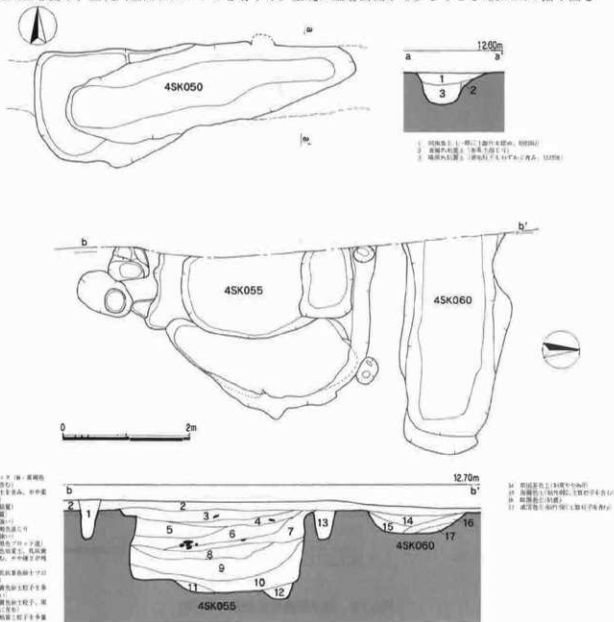


Fig.77 4SK050・055・060実測図 (1/60)

がされている。出土遺物は土師器（小皿・片）が認められた。

4SK055 (Fig.77, Pla.37)

調査区内の西側で検出した。遺構の西部は調査区外へ展開するもので、幅3.0m、遺構検出面からの深さ約1.30mを測り、土坑内東側にはテラスを有する。土坑は土師器面から少なくとも1層以上の掘り直しがされている。出土遺物は須恵器（鉢）、土師器（小皿・片）、石製品（五輪塔）が認められた。

4SK060 (Fig.77, Pla.37)

調査区内の西側で検出した。遺構の西部は調査区外へ展開するもので、幅1.50m、遺構検出面からの深さ約0.30mを測る。出土遺物は土師器（茶釜）、石製品（抜臼）が認められた。

(5) 調査区B—出土遺物
土坑

4SK055 (Fig.78, Pla.38・39)

須恵器

鉢 (13・14) 13は玉縁状口縁を呈する。内外面はヨコナデ調整で、胎土は微砂粒、黒色粒子を少し含む。14は底部の細片で、底径11.00cmを復原する。内外面はヨコナデであるが、外底切り離しは不明である。胎土は粗砂粒を少し含み、微砂粒を多く含む。

石製品

五輪塔 (15) 空・風輪のほぼ定形で、石材は基岩岩盤である。空輪最大径11.70cm、風輪最大径12.20cmを測る。

4SK060 (Fig.78, Pla.39)

土師器

茶釜 (16) 口径15.00cmを測り、肩部には耳が両側2箇所貼り付けられ、中心部に0.60cm前後の穿孔を施す。体部中位にはやや下方気味に脚が張り付けられているが脚径は不明である。内外面の上位はケズリ後ヨコナデ、下位は粗い蜘蛛目の調整である。口縁部外面の一部には鋭利な工具によって文様が描かれている。

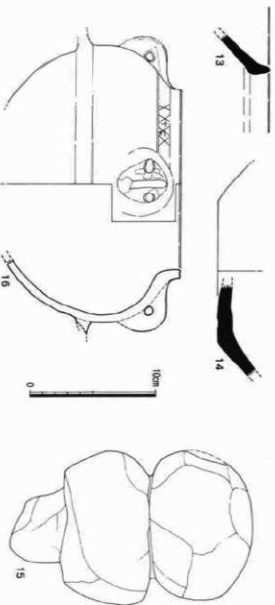


Fig.78 4SK055・060出土遺物実測図 (1/3)

(6) 小遺

調査の結果、調査区Aからは道路状遺構に付設される側溝1条、溝1条、井戸1基、土坑3基等、調査区Bからは道路状遺構4路、土坑3基等が確認された。以下は、調査区A・Bから確認された主要な遺構について概要する。

溝

調査区A内の東端で確認された南北方向の溝（4SD003）は、出土遺物から中世に比定され、溝の性格は区画溝が考えられる。

井戸

調査区A内からは素掘りの井戸（4SE011）1基が確認されたが、危険防止のため遺構検出面から約1.5mまで掘り下したものである。井戸は鶴岡市中古ノ塚遺跡（第1～3次調査）で推定される水脈ライン上で確認されている。13中～14C代を主体とする遺物が認められている。

道路状遺構

調査区A内からは道路状遺構に付設する東側側溝、調査区B内からは両側側溝、硬化土、硬化面が検出された。顕著に確認された調査区B内の道路状遺構は、4SF100・110・120・130と4路を復原することができた。復原された道路状遺構のうち、4SF100は道路状遺構の規模と配置状況から1SF500（鶴岡中吉ノ塚遺跡・1次）及び3SF200（鶴岡中吉ノ塚遺跡・3次）の延長部と捉えられ、律令期に整備された古代官道（西海道）と想定される。同様に、4SF110＝3SF210＝1SF510、4SF120＝3SF220＝1SF520、4SF130＝3SF230＝1SF530の延長部と捉えられるが、道路状遺構からは年代を比定する出土遺物に恵まれていないのは残念であった。

土坑

調査区B内の西端で確認された4SK055・060は隣接した土坑である。共に中世の遺物が認められており、第1～3次調査で確認されている中世集落に関連した遺構と思われる、遺構の性格としては埋葬土坑の可能性が考えられる。



鶴岡市中ノ塚遺跡（第4次調査）調査区全観（空中写真：真上から）

5. 鶴田中字ノ塚遺跡 (第5次調査)

(1) はじめに (Fig.79)

当遺跡は黄後市大字鶴田中字ノ塚419-2外に所在し、標高12.5m位の低位段丘上に立地する。発掘調査は市営住宅鶴田団地建設事業に伴い、駐車場用地である96㎡を実施した。調査期間は平成9年3月22日から同年3月31日まで実施し、この間、重機による表土除去 (有限会社福島建設に委託)、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影 (空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託) 等を行った。発掘調査は小林勇作が担当し、柴田剛の協力を得た。また、遺構の実測及び写真撮影は小林が担当した。

調査の結果、井戸基が検出された。



Fig. 79 鶴田中字ノ塚遺跡 (第5次調査) 調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

井戸

SSE1 (Fig.81, Plu.40)

調査区内の中央で検出したほぼ円形状の素掘りの井戸で、径は2.10m前後、深さ2.20m以上 (安全管理上、途中で掘り下げを断念した) を掘る。非戸の上位は断面が輪鉢状、下位は筒型状を呈し、粗土は上層から黒色土→黒茶色土 (小礫混入) →茶褐色土 (砂・小礫混入) であった。遺物は土師器 (土鍋・火鉢) が出土した。

(3) 出土遺物

井戸

SSE1 (Fig.80, Plu.40)

土師器

土鍋 (1) 玉縁状口縁を呈し、内面は工具ナデ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向の刷毛目と思われるが、外周は紙が厚く付着しているため図示できていない。

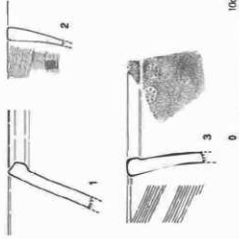


Fig.80 SSE1出土跡実測図 (1/3)

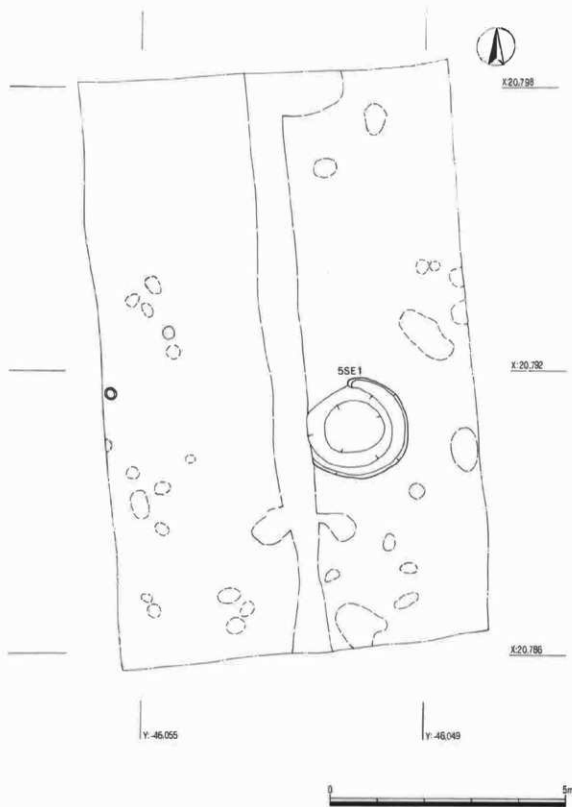


Fig.81 鶴田中市ノ塚遺跡（第5次調査）遺構全体実測図（1/80）

瓦質土器

火鉢（2・3） 2は口縁端部が平坦面を呈する。内面は刷毛目、口縁端部はヨコナデ、外面は調整不明である。3は口縁端部が台形状を呈する。内面は斜め方向の粗い刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は工具ナデの調整で、口縁部外面に菊花文の印刻文が施される。

（4）小結

調査の結果、素掘りの井戸が1基確認されたのみで、井戸の配置は鶴田中市ノ塚遺跡（第1～4次調査）で推定される水脈ライン上よりやや西よりにあたる。安全管理上、約2.20mまで掘り下げたが、井戸底部までは達していない。井戸からは玉縁状口縁を呈する土師器・土鍋が1点、瓦質土器・火鉢が2点確認されており、鶴田中市ノ塚遺跡（第1～3次調査）で確認されている中世集落に関連した遺構と思われる。

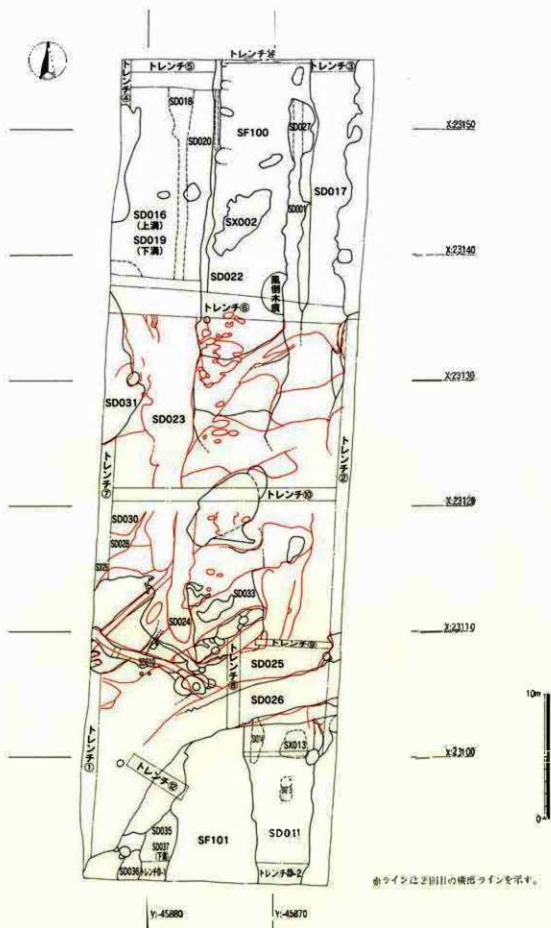


Fig.82 山ノ井川口遺跡遺構略図 (1/300)

6. 山ノ井川口遺跡

(1) はじめに (Fig.83)

当遺跡は筑後市大字山ノ井字川口828—1外に所在し、標高13.5m位の扇状地性低地に立地する。開発事業者である敷地無線株式会社から店舗建設予定地内における埋蔵文化財の取扱いについて照会された。市教委ではこれを受けたが、予定地内は既に武庫調査を実施していた場所であり、道路状遺構や溝が確認されていた。その後、協議を行った結果、当該地は指定西海環道ルートに位置することから確認された道路状遺構はその可能性「高かったため」道路の保存を前提とした工事を実施する事前に確認調査を行うことで合意した。

調査面積は1,927㎡で、調査期間は平成10年11月2日から平成11年2月16日までで、この間、重機による表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影（空中写真撮影は有限会社空中写真真画に委託）等を行った。発掘調査は小林勇作、立石真二が担当し、遺構の実測及び写真撮影は小林、立石が作成し、上村英士、柴田剛の協力を得た。

(2) 検出遺構

各遺構の説明をする前に調査の内容について概要する。

調査は、遺跡が保存されることを前提とした確認調査であったため、遺構の破壊となる掘削を極力なくすことを原則とし、トレンチ調査を主とした方法で調査を進めることにした。遺構は、武庫調査で確認されていた道路状遺構が調査区内の北部と南部で検出されたが、中央部においては砂や粘土が入り交じった堆積層を呈していたことから遺構のニギワケは不明瞭であった。このため不明瞭な部分を重機で5〜10cm程度覆いに削平したところ、北東—南西方向を示す道路や溝等が検出された。

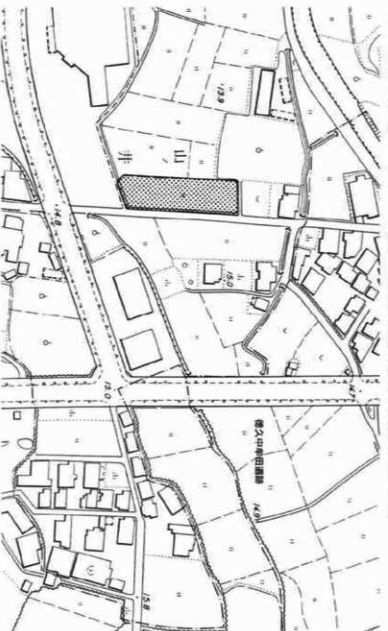


Fig.83 山ノ井川口遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

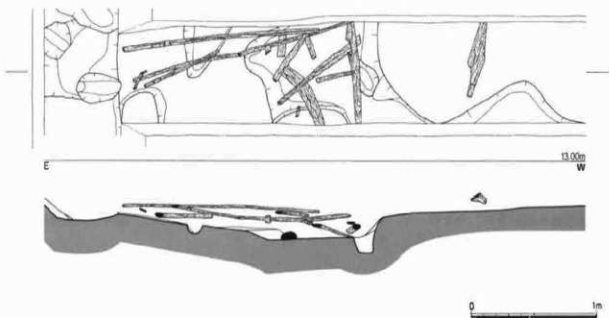


Fig.84 トレンチ⑩流水実験図 (1/30)

溝

SD010 (Fig.85)

調査区内の中央西よりで、やや蛇行するように検出された。上幅0.45~1.35m、深さ0.32mを測る。当溝における遺構の切り合いは古い順にSD025・SD028→SD010→SD026である。出土遺物はない。

SD025 (Fig.86)

調査区内の南部で北東一南西方向に蛇行しながら貫通する溝で、検出長約24.50m、上幅4.35m以上、深さ0.85m程度を測る。溝の検出は、表面に堆積した砂や粘土が混合しあっていたため容易ではなく、大別した平面プランを確認できたにすぎず、不明な点を残す結果となった。溝の検出状況は、南辺はSD026に切られているが、北辺は不明瞭で、途中SD033に切られるように確認された。このため土層断面による観察をしたところ、西部(トレンチ①)と東部(トレンチ②)は自然な傾斜を呈していたが、中央部(トレンチ⑧)では複数の溝が看取されている。掘直しによるものか別の溝である可能性が考えられるが、現段階では不明と言わざるを得ない。出土遺物は須恵器(長頸壺)、土師器(甕・片)等が出土している。

SD026 (Fig.86)

調査区内の南部で北東一南西方向に蛇行しながら貫通する溝である。溝の北辺はSD25を切り、検出長約25.00m、上幅3.50m以上、深さ0.60~0.85mを測る。土層断面による観察をしたところ、西部(トレンチ①)、中央部(トレンチ⑧)、東部(トレンチ②)は何れも自然な傾斜を呈する緩やかなU字状の断面形であった。出土遺物から中世の溝と考えられ、当遺跡の西方約150m、徳久中牟田遺跡で確認されているSD010の延長部に該当すると思われる。

SD028 (Fig.86)

調査区内の中央部で東西方向に貫通する溝である。検出長約21.00m、上幅5.95m以上、深さ0.60m程度を測る。溝の検出は、表面に堆積した砂や粘土が混合しあっていたため容易ではなく、大別した平面プランを確認できたにすぎず、特に中央部から東部にかけては不明な部分を残した。このため土層断面で観察をしたところ、西部(トレンチ⑦)では顕著に認められたが、中央部(トレンチ⑩)と東部(トレンチ②)にかけては広範囲に及ぶ自然な傾斜を呈する溝が確認された。更に、トレンチ⑩の東端の溝底からは、加工痕のない自然木が集積するように確認された。トレンチ部分のみでの確認に止まったため、人為的なものであるかどうかはわからない。出土遺物から弥生時代の流路である可能性がある。



Fig.85 山ノ井川口遺跡遺構全体実測図 (1/100)

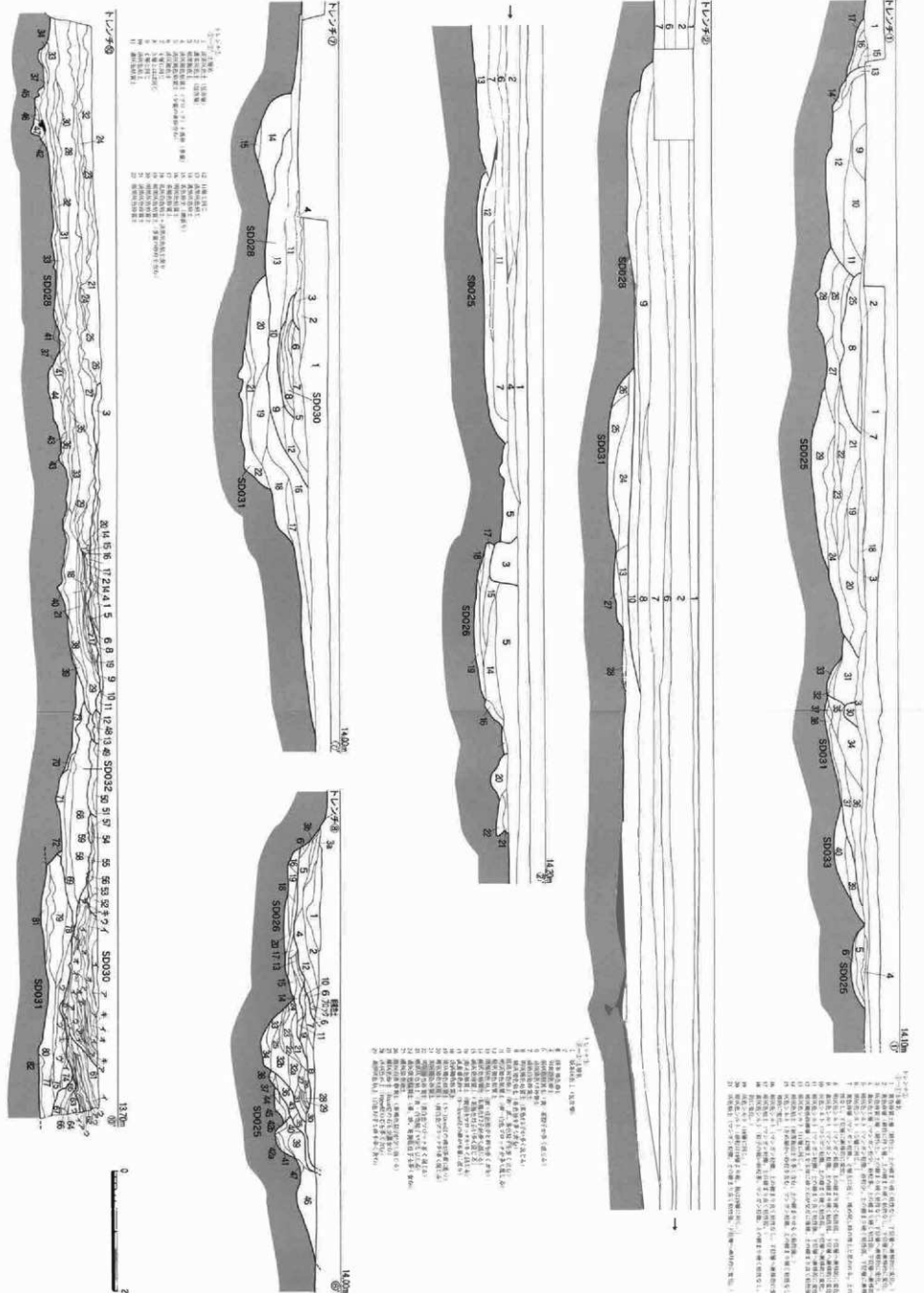


Fig.86 トンチ①・②・③・④土層断面要図(1/60)

1. 調査地概況
 2. 調査目的
 3. 調査経緯
 4. 調査方法
 5. 調査結果
 6. 結論
 7. 参考資料
 8. 謝辞
 9. 図表目録
 10. 索引

1. 調査地概況
 2. 調査目的
 3. 調査経緯
 4. 調査方法
 5. 調査結果
 6. 結論
 7. 参考資料
 8. 謝辞
 9. 図表目録
 10. 索引

1. 調査地概況
 2. 調査目的
 3. 調査経緯
 4. 調査方法
 5. 調査結果
 6. 結論
 7. 参考資料
 8. 謝辞
 9. 図表目録
 10. 索引

1. 調査地概況
 2. 調査目的
 3. 調査経緯
 4. 調査方法
 5. 調査結果
 6. 結論
 7. 参考資料
 8. 謝辞
 9. 図表目録
 10. 索引

SD030 (Fig.86)

調査区内の中央部で確認した北東―南西方向の溝で、検出長約20.00m、上幅0.45～3.21m、深さ0.60m程度を測る。当溝はSD028及びSD030を切るように検出され、中央部から東部にかけては傾度に変化が見られる。溝の断面形は緩やかなU字状を呈し、西端（トレンチ①）と中央部（トレンチ⑧）の土層断面では白色砂状や暗灰色粘土が硬直にも堆積している状況が顕著に認められた。この状況は緩流程度の流水によるものと推定される。

SD031 (Fig.86)

調査区内の中央部で確認した北東―南西方向の溝で、深さは1.00m程度を測る。当溝の西端はSD031及びSD032に切れ、中央部から東部にかけてはSD028に切られるように検出されたことから検出長及び土層は不明である。溝の断面形は概ね逆台形状を呈する。

道路状遺構

道路状遺構を説明するにあたって、まず道路状遺構に付設する遺構（御溝・路面等の状況）について先述する。

西側御溝**SD016 (Fig.87, Pla.41～47)**

当溝は調査区北部、西側御溝の上層にあたり、黒土は涼灰褐色砂質土を呈する。西側御溝はこのSD016の下層から順次に4条（SD018～020・022）が確認されており、溝は中央部で確認されているSD023・024へと移行するものと考えられる。検出長約20.00m、上幅7.00m以上、深さ0.10m程度を測る。遺物は須恵器（蓋・坏・甕）等が出土している。

SD018 (Fig.87, Pla.41～47)

当溝の断面形はV字状を呈し、隣接する西側御溝のSD019を切る一方、東側溝のSD020には切られ、検出長約20.00m、上幅1.10～1.65m、深さ0.22～0.30mを測る。遺物は土師器（片）、瓦器（片）が出土している。

SD019 (Fig.87, Pla.41～47)

当溝は調査区北部、西側御溝の最東端にあたり、溝は比較的狭く、SD016の下位で確認された溝である。隣接するSD018には切られ、検出長約20.00m、上幅2.10～3.20m、深さ0.05～0.20mを測る。遺物は僅かに須恵器（片）が出土している。

SD020 (Fig.87, Pla.41～47)

当溝の断面形は逆台形状を呈し、緩やかなU字状を呈し、隣接するSD018・022を切るように確認された。検出長約20.00m、上幅1.15～1.40m、深さ0.23m程度を測る。遺物は土師器（片）、黒曜石（剥片）が出土している。

SD022 (Fig.87, Pla.41～47)

当溝は調査区北部、西側御溝の最東端にあたり、隣接するSD020に切られるように確認された。検出長約20.00m、上幅1.75m以上、深さ0.20～0.30mを測る。遺物は僅かに埴師器（片）が出土している。

SD023 (Fig.87, Pla.41～47)

当溝は調査区中央部で検出された。調査区中央部を横断する一連の流路を切るように確認されたが南端は終息する。検出長約20.10m以上、幅1.80～3.25mを測る。遺物は僅かに須恵器（蓋）、土師器（片）が出土している。

SD024 (Fig.87, Pla.41～47)

当溝は調査区中央部でSD023に切られるように検出された。更に調査区中央部を横断する一連の流路を切るように確認されたが南端は終息する。検出長約25.50m、上幅1.10m前後、深さ0.08m前後を測る。遺物は僅かに須恵器（蓋）、土師器（片）が出土している。

SD035 (Fig.87, Pla.41～47)

当溝は調査区南部、西側御溝の中央溝にあたる。調査区南部、西側御溝は掘削時においてS015として全体を掘削したが、土層断面で分層されたためSD035を与えた。従って、出土遺物はS015に帰属される。

溝の断面形は緩やかなU字状を呈し、上幅1.56m、深さ0.20m前後を測る。隣接するSD36・37を切るように確認された。

SD036 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区南部、西側側溝の西溝にあたる。SD035と同様にS15として全体を掘削したため出土遺物はS015に帰属される。溝は自然な傾斜を呈し、上幅約1.70m、深さ約0.25mを測る。隣接するSD035に切られるように確認された。

SD037 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区南部、西側側溝の東溝にあたる。SD035と同様にS015として全体を掘削したため出土遺物はS015に帰属される。溝の断面形は逆台形状を呈すると思われ、上幅約0.80m以上、深さ約0.20mを測る。隣接するSD035に切られるように確認された。

東側側溝

SD001 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区北部、東側側溝の西溝にあたり溝の南北は終息する。僅かではあるが隣接するS1017を切るように確認された。検出長約18.50m、上幅0.70~1.65m、深さ0.05~0.18mを測り、遺物は須恵器(甕)、土師器(片)が出土している。

SD011 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区南部の東側側溝にあたり、北部は流路であるSD026に切られている。平面プラン及び土層断面では1条の溝として捉えられたが、溝の痕跡としてはSX012~014が該当すると考えられるため、本来は数条の側溝が存在していた可能性がある。検出長約13.20m、上幅3.45~5.50m、深さ0.25m程度を測る。溝は西側側溝に比べると比較的軟弱な地盤(地山:灰白色粘土)に構築されていたため、溝底は凹凸が著しい。出土遺物はSD011から須恵器(片)、土師器(坏・片)、SX012から土師器(片)、SX014から須恵器(片)、土師器(坏)が出土している。

SD017 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区北部、東側側溝の東溝にあたり溝の南部は終息する。隣接するSD001に切れ、検出長約19.40m、上幅2.25~3.30m、深さ0.10~0.30mを測る。溝は西側側溝に比べると比較的軟弱な地盤(地山:灰白色粘土)に構築されていたため、平面プラン及び溝底においては不安定であった。遺物は僅かに土師器(片)が出土している。

SD027 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区北部、東側側溝SD001の下位から確認され、検出長約12.60m、上幅0.30~1.15m、深さ約0.15mを測る。遺物は僅かに須恵器(片)、土師器(片)が出土している。

路面・路盤・路床等

SF100 (Fig.87, Pla.41~47)

当遺構は調査区北部で確認された道路状遺構の側溝側における部分を指す。

表土除去後、地山である灰白色粘土上に淡灰色砂質土を基調とした堆積土(以下、覆土)上に面が確認され、当遺構はこの面で検出した。遺構は、覆土に対して円形・楕円形・隅丸方形等の様々な形状を呈した淡灰色砂質土・淡灰色砂質土・茶褐色砂質土・乳白色粘土・黒色粘土の堆積土が切りあう状況であった。この状況は、近年の道路状遺構に関する調査事例から道路造営に伴う痕跡であることが予想されたため、遺構検出面から地山に至るまでの全ての痕跡を遺構として取り扱うことにした。調査は平面上での確認にあわせて、土層断面による立脚での確認が妥当であると考えられたが、保存を前提とした確認調査であること、調査期間に限定があったこと等の理由から、調査区北部で確認された当遺構においては、平面プランを重点とした資料収集に努めることとした。

まず、平面上で確認された痕跡の検出状況について整理する。東西で確認された側溝側における部分からは、地山上に堆積した路盤(ここでは路面と路床の間にあたる土・砂・石等で人為的に構成された土層を指す)である淡灰色砂質土に、小礫(バラス)や土器が混入した状態であり、刺突状痕跡(ここではピット状の遺構が集合した痕跡の意味として使用した)は、この堆積層上面に穿たれていた。刺突

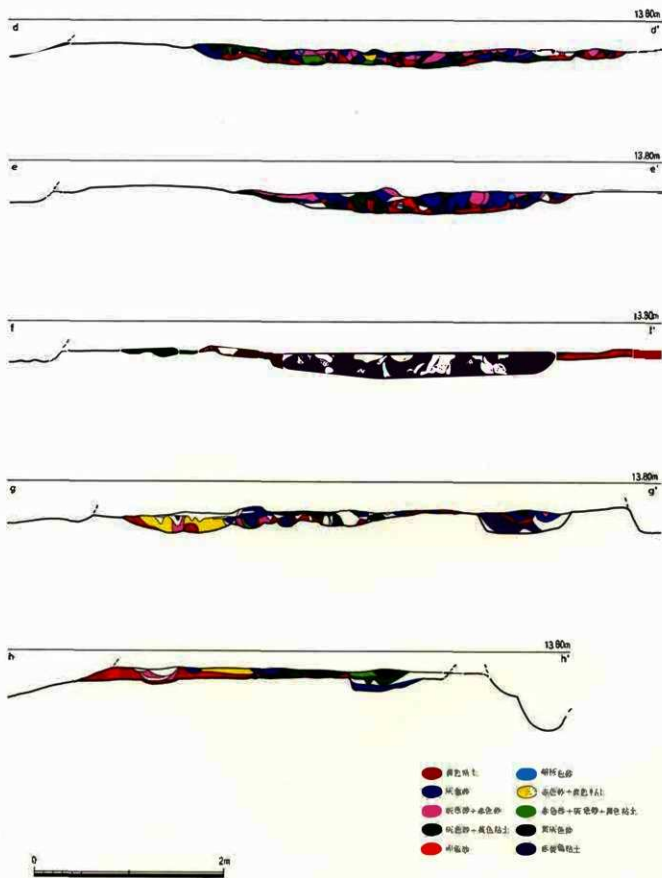


Fig.87-① 路面・路盤土層断面模式図 (1/40)

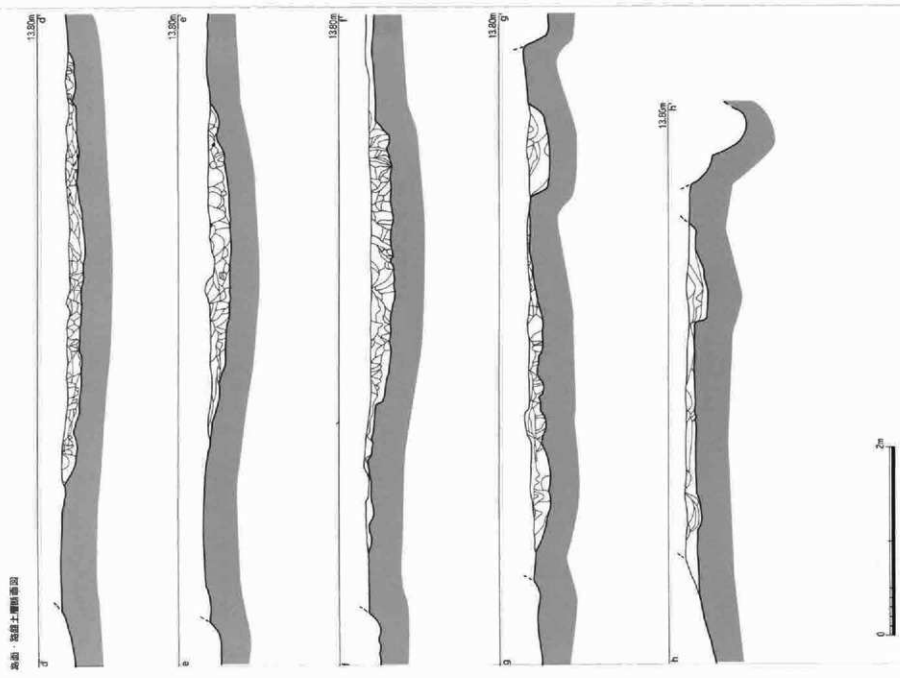


Fig.87-② 道路沿崖噴土層断面美測図 (1/40)

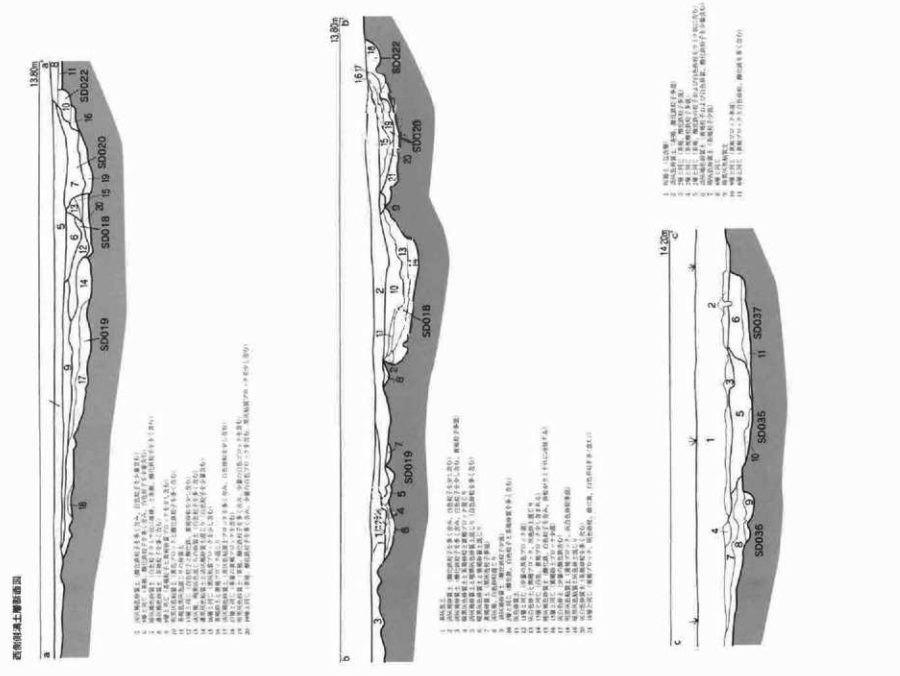


Fig.87-② 道路沿崖噴土層断面美測図 (1/40)

状痕跡の分布状況については、道路幅員におけるほぼ全体で確認されたが、密度的には道路中心部から西側にかけて多く認められた。その大半は単位ごとに捉えられる個々の刺突状痕跡が密集し、ある程度の一元性を有することで単位に捉えられるものであった。密集した刺突状痕跡は、道路主軸に対してほぼ直行するように突き込まれている状況で、不明固ではあるが、ある程度の間隔を保ちながら南北方向に分布するものであった。トレンチで下層の状況を確認したところ、地山に形成された路床（ここでは道路の最下層を示し、道路と地山の境界にある面を指す）からは、波板状凹凸痕跡（ここでは平面上でトレンチが不定形状を呈した埋み状の連続遺構を指す）が確認され、底部からは多くの小梁が認められた。小梁は波板状凹凸痕跡や路床に含まれるものか大半であったが、路床中に集中したものが多く、地山に突き刺さった状況も看取された。道路幅員は期落の内々幅で5.50～6.50mを測る。

SF101 (Fig.87, Pla.41～47)

当遺構は調査区南部で確認された道路状遺構の期落間における部分を指す。

当遺構の検出前は、表土除去後に確認された砂質土・粘質土・粘土等で構成された堆積土（以下、路盤）上面であり、路盤に対して円形・楕円形・隅丸方形等の様々な形状を呈したピット状痕跡（以下、刺突状痕跡）が切りあう状況であった。この状況は、調査区北部で確認された道路造営に伴う痕跡であると認識し、地山上に堆積する全ての堆積土と痕跡を遺構として取り扱うことにした。

調査は、北部で平面トレンチを重視したことに對し、南部では平面上での確認にあわせて土層断面による立面での確認を行うこと（道路に対して直行する土層ヘルト（幅約20cm）を約50cm間隔に均等に設定）とし、相互関係を重点とした資料収集に努めることとした。

次に、平面上で確認された痕跡の検出状況について整理する。前期の検出状況は、北部で確認された状況に類似する点が多い。北部で確認された一連の刺突状痕跡は、南部においても顕著に認められ、密度的には北部より高いものであった。更に、ある程度の一元性を有した群集を呈していたことから北部の様相に似ている。土層断面による立山・流れ込みによる層位を示すもの、上位から穿たれた層位における刺突状痕跡の断面形は筒状U字状・V字状等を呈し、非群集上は黄色粘土・灰色砂・灰色砂+赤色砂・灰色砂+黄色粘土・赤色砂・暗褐色砂・赤色砂+黄色粘土・赤色砂+灰色砂+黄色砂・黄灰色粘土・石灰色粘土・灰色粘土+黄色粘土・明灰色砂・黄色砂+灰色砂・黄灰色粘土等の多くの堆積土が組み合わさっている状況であった。北部でみられた群集に含まれる小梁（ボラス）や土器は、南部では少し含まれる程度であった。地山には見られる路床は、期落間における中央部が概ね群集の状況（トレンチカット）を呈し、詳細な部分では波板状凹凸痕跡、溝状痕跡（ここでは道路に形成された溝状の遺構を指す）、ピット状痕跡（ここでは単体として捉えられるピット状に窪んだ痕跡を指す）が看取された。波板状凹凸痕跡は道路主軸に対してやや斜め方向に、ある程度の間隔を保ちながら南北方向に分布するものであった。道路幅員は期落の内々幅で4.20～7.35mを測る。

推定遺構

調査区の南部で確認された期落は不明瞭であったため、顕著に確認された北部の道路状遺構についてのみ復原を試みた。なお、以下に示した道路状遺構における路面・路盤・路床の状況はSD100度及びSD101にて委ねられるが、各道路状遺構に該当するとみられる路面・路盤・路床は判別し難いため、ここでの説明は避けることとした。

SF102 (Fig.87, Pla.41～47)

当道路状遺構はSD120（西側期落）—SDM1（東側期落）間が該当し、溝の心々幅で約6.50mを測る。

SF103 (Fig.87, Pla.41～47)

当道路状遺構はSD022（西側期落）—SD027（東側期落）間が該当し、溝の心々幅で約8.00mを測る。

SF104 (Fig.87, Pla.41～47)

当道路状遺構はSD018（西側期落）—SD017（東側期落）間が該当し、溝の心々幅で約12.10mを測る。

不明遺構

SX002 (Fig.85)

調査区北部、SF100のほぼ中央で検出した楕円形状の遺構である。長軸6.30m、短軸2.35m、深さ0.18～0.39mを測る。底部は段差を認め、一部で小礫が堆積していた。埋土は灰白色の砂質土を基調とし、赤生土器(片)、須置器(蓋・葉・片)、土師器(片)、瓦葺(碗・片)が出土遺物として認められた。

(3) 出土遺物

遺跡状遺構

側溝

SD011 (Fig.88, Plu.48)

土師器

碗 (1) 底部の細片で、高台径8.70cmを復原する。内外面は著しく磨耗しているため調整不明である。

SD016 (Fig.88, Plu.48)

須置器

蓋 (2・3) 共に口縁部の細片で、口径14.60cmを復原する。調整は磨耗のため不明である。
 坏 (4～10) 4はかえりのある坏である。内外面はヨコナデ調整で、口径11.00cm、かえり径13.60cmを復原する。5・6は外底へラ切りで内外面はヨコナデ調整である。5は口径12.60cm、高台径7.20cm、器高4.85cm、6は口径12.90cm、高台径、8.00cm、器高4.40cmを復原する。7は口縁部の細片で内面及び外面上4位はヨコナデ、中位はケズリ後ヨコナデ、下位はケズリの調整である。8・9は底部の細片で、外底はへラ切り、内外面はヨコナデ調整である。8は高台径8.00cm、9は高台径10.20cmを復原する。10は底径8.00cmを復原し、外底はへラ切り、内外面はヨコナデ調整である。

葉 (11・12) 11は口径14.00cmを復原し、内外面はヨコナデ調整である。12は口径7.20cmを復原し、内外及び口縁部外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目調整である。

土師器

坏 (13～15) 13は口径15.40cm、底径13.00cm、器高4.45cmを測る。外底はへラ切り、その他はヨコナデ調整である。14は高台径10.00cmを復原する。内外面は磨耗のため調整不明である。15は高台径11.00cmを復原し、外底はへラ切り、高台部はヨコナデ調整で、その他は磨耗のため調整不明である。

葉 (16) 口径16.00cmを復原し、調整は磨耗のため不明である。

土師 (17) 定形で長さ4.95cm、最大径1.25cm、穴径0.60cmを測る。

SD02 2(Fig.88, Plu.48)

須置器

蓋 (18) かえりのある蓋で、内外面はヨコナデである。口径11.00cm、かえり径9.40cmを復原する。

SD023 1(Fig.88, Plu.48)

須置器

葉 (19) 口縁部の細片で内外面はヨコナデ調整である。

トレンチ⑤ (Fig.88, Plu.48)

土師器

坏 (20) 口径13.20cm、底径8.20cm、器高3.10cmを復原する。磨耗のため調整不明である。

踏面・踏籠・踏床

SF100一層土 (Fig.90, Plu.49)

石製品

石匙 (46) 石材はササキト製で、つまみを有する。周縁に二次加工を施し、刃部を作り出し出している。

SF101一トレンチ (Fig.88, Plu.48・49)

須置器

型須置器 (21) 口縁部の細片で、口径5.20cmを復原する。内外面はヨコナデ調整である。

葉 (22) 口縁部の細片で、口縁部内面上位及び外面はヨコナデ、口縁部内面下位はケズリ調整である。

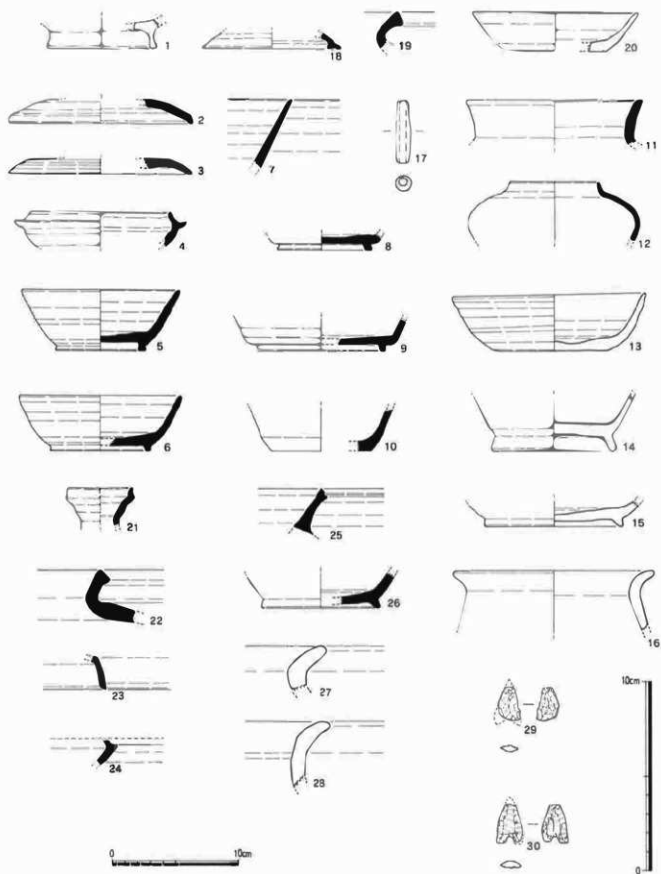


Fig.8B 道路状遺構出土遺物実測図 (1/2・1/3)

蓋 (23) 口縁部の細片で、口縁部外面下位及び内面はヨコナテ、口縁部外面上位はケスリ調整である。
 杯 (24) かえりのある杯で、内外面はヨコナテ調整である。

石製品

石鏃 (30) 尖端部及び柄部が欠損する。石材はサヌカイト製で、持ちが比較的浅い前面加工の石鏃である。現存重1.10gを測る。

SF101一覆土 (Fig.88, Pl.49)

須磨器

杯 (26) 高台径約40cmを復原し、外底はヘラ切り、内底はナテでその他はヨコナテ調整である。

土師器

葉 (27・28) 共に口縁部の細片で、調整は磨耗のこめ不明である。

石製品

石鏃 (29) 尖端部及び柄部が欠損する。石材はサヌカイト製で、持ちが比較的浅い前面加工の石鏃である。現存重0.80gを測る。

須

SD025 (Fig.89, Pl.49)

須磨器

長頸蓋 (31) 肩強が突出した蓋で、肩部外面はヨコナテ、体部外面は格子叩き後ヨコナテ、内面は同心円叩き後ヨコナテ調整である。

土師器

葉 (32) 口縁部の細片で、調整は磨耗のため不明である。

不明遺構

SX002 (Fig.89)

須磨器

蓋 (33) 肩部が屈曲した蓋で、内外面はヨコナテ調整である。

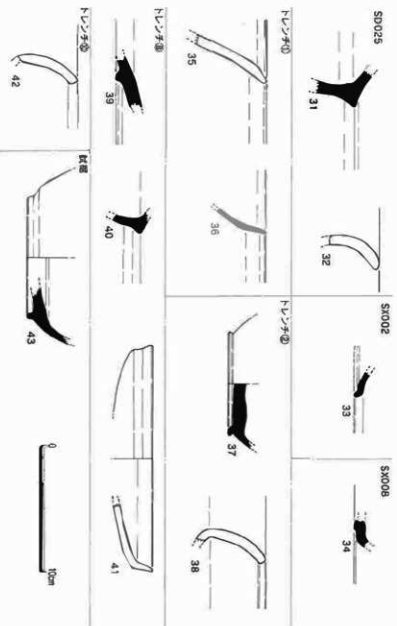


Fig.89 その他の出土遺物実測図① (1/3)

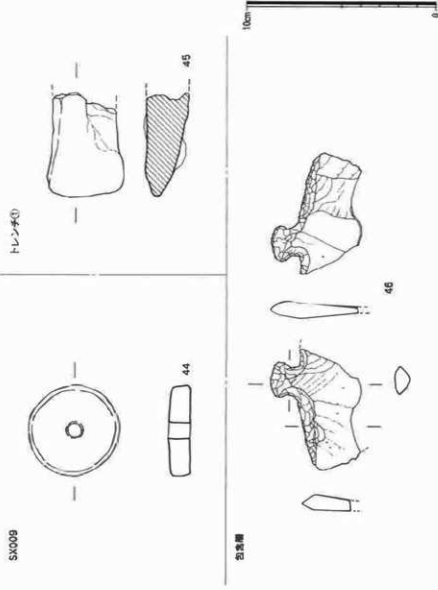


Fig.90 その他の出土遺物実測図② (1/2・1/3)

SX008 (Fig.89)

須臾器

坏 (34) 口縁部の細片である。外底はヘラ切り後高台を貼り付け、内外面はヨコナデである。

SX009 (Fig.90, Pl.49)

石製品

紡錘車 (44) 石材は滑石製で、外径4.75cm、高さ1.20cm、穴径0.70cm、現存重は48.40gを測る。

その他の遺構

トレンチ① (Fig.89・90, Pl.49)

土師器

外? (35) 口縁部の細片で、内面及び口縁部外面はヨコナデ、体部は縦方向の刷毛目調整である。

瓦器

焼 (36) 口縁部の細片である。口縁部はヨコナデ調整であるが、その他は磨耗のため調整不明である。

鉄製品

不明 (45) 先端はやや尖り気味であるが、刃部は認められない。

トレンチ② (Fig.89, Pl.49)

弥生土器

甕 (38) 口縁部の細片で、磨耗のため調整は不明瞭であるが、口縁部から口縁部内面上位にかけてはヨコナデ、内面下部は斜め方向の刷毛目、口縁部外面は刷毛目後ヨコナデ調整と思われる。

須臾器

坏 (37) 底部の細片で、高台径8.20cmを復原する。外底はヘラ切りで、内外面はヨコナデ調整である。

トレンチ⑧ (Fig.89, Pla.49)

須恵器

長頸壺 (39・40) 39は底部の細片で、内外面はヨコナデ調整である。40は肩部が突出しており、肩部内外面はヨコナデ、体部内外面は叩き後ヨコナデ調整である。同一個体の可能性がある。

土師器

皿 (41) 口縁部が外反する皿の細片である。磨耗のため調整は不明瞭であるが、外底はケズリ後ミガキ、その他はヨコナデ調整と思われる。口径18.00cmを復原する。

トレンチ⑩ (Fig.89, Pla.49)

弥生土器

壺 (42) 口縁部の細片で、磨耗のため調整は不明である。

隣地試掘 (Fig.89, Pla.49)

須恵器

坏 (43) 底部の細片で、高台径9.60cmを復原する。外底はへつ切り後高台を貼り付け、内外面はヨコナデである。

(4) 小結

今回の確認調査は試掘調査で確認されていた古代官道の規模や構築状況が焦点であったため、調査は遺構検出を行った後に主要な遺構にトレンチを入れることとした。調査の結果、遺構検出面で道路状遺構4路、溝7条が認められた。以下は、主要な遺構について概要する。

溝

調査区内の中央部からは複雑に切り合った溝が検出され、その大半は溝の規模から流路と捉えられる大溝であった。当遺跡から確認された溝について説明する前に、まず周辺の地理的視野から概観することとする。

当遺跡は標高13.5m位の扇状地性低地に立地しており、当遺跡の北方約150mでは人工河川の山ノ井川が西流している。山ノ井川については「筑後市史」(註1)に詳細が記されており、このことは「徳久中牟田遺跡」(註2)において概略されているところであるが、今一度、市史の内容を要約しておく。

東方に隣接した八女市から筑後市に広がる扇状地性低地は、矢部川の河床より高いために水田の灌漑用水が取水できなかったようで、その排水路・灌漑用水路として人工的に造られた河川であったことがわかる(人工河川は山ノ井川の他に筑後市西部を西流する花宗川があり、同じ機能をもったクリークも整備された)。としながらも、扇状地性低地の地域は河川の増水や洪水による個方侵食力(河川を刻る力)によって、分流或いは乱流状態になった自然河川があったと推定されている。

このことから、当遺跡で流路と捉えられる一連の溝は、山ノ井川の前進である自然河川であった可能性が考えられる。

調査では複雑に切り合うSD29・31が確認された。当遺跡は北東―南西方向にやや蛇行する溝で、出土遺物から弥生時代に比定され、その規模からは流路として機能していたことが窺える。更に、調査区内中央部のやや南よりで確認されたSD25・26は、出土遺物から中世の溝である可能性が考えられる。中世の溝といえば、当遺跡の東方約150m離れた徳久中牟田遺跡で、北東―南西方向を直線的にのびるSD010(溝の下層は12C後半―13C前半に比定)が確認されており、このSD010を西方に延長させるとSD25・26付近を通過することが想定される。

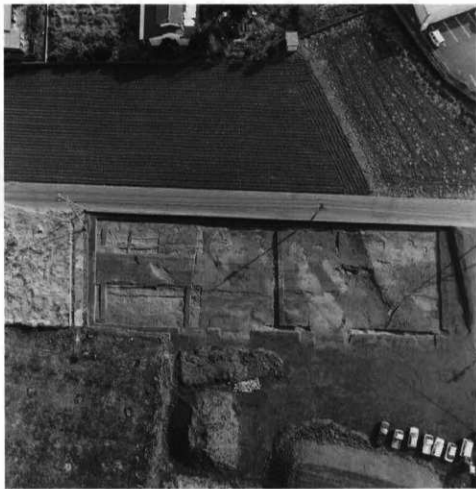
道路状遺構

前述したとおり、調査区内からは道路状遺構に付設する圳溝、路盤、路床等を顕著に確認することができた。道路状遺構は、側溝の状況からSF102・103・104の3路、路盤や路床の状況から1路(SF100とSF101)を復原することができる。道路状遺構の規模は、側溝の切り合い関係から縮小傾向を示しており、遺構の古い順にSF104→SF103→SF102→SF100・101と変遷を辿ることが予想できる。当道路状遺構を筑後市南部に位置する鶴田中市ノ塚遺跡で確認された道路状遺構と比較すると、SF104は「1SF500・3SF200・4SF100」の規模に相当すると考えられることから律令期に整備された古代官道(西海道)と

想定される。同様に、SF103は「1SF510・3SF210・4SF110」、SF102は「1SF520・3SF220・4SF120」、SF100・101は「1SF530・3SF230・4SF130」に相当し、各道路状遺構における延長部として捉えることができる。道路状遺構は、遺構の性格上、遺物を殆ど認めないケースが多いが、今回確認した道路状遺構西側側溝の上層にあたるSD016からは、8C代を主体とする遺物が多く出土した。道路年代を特定するにあたっては貴重な資料といえ、今後の研究の参考資料として提示できよう。

【図】

- 1 『筑西市史一巻(巻)』 筑西市 〔平成9年〕
- 2 『徳大寺町遺跡調査報告書 第99号』 筑後市教育委員会 〔平成9年〕



山ノ井川口遺跡調査区全景（空中写真：左が北）



山ノ井川河口遺跡北部遺跡状遺構（空中写真：上が北）



山ノ井川河口遺跡南部遺跡状遺構（空中写真：上が北）

IV.まとめ

今回の報告は、筑後市内の中央部を南北方向へ直線的に延びる道路状遺構（古代官道）に焦点をあて、それに伴う関連遺跡の調査成果を集成したものである。調査成果は、古代の道路状遺構のみならず、鶴田中市ノ塚遺跡では中世の獨立柱建物、井戸、溝、土坑等といった遺構とともに国内外から持ち込まれた遺物の搬入品や在地の遺物が認められ、また、山ノ井川口遺跡では弥生時代と中世の流路を確認、各期における土地利用の実態や生活の一部を垣間みることができた。

本来なら、各遺跡から確認された個々の遺構や遺物については多岐にわたって検討しなければならないところであるが、時間的制約と紙面上等の理由から、ここでは主要と思われる古代の道路状遺構と中世の集落について概略する。

1. 道路状遺構について

先述したとおり、鶴田中市ノ塚遺跡（第1・3・4次調査）、山ノ井川口遺跡からは古代の道路状遺構が検出された。この章では、まず主体である古代官道「西海道」を概要し、確認された一連の道路状遺構について若干の所見を加えることとする。

(1) 筑後国の古代官道

はじめに、律令体制下における古代の駅路について概略する。

古代の律令国家は「五畿七道」に全国の地域を区分し、支配していたとされ、「五畿」は山城・大和・河内・和泉・摂津の諸国、「七道」は東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の諸道を指す。七道（駅路）は都と地方を結ぶ道路の名称であるとともに地方における呼称でもあり、現在の日本の行政区画や道路体系の骨格となったといっても過言ではない。律令国家は、駅路を中心とした「駅制・伝制・烽制」（註1）などの通信制度を確立させることで、地方における行政システムを徹底させた。「養老令」によると、駅路には30里（約16km）ごとに駅家が置かれており、駅馬が配置されていたとある。重要度や頻度に応じて「大路・中路・小路」に区分されており、駅馬は原則として「20疋・10疋・5疋」が配置されており、大路は「山陽道・西海道の一部（20疋）」、中路は「東海道・東山道（10疋）」、小路は「北陸道・山陰道・南海道・西海道の一部と支路（5疋）」である。10世紀初頭に編纂された「延喜式」（巻28 兵部省）には全国の駅伝の所在駅と駅馬数が記されている。

さて、現在の九州に相当する西海道は、外交や国防の要地として大宰府に統括され、駅路は大宰府を中心として各国府に通じていた。筑後市が所在する筑後国には「御井・葛野・狩道」の3駅家名が「延喜式」にみえる。3駅家は筑後～肥後国府間の駅路に配置された駅のことで、各駅には5疋の駅馬が配置されている。筑後国に配置されていた駅路や駅家の所在については、近年の研究や発掘調査成果などの蓄積によって、今日その概要が明らかにされつつある。

次に、筑後国における研究史について概略する。古代道路の研究に関しては、明治の初めに全国的な駅路網の復原を想定してまとめられた吉田東伍氏の『大日本地名辞書』と大槻如電氏の『駅路通』、昭和40年代に藤岡謙二郎氏を中心とする24名の歴史地理学研究者らによってまとめられた『古代日本の交通路』（註2）等がある。先学諸氏らによって盛んに行われた研究史の中で、筑後市周辺における研究が画期を迎えたのは1970年代になってからである。著名なものとしては、1972年に日野尚志氏が『筑後国上表駅家について』（註3）、1978年に木下良氏が『「車路」考』（註4）、1983年に松村一良氏が『筑後地方を概観する古代駅路』（註5）等を発表し、歴史地理学的観点による地名・地形・遺物等を参考として古代の駅路と駅家を想定した。

日野尚志氏は酒井田（現在の瀬高町）の光明寺創建者である僧行基が橋や築堤の工事を行っているとして『純日本紀』に記載されていることから、下妻郡と山門郡の郡境にある「行基橋」に注目し、駅路を下妻郡の糸里の里界線上に想定した。更に、『延喜式』や『和名類聚抄』に記載されている葛野駅家を筑後市大字羽太塚付近から下妻郡・三瀬郡境にかけての一带と想定しながらも、推定駅路と推定上妻郡駅家

里界延長線との交点あたりに筑後市大字羽犬塚字和風付近を具体的に想定している。

木下良氏は「舊制早史(資料編)」収録の「明治15年字リズ洞」に記載されている「字地名「車路」「車地」に注目した。「車路」「車地」が示す位置・地形・地影・地例等が一直線上に分布していることから「車路」「車地」を古製路の遺称として捉えた。葛野駅は小学地名である「主ノマヤ」の「マヤ」に注目(駅名=ウマヤ=マヤ)し、筑後市大字羽犬塚字主ノマヤを遺称として想定した。

松村一良氏は木下良氏が想定した製路とはほぼ同一の見解をしたうえで、大字地名である羽犬塚(ハユシヅカ)は「駅岡十塚(ハユマナツカ)」の転訛したものとして捉え、葛野駅家は筑後市大字南津字車路付近を想定した。

以上のように、諸氏は歴史・地理学的研究によって筑後市内の製路(古代官道)を想定している。これまでが研究史を中心に概々整ってきたが、以下は考古学的手法によって行われた調査の成果をもとに概略する。

(2) 筑後市内検出の古代官道及び関連遺跡

まず、本書に掲載していない他遺跡における古代官道の調査事例を記す。

1) 西海遺跡(第2次)

平成9年度に久留米市教育委員会が実施した調査(註6)で、久留米市と筑後市の市境に位置し、当地の平原は小学地名の「車地」である。古代官道跡(注7)は南北方向を示し、西側からはSD3、東側からはSD4の南溝が確認されている。南1線既記に傾平を受けており、整面の土層製茶から前後3層の掘り直りがされている。道幅は溝の芯々間で12.5m→11m→9mと縮小している。雑踏の任意中点座標はSD3(X:27580 Y:-45545)、SD4(X:27580 Y:-45535)である(座標値は報告書に掲載、おいてある平面図から引用した)。

2) 鶴田木塚ノ角遺跡

平成10年度に筑後市教育委員会が実施した調査(註7)で、筑後市の南部に位置する。古代官道跡とさきよ一遺跡状遺構(SF20)は南北方向を示し、西側でSD01、東側でSD05の側溝が確認されている。側溝からは8C以後半を比定する遺物が出土しており、周辺の土坑(SK02)からは黒書土器の須臾器(壺;「林家」ではないかと推みとれる黒書土器)が認められている。側溝間の道路路面にあたる部分からは、門方位を示す溝(SD10)が検出されているが、道路状遺構との関係はわからぬ。側溝の任意中点座標はSD01の1部(X:21760 Y:-45960)、南端(X:21680 Y:-45949)、南端(X:21680 Y:-45954)である(座標値は報告書に掲載、おいてある平面図から引用した)。

3) 鶴田中ヶ池遺跡(第2・5次調査)

第2次調査は平成10年度、第5次調査は平成11年度に筑後市教育委員会が実施した調査(註8)で、筑後市の南部に位置し、鶴田木塚ノ角遺跡の南側に当たる。古代官道跡とされる道路状遺構として、第2次調査では不明瞭、第5次調査では東側の側溝と思われる南北溝(SSD040)が検出されている。更にSSD040の西溝からは南北溝(SSD045)が検出され、須臾器(壺)、土師器(坏)等の古代の遺物が認められている。第2次調査区からはSSD040の南延長部と認められる溝が検出されているが、溝は北から南西方へ大きくカーブしていることから直線的に延びる古代官道(遺)区とするところが考えられ、相互的に特定できないう状況である。SSD040の任意中点座標は(X:21505 Y:-45959)である(座標値は報告書に掲載されている平面図から引用した)。

4) 羽犬塚中遺跡

平成3・8・13年度に筑後市教育委員会が実施した調査で、筑後市の中央部、小学地名である「車路」「主ノマヤ」の西側に位置する。奈良～平安時代を主体とする打土器・土師器が検出されており、土坑からは黒書土器である土師器(皿・坏)が多く出土している。黒書土器の一半は「東」字と書かれており、2SK170からは「□那付葛野」(表裏土器裏側面・註9)字と読みとれる土師器(坏)が1点出土している。当遺跡は木下良氏、松村一良氏が想定されている「葛野駅家」付近であることから、今後の研究においても注目される遺物である。

以上の調査成果でも明らかであるように、筑後市内における想定駅路上の各遺跡で確認された道路状遺構は、両側に側溝を呈する道路が主体であり、道路の路面・路盤・路床といった部分は、立地状況等に応じて様々な様相を呈していることが明らかになった (Tab.1)。また、道路の規模を示す道路幅員は、側溝の切り合い関係から後世に比べて徐々に狭まっていることが確認されていることから、律令体制の衰退に伴って道路が縮小していったことが窺える。

さて、今回の調査を振り返ると、鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川口遺跡でも同様のことが窺えた。主として3~4路の道路を復原することができ、徐々に道路幅が狭められながら道路の造成、補修等を行っていることが明らかになった。最も古い段階の道路状遺構は、鶴田中市ノ塚遺跡では1SF500・3SF200・4SF100、山ノ井川口遺跡ではSF102が該当し、道路幅員は側溝の心々間で10.00~12.10mを計測する。古代官道は、全国的な調査事例から駅路の幅度に応じて7・9・11mの道路幅員であったと推測されていることを踏まえると、計測値に若干の誤差は生じているもの、および古代官道に近似した数値を示しているものと捉えることができる。想定駅路と調査で確認された道路状遺構の比較検討については幅を改めることとするが、現時点で古代官道に該当するとみられる道路状遺構は、市北境にあたる久留米市で1箇所、筑後市中央部で1箇所、南部で6箇所が確認されていることになる。先述したが、木下良氏、松村一良氏が葛野駅家に想定している筑後市大字羽犬塚では、古代官道に関連するとみられる遺構と葛野駅家に関連した遺物が認められていることや、久留米市域では想定駅路から古代官道に該当するとみられる道路状遺構が32箇所以上 (計310) で確認されていることから、久留米市から筑後市にかけての駅路は発掘調査によってはほぼ明確化されたといっても過言ではない。このことは、先学諸氏らによって歴史地理学的に想定された駅路が考古学的手法によって実証されたことを意味し、大規模な成果として評価できるものである。しかし、駅路をめぐる立地状況や歴史的環境、駅路の構築・構造・時期等といった課題は未だ明確になっていない状況であるので、全容解明に至るまでには更なる調査事例や研究が必要と考える。

遺跡名	遺跡番号	遺跡位置	東側幅員	側溝間の心々幅	側溝間の心々幅	路面・路盤・路床等の状況
鶴田中市ノ塚 (1次)	1SF500	1SD130	1SD140	約10.00m	約9.20m	不明
	1SF510	1SD135	1SD145	約8.50m	約7.65m	不明
	1SF520	1SD125	1SD145	約7.65m	約7.60m	不明
	1SF530	—	—	—	—	幅約30mの帯状硬化層を確認
鶴田中市ノ塚 (3次)	3SF200	3SD060	3SD090	約10.00m	約9.00m	不明
	3SF210	3SD070	3SD080	約8.50m	約8.00m	不明
	3SF220	3SD100	3SD080	約7.60m	約7.90m	不明
	3SF230	—	—	—	—	幅約30mの帯状硬化層を確認
鶴田中市ノ塚 (4次)	—	—	4SD000	—	—	不明
	4SF100	4SD005	4SD005	約11.00m	—	不明
	4SF110	4SD070	4SD080	約9.20m	—	不明
	4SF120	4SD095	4SD075	約8.10m	約7.50m	不明
	4SF130	—	—	—	—	幅約30mの帯状硬化層を確認
山ノ井川口	—	—	—	—	—	遺構状況、樹立状況、土質の調査等を確認
	SF101	—	—	—	—	遺構状況、樹立状況、土質の調査等を確認
	SF102	SD020	SD001	約6.50m	—	不明
	SF103	SD022	SD027	約8.00m	—	不明
	SF104	SD018	SD017	約12.10m	—	不明
西海遺跡 (2次)	SF1	SD3	SD4	約12.50m	—	不明
	SF3	SD3	SD4	約11.00m	—	不明
	SF1	SD3	SD4	約9.00m	—	不明
鶴田本屋ノ角	SF20	SD01	SD05	約12.50m	—	遺構を確認
鶴田千ヶ峯 (5次)	—	—	5SD040	—	—	西端で遺構を確認

Tab.1 筑後市内における想定駅路上の道路状遺構一覧

(3) その他の道路状遺構

古代の道路状遺構のみならず、市内からは各時代の道路状遺構が検出されている。事例としては板橋かであるが、ここでは筑後市内で確認されているその他の道路状遺構について列挙しておく。

1) 横溝遺跡

平成21年度に筑後市教育委員会が実施した調査（註11）で、筑後市の中央部やや西より北位置する。当遺跡からは中世の道路状遺構として東西及び北・南を示すSF200とこれに連結した東西方向のSF190が確認されている。片側ないしは両側に溝溝を築出して、軌、道路中央部の路面にあたる部分には砂や小石が敷き詰められている状況で、波板状凹凸表面も検出されている。更に、一部において硬化面や硬化土が確認されており、道路は3期の変遷が考えられている。

2) 久壽今町遺跡

平成9年度に筑後市教育委員会が実施した調査（註12）で、筑後市の東端に位置する。当遺跡では、道路状遺構に関連した施設と思われる連続した波板状の土坑が4群検出されている。出土遺物は確認されていないため遺構の時期は不明であるが、古代の道路上から検出されているので、古代以降の遺構として捉えられる。検出状況としては2種類があり、連続した波板状の土坑が溝内に配置されるもの、路面として捉えられた硬化面及び硬化土の下部に連続した波板状の土坑を呈するものがある。

3) 久重緒打遺跡

平成12年度に筑後市教育委員会が実施した調査（註13）で、筑後市の中央部やや西より北位置する。当遺跡では、溝状遺構が検出さる。溝は土質が硬く、土質は硬化面及び硬化土、溝底からはバラスや小石が敷き詰められている状態を確認されていることから、雨菜排水または道路状遺構の性格が考えられている。溝の一部であるSD10からは13C代の遺物が認められている。

(4) 道路状遺構の名称

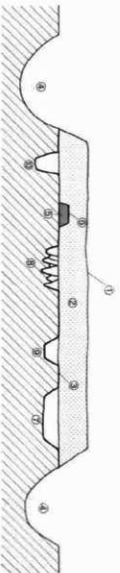
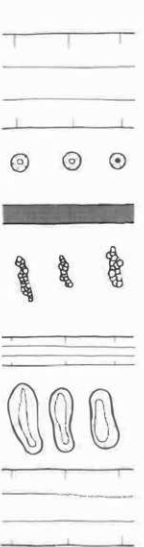
最後に、本書に使用した道路状遺構に付設する各遺構の名称について記載しておく。

近年の発掘調査において、道路状遺構に関する事例報告は全国的に急増してきている。しかし、道路状遺構は他種遺構の事例に比べると非常に少ない状況で、調査事例は未だ発展途上といったところである。

さて、「道路」は道路に付設する各パーツ類によって構成されていることは周知のとおりである。各パーツ類は現代の道路に置き換えると路面・路床・路帯等指し、現代の道路における各パーツ類の名称は全国的にはほぼ確立されている。ところが、古代の道路に関しては時代を経て様々な施行によって遺存していることから、そのパーツ類については遺存状態にあわせて名称が用いられており、現在のところ統一した名称は与えられていない。こうしたことから、今回確認された道路状遺構を記載するにあたっては、付設する各パーツ類（遺構）の名称を独自で設定して、報告する。また、今回使用した用語は、あくまで本書に掲載した道路状遺構を指すために一時的に設定したものであり、また用語説明においても現場で確認される遺構の状態を明確に伝えられるものとなっていないことは十分承知してきている。こうした状況を踏まえて、敢えて独自で設定したところであるが、今後は遺構の状態を的確に示すことのできる名称とその説明を追加、補足していくこととしたい。

道路状遺構に付設する遺構の名称及びその説明（Fig.9）

- ①路面・・・道路の上端面を示す
- ②路床・・・路の下部を示す、道路と地山の境界面にあたる
- ③路盤・・・路面と路床の間にあたる土・砂・石等で人為的に構成された土層を示す
- ④側溝・・・道路の脇に備えられた溝状の水路を示す
- ⑤硬化土・・・土・砂等が硬く締まってできた土層を示す
- ⑥硬化面・・・硬化土の上端面を示す
- ⑦波板状凹凸表面・・・平面プランが不定形状を呈した窪み状が連続遺構を示す
- ⑧刺突状表面・・・ピット状の裏面が集合した遺構を示す
- ⑨溝状裏溝・・・道路幅員に形成された溝状の裏溝を示す
- ⑩・・・ピット裏溝・・・ピット状を呈した連続する遺構を示す



- ① 塙面
- ② 塙床
- ③ 塙壁
- ④ 塙溝
- ⑤ 硬化土
- ⑥ 硬化面
- ⑦ 差地台凸部跡
- ⑧ 刺突状遺物
- ⑨ 異状遺物
- ⑩ ヒット状遺物

Fig.91 道路状遺構名称図

2. 中世の集落について

この章では、鶴田中世ノ塚遺跡で確認された中世の遺構や遺物について概要とする。

(1) 棚列状遺構・掘立柱遺物

第1～3次調査からは棚列状遺構8列、掘立柱遺物58棟が検出（付図⑤）され、各遺構の規模や方位等はTab.2～5に表したとおりである。これらの遺構は各調査区の中央部から西にかけて集中配置していることがわかり、産線であればY: -45070～-46020の範囲にあたる。

Tab.2～5を各遺構の方位別に見てみると以下のようになる（先述したように第1次調査では産線値に誤りがあると判明したので地図(S=1: 2500)上において補正した）。

棚列状遺構

- ・N-0～5° —W=2列
- ・N-5～10° —W=3列
- ・N-10～15° —W=3列

掘立柱遺物

- ・N-0～5° —W=4棟
- ・N-5～10° —W=19棟
- ・N-10～15° —W=30棟
- ・N-15～20° —W=5棟

次に、Tab.2～4を掘立柱遺物の規模別に見てみると以下のようになる。

小型遺物

- ・1間×1間=6棟（平均床面積=7.74㎡、平均坪数=2.34坪）
- ・1間×2間=12棟（平均床面積=14.73㎡、平均坪数=4.46坪）
- ・2間×2間=2棟（平均床面積=14.79㎡、平均坪数=4.48坪）

中型遺物

- ・3間×1間=19棟（平均床面積=21.68㎡、平均坪数=6.57坪）
- ・3間×2間=8棟（平均床面積=22.82㎡、平均坪数=6.91坪）
- ・3間×3間=1棟（床面積=28.31㎡、坪数=8.5坪）

大型遺物

- ・4間×1間=4棟（平均床面積=35.14㎡、平均坪数=10.65坪）
- ・4間×2間=3棟（平均床面積=41.64㎡、平均坪数=12.62坪）

表04.04 龍田市中区ノ保違踏計測値一覽 (表01.01.05.07.08.09.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34)

建踏番号	座標 (北)	座標 (東)	方位 (座標傾角)	距離 (m)
ISKA00	—	—	N-0° 30' 00" -W	—
ISKA01	—	—	N-5° 30' 00" -W	—
ISKA02	—	—	N-0° 00' 00" -W	—
ISKA03	6.06	3.984	N-2° 00' 00" -W	7.128
ISKA04	6.16	4.016	N-2° 00' 00" -W	7.312
ISKA10	6.34	4.228	N-10° 00' 00" -W	7.964
ISKA11	6.34	4.228	N-10° 00' 00" -W	7.964
ISKA15	4.34	2.62	N-5° 30' 00" -W	5.084
ISKA16	4.34	2.62	N-5° 30' 00" -W	5.084
ISKA20	7.47	4.556	N-6° 00' 00" -E	8.264
ISKA21	4	—	N-75° 00' 00" -E	—
ISKA22	4	—	N-75° 00' 00" -E	—
ISKA23	9.18	6.46	N-11° 58' 46" -W	11.128
ISKA24	37	—	N-75° 47' 11" -E	—
ISKA30	—	—	N-13° 12' 40" -W	—
ISKA31	—	—	N-9° 52' 50" -W	—
ISKA32	—	—	N-13° 12' 40" -W	—
ISKA33	—	—	N-9° 52' 50" -W	—

Tab.2 龍田市中ノ保違踏帯列状違踏計測値一覽

表04.05 龍田市中区ノ保違踏帯列状違踏計測値一覽 (表01.02.03.04.05.06.07.08.09.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34)

建踏番号	座標 (北)	座標 (東)	方位 (座標傾角)	距離 (m)
ISB200	—	—	N-1° 04' 45" -W	—
ISB201	—	—	N-1° 04' 45" -W	—
ISB202	6.030	3.994	N-1° 04' 45" -W	7.178
ISB203	6.030	3.994	N-1° 04' 45" -W	7.178
ISB210	5.820	4.680	N-10° 02' 51" -W	6.416
ISB211	—	—	N-10° 02' 51" -W	—
ISB215	4.300	3.100	N-11° 51' 44" -W	4.400
ISB220	5.070	4.115	N-11° 08' 21" -W	5.240
ISB221	—	—	N-11° 08' 21" -W	—
ISB222	6.030	4.115	N-13° 21' 49" -W	7.232
ISB223	—	—	N-13° 21' 49" -W	—
ISB230	6.300	3.400	N-10° 55' 02" -W	7.130
ISB231	6.300	3.400	N-10° 55' 02" -W	7.130
ISB235	6.300	3.400	N-10° 55' 02" -W	7.130
ISB245	4.300	2.944	N-13° 30' 44" -W	5.264
ISB246	4.300	2.944	N-13° 30' 44" -W	5.264
ISB250	4.070	2.900	N-9° 55' 27" -W	5.142
ISB251	—	—	N-9° 55' 27" -W	—
ISB255	4.854	6.230	N-0° 55' 28" -W	8.004
ISB260	4.710	4.024	N-15° 35' 07" -W	5.954
ISB261	—	—	N-15° 35' 07" -W	—
ISB264	5.664	3.250	N-9° 48' 14" -W	6.474
ISB265	—	—	N-9° 48' 14" -W	—
ISB270	6.110	3.980	N-08° 30' 51" -W	7.374
ISB271	—	—	N-08° 30' 51" -W	—
ISB274	6.300	4.300	N-9° 27' 09" -W	7.596
ISB280	6.310	4.644	N-9° 30' 53" -W	7.610
ISB281	—	—	N-9° 30' 53" -W	—
ISB284	5.914	4.930	N-12° 51' 17" -W	6.854
ISB285	6.044	4.095	N-6° 05' 10" -W	7.250
ISB295	5.110	6.520	N-11° 59' 41" -W	8.444
ISB300	3.800	3.814	N-0° 05' 10" -W	5.412
ISB301	3.800	3.814	N-0° 05' 10" -W	5.412
ISB304	3.300	3.754	N-6° 12' 43" -W	4.454
ISB310	5.244	5.484	N-7° 12' 43" -W	7.374
ISB315	7.334	4.230	N-6° 41' 20" -W	8.104
ISB320	4.814	3.204	N-14° 50' 07" -W	5.714
ISB325	3.700	3.230	N-10° 29' 14" -W	4.930

Tab.3 龍田市中ノ保違踏 (第1次調査)

獨立柱建物計測値一覽

表04.06 龍田市中区ノ保違踏帯列状違踏計測値一覽 (表01.02.03.04.05.06.07.08.09.10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34)

建踏番号	座標 (北)	座標 (東)	方位 (座標傾角)	距離 (m)
ISB310	5.574	2.774	N-15° 33' 54" -W	6.134
ISB315	2.924	3.580	N-6° 53' 35" -W	4.604
ISB320	2.000	4.010	N-13° 45' 38" -W	4.410
ISB325	2.124	4.374	N-10° 45' 45" -W	4.674
ISB330	4.720	3.174	N-9° 37' 57" -W	5.494
ISB335	3.350	4.570	N-14° 30' -W	5.570
ISB340	3.300	4.510	N-17° 45' 31" -W	5.430
ISB345	4.340	3.900	N-12° 53' 70" -W	5.820
ISB350	4.100	2.900	N-15° 01' 37" -W	5.000
ISB355	5.774	3.880	N-10° 18' 17" -W	6.794
ISB360	4.410	2.000	N-15° 01' 37" -W	4.810
ISB365	7.650	4.374	N-9° 07' 04" -W	8.824
ISB370	9.010	4.124	N-5° 37" -W	9.934
ISB375	5.914	3.024	N-15° 49' 56" -W	6.644
ISB380	6.350	3.310	N-12° 01' 40" -W	7.020
ISB385	6.494	5.190	N-10° 01' 28" -W	7.620
ISB390	5.334	2.664	N-9° 48" -W	6.014
ISB395	5.894	4.114	N-10° 53' 08" -W	7.604
ISB400	3.640	5.084	N-12° 13' 27" -W	5.824
ISB405	2.994	4.954	N-11° 34' 19" -W	5.714

Tab.4 龍田市中ノ保違踏 (第2次調査)

獨立柱建物計測値一覽

建踏番号	座標 (北)	座標 (東)	方位 (座標傾角)	距離 (m)
ISB310	4	1	N-10° 48' 29" -W	5.294
ISB315	6.710	4.180	N-11° 29' 20" -W	8.010
ISB320	7.600	5.18	N-9° 48' 56" -W	9.180
ISB325	4.190	5.830	N-5° 40' 56" -W	7.220
ISB330	6.065	4.035	N-11° 18' 35" -W	7.100
ISB335	7.100	3.590	N-2° 31' 14" -W	8.290
ISB340	6.664	3.660	N-10° 07' 53" -W	7.784
ISB345	6.300	4.850	N-6° 38' 41" -W	7.097
ISB350	3.800	4.960	N-4° 45' 49" -W	6.354
ISB355	3.800	4.160	N-7° 54' 01" -W	4.844
ISB360	3.450	3.060	N-1° 30' 20" -W	4.514

Tab.5 龍田市中ノ保違踏 (第3次調査)

獨立柱建物計測値一覽

この他に1棟が計測不能で、2棟が南北軸で間敷が異なるため、上記からは除外した。

以上のことを整理すると、棚列状遺構と掘立柱建物とが集中していることがわかる。更に、各掘立柱建物の平均柱間隔は南北柱間 = 2.249m、東西柱間 = 3.073mを計測することから、これを現在の尺数(1尺 = 0.30303m)に換算すると南北柱間が7尺寸、東西柱間が10尺寸(計測値には若干の誤差が含まれている)となる。このことから、当該地から確認された掘立柱建物は、東西軸と南北軸で柱間の長さがいちなになっていたことが数個から読みとれる。掘立柱建物を規模別にみると大型建物は母屋、中型建物は母屋・庫裏・倉庫、小型建物は倉庫・作業小築等としての性格が想像されるが、第1次調査で確認された3回×3回の総柱建物(1SB310)は、物居棟であった可能性も考えられる。

(2) 井戸

当該地内からは13基もの井戸が確認されており、当時積極的に井戸の開削が行われていたことが窺える。筑後市域における地下水については『筑後市史』(注12)に詳細が記されている。これによると、筑後市域における地下水を含む地層は一般的に第四紀層といわれており、筑後平野の洪積台地・扇状地・窪地・三角州性低地は地下水が極めて豊富とされる。筑後市の南端を西流する矢部川(当浦津から南へ9km)の流氷は地下水の集給源で沖積層の砂礫層中を流動する自由地下水となっている。筑後市域におけるボーリング調査では、当該地区は極めて浅い帯水層が存在していることが明らかにされていることから、当遺跡から確認された井戸は比較的良好掘削で湧水を認めたことと想定される。このように、第2次調査において、重機を使用した井戸の断面削り調査(2SED10)でも実証されている。このように、当該地はこうした豊富な地下水に恵まれた良好な立地であったことは明らかであり、今回確認された井戸の配置状況を見ても北西から南東方向へはほぼ直線的に分布していることがわかる。これは地下水の道、即ち水脈を示唆しているものと推測できるところから、当時の人々が水脈位置をほぼ正確に把握していた可能性が考えられる。

(3) 中世集落の位置と環境

掘立柱建物群を中心とした関連遺構は出土遺物は出土遺物は中世中～後半を主体としていたことが考えられる。検出遺構の種類や配置状況からすると、当該期にみられる館跡が連想される。中世前期に関連した遺構はこれまでの発掘調査によって市内で数件が確認、報告されているところであるが、ここでは今回確認された中世集落が望みどりのような立地状況であったのかを簡単に概略することとする。

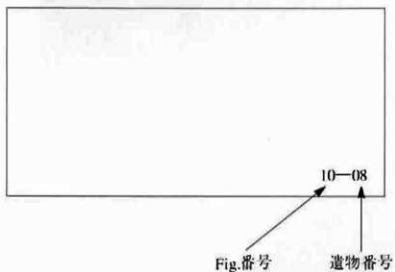
詳細な時期は不明であるが中世の筑後市域は、概ね北部を上妻郡飯川庄、南西部を下妻郡水田庄、南西端部を下妻郡下妻庄、南東部の一部を長田庄が統括していたことが知られている。当遺跡は市内の南西部、Fig.92(注14)に見える尾島付近に位置していることから、関連があると思われる庄園は水田庄と長田庄である。地図上では、当該が所荘園のちようど中間にあたることから、どちらに含まれていたのかは特定できないうところであるが、何れにしても両荘園の境界付近に位置することから緊密な土地域であったことが窺える。

さて、前文において掘立柱建物群の内、総柱建物(1SB310)がその規模から物見構である可能性が考えられるとしたが、こういった背景からするとその存在の可能性も十分に考えられる。更に、掘立柱建物群の東端からは当該期の南北流が5箇所検出されており、一連の溝が集落を囲んでいた区画溝と考えるならば外敵から守るための防衛施設であったことも推測される。あくまで推測の域を脱していないが、当遺跡から確認された大規模な掘立柱建物群は、こういった状況下の中で運営された集落であったことが窺える。

PLATE

凡例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。





調査区全景
（空中写真：右が北）



道路状遺構完結状況
（空中写真：南から）



1SE030 検出状況（西から）



1SE040 検出状況（東から）



1SE050検出状況（北西から）



1SE070検出状況（西から）



1SD125・130・135土層観察状況（北から）



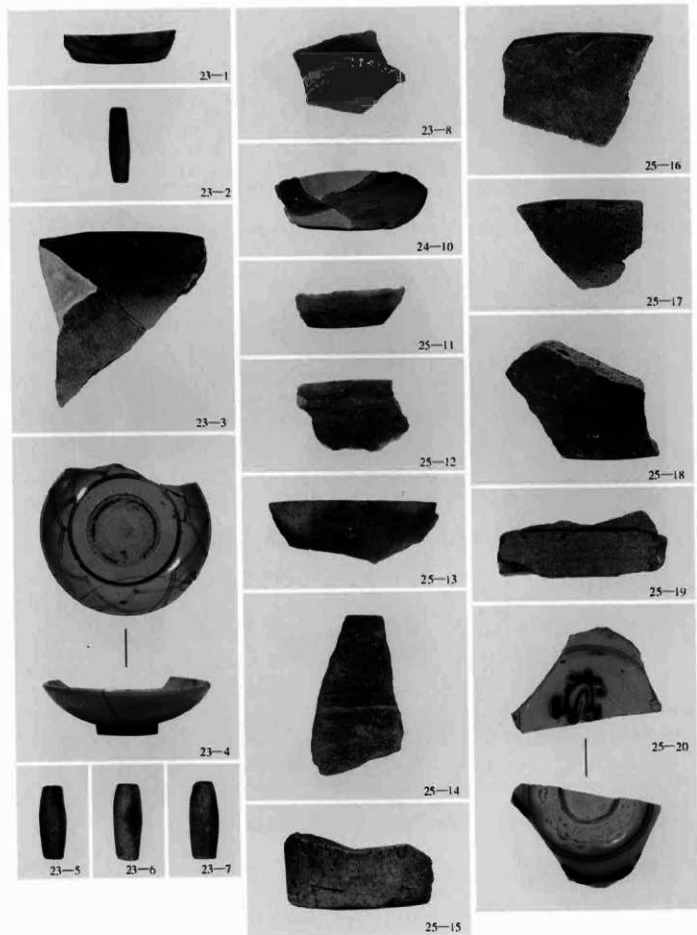
1SD125硬化土確認状況（北から）

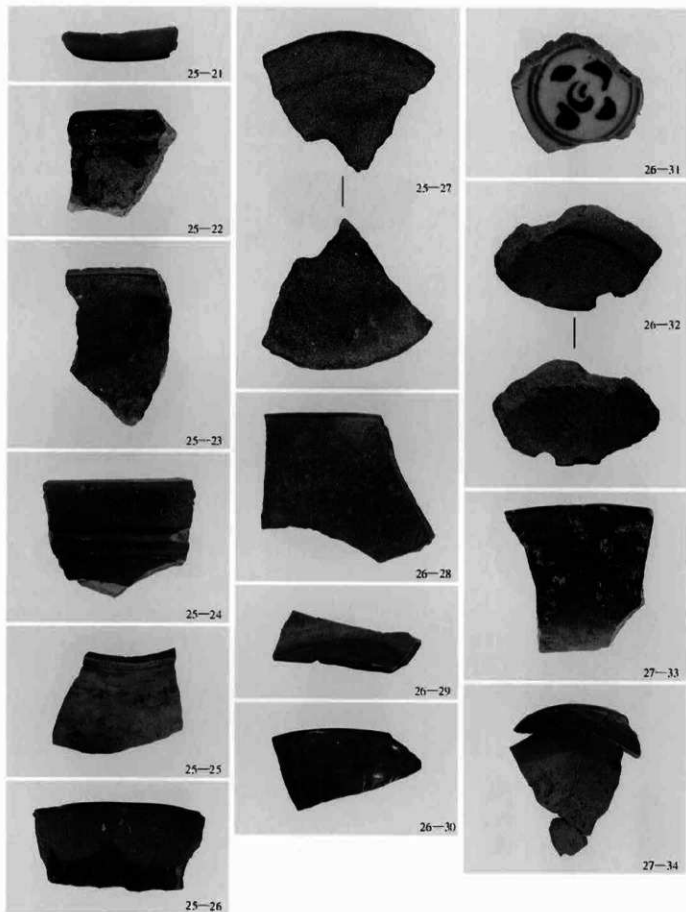


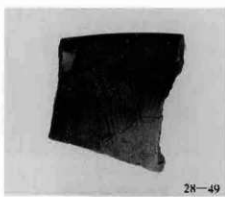
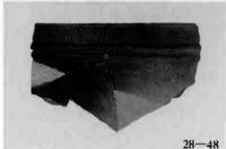
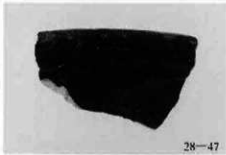
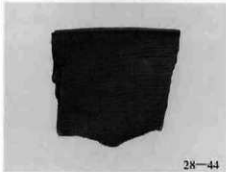
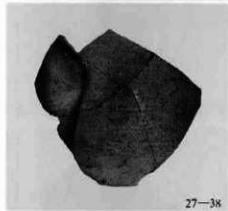
遺路状遺構中央部確認状況（写真右下は帯状硬化面）



1SK105土層観察状況（西から）





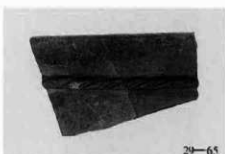




29-56



29-61



29-65



29-57



29-62



29-58



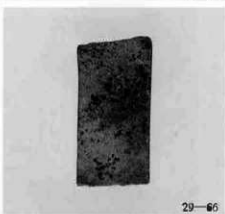
29-63



29-59



29-64



29-66



29-60



29-67



29-68



調査区A全景
(南東から)



調査区B・C全景
(空中写真；右が北)



掘立柱建物群
(空中写真：右が北)



2SB255 (P7) 柱痕検出状況



2SB255 (P8) 柱痕検出状況



2SB265 (P4) 柱痕検出状況



2SB270 (P8) 柱痕検出状況



2SB285 (P4) 柱痕検出状況



2SB285 (P5) 柱痕検出状況



2SB285 (P7) 柱痕検出状況



2SB285 (P12) 柱痕検出状況



2SD050土層観察状況 (北から)



2SD060土層観察状況（北から）



2SD070北ベルト土層観察状況（南から）



2SD070中央ベルト土層観察状況 (南から)



2SD070南ベルト土層観察状況 (北から)



2SE010検出状況（南から）



2SE010土層観察状況（北から）



2SK030遺物出土状況 (東から)



2SK035遺物出土状況 (西から)

2SK065完掘状況 (南から)



2SK075完掘状況 (北から)

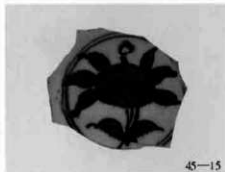
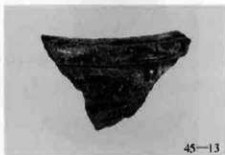
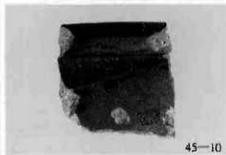
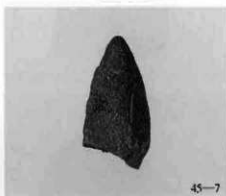


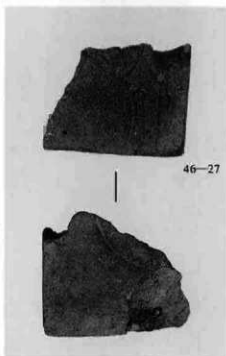
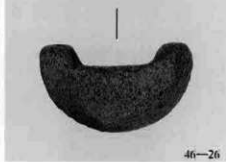
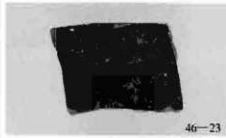
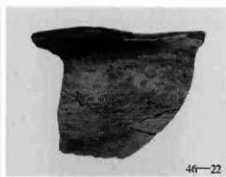


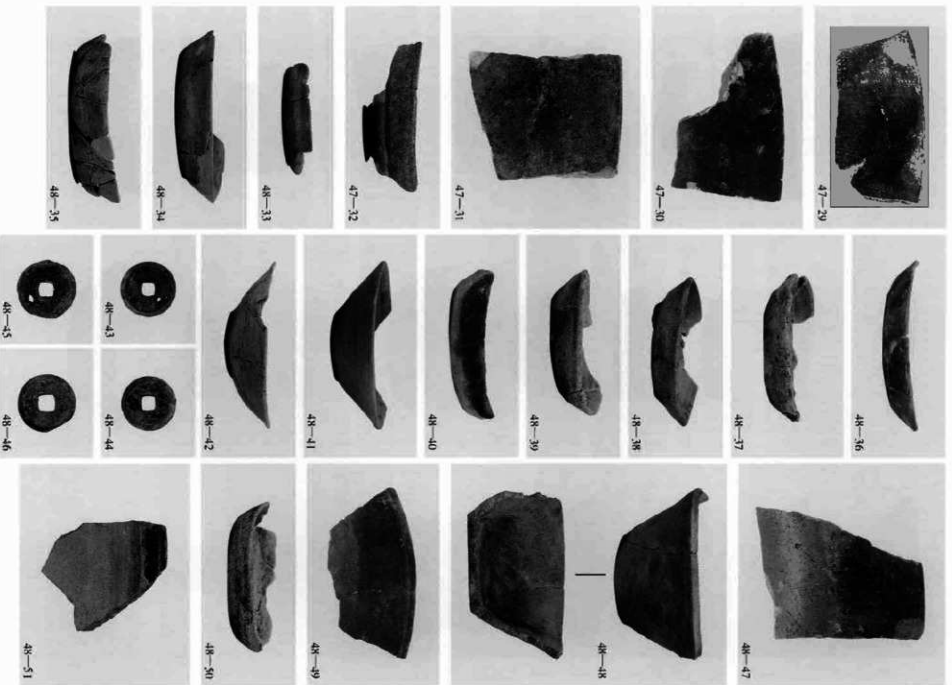
2SK076遺物出土状況（南から）

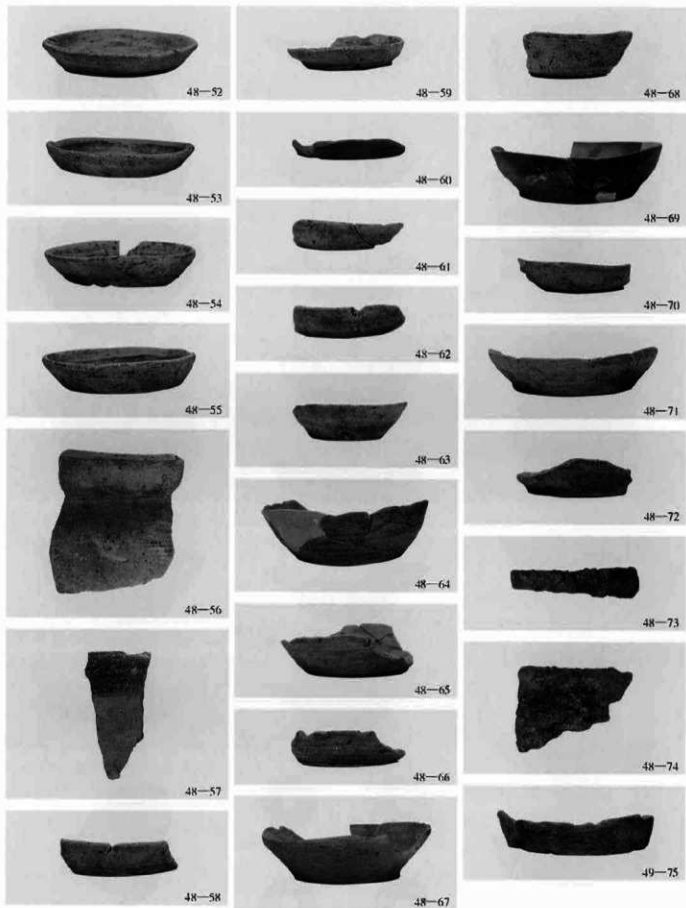


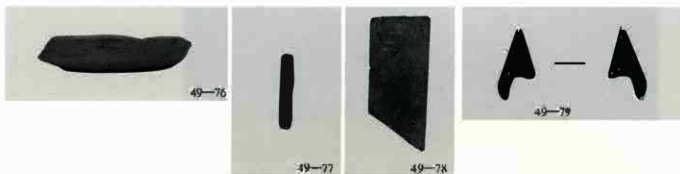
2SK105遺物出土状況（東から）



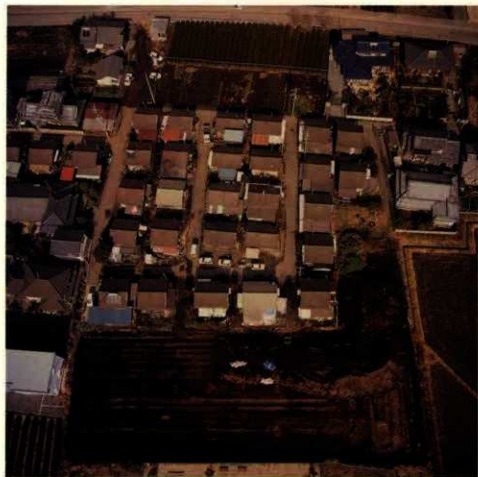


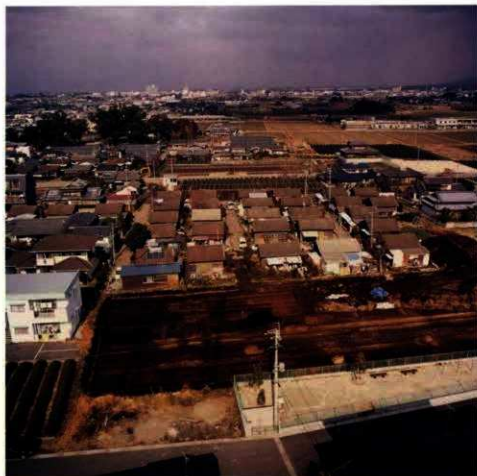






鶴田中市ノ塚遺跡 (第3次調査)





道路状況摸検出状況
(空中写真：1層から)



3SD001 完掘状況 (北から)



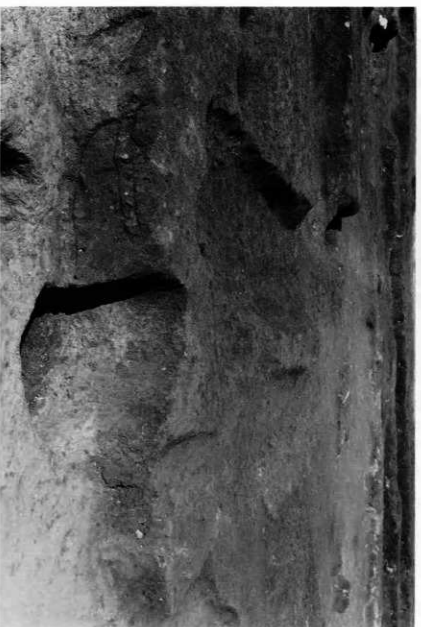
3SE020検出状況（東から）



3SE045検出状況（東から）



道路状遺構完結状況 (南から)



溝状礫化石埋蔵状況 (北から)



帯状硬化面検出状況（東から）



帯状硬化面検出状況（斜上から）



道路状遺構西側側溝 (北壁) 土層観察状況 (南から)



道路状遺構西側側溝 (南壁) 土層観察状況 (北から)



道路状遺構東側側溝（北壁）土層観察状況（南から）



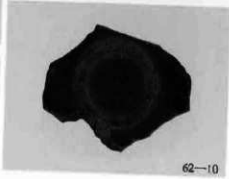
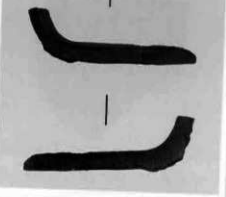
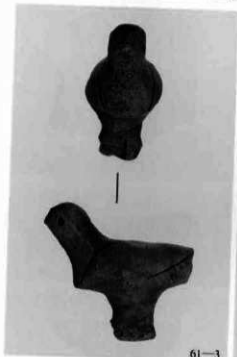
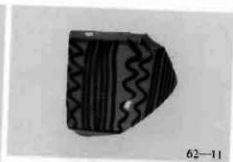
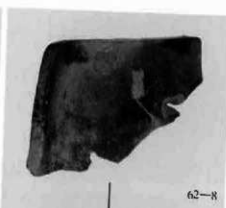
道路状遺構東側側溝（南壁）土層観察状況（北から）



3SK030完掘状況 (東から)



3SK055完掘状況 (西から)





63-16



63-21



64-25



63-17



63-22



64-26



63-18



63-23



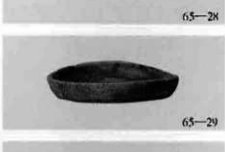
65-27



63-19



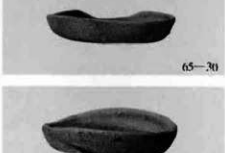
63-24



65-28



63-20



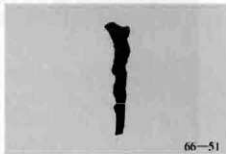
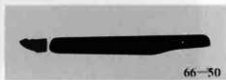
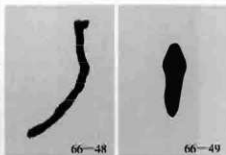
65-29



65-31



65-30





調査区全景
(空中写真：上が北)



道路状遺構元摺状況
(空中写真：南から)



4SE011確認状況（西から）



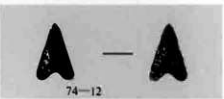
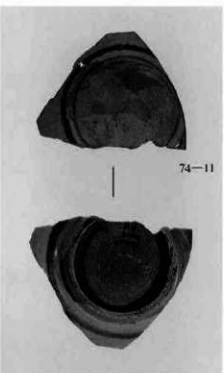
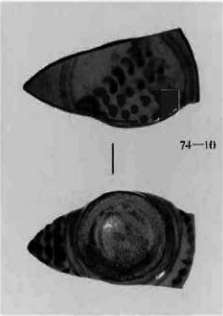
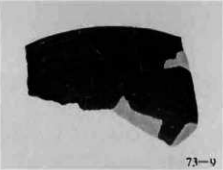
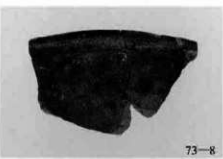
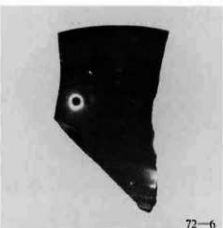
4SK030遺物出土状況（東から）

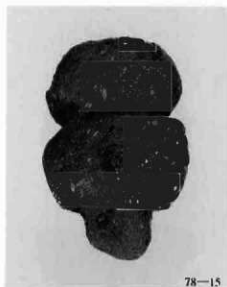


4SK055横出状況 (東から)

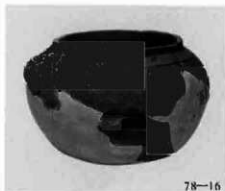


4SK060横出状況 (東から)





78-15



78-16



78-16



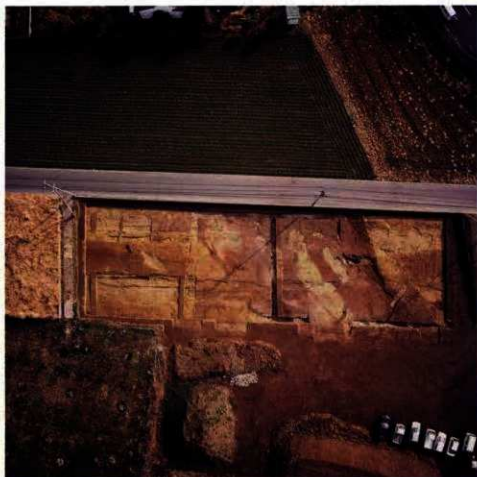
鶴田中市ノ塚遺跡 (第5次調査)

調査区全景
(空中写真：右が北)



5SE1検出状況（東から）





調査区全景
(空中写真：左向き)



道踏状遺構検出状況
(空中写真：南から)



道路状遺構（北部）検出状況（南から）



道路状遺構（北部）西側側溝検出状況（南から）



道路状遺構（北部）東側溝検出状況（南から）



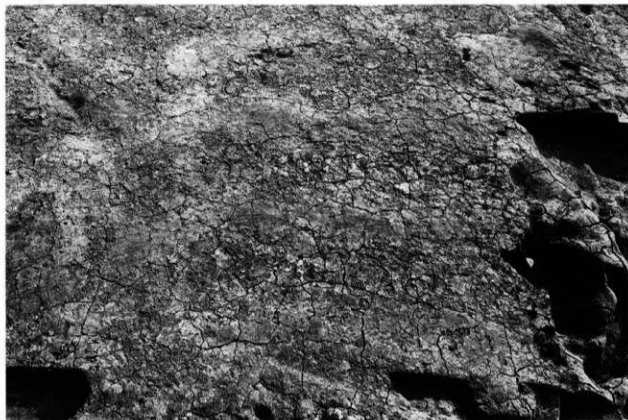
道路状遺構（南部）土層観察状況（北から）



刺突状痕跡①検出状況 (北から)



刺突状痕跡②検出状況 (南東から)



刺突状痕跡③検出状況（北から）



刺突状痕跡④検出状況（北から）



刺突状痕跡⑤・掻出状況 (西から)



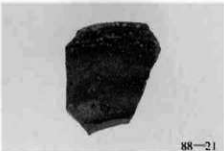
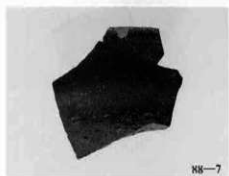
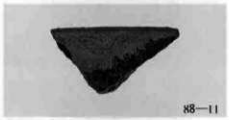
刺突状痕跡⑥・掻出状況 (北から)



道路状遺構（北部）路床確認状況（北西から）



トレンチ⑩流木出土状況（東から）

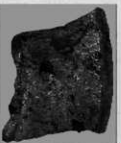




88-22



88-30



89-12



88-23



89-31



89-43



88-24



89-32



89-44



88-25



89-35



89-45



88-26



89-36



89-46



88-28



89-37



88-29



89-40

筑後市内遺跡群Ⅳ

筑後市文化財調査報告書

第45集

平成14年3月31日

筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

(室) 四ヶ所印刷

福岡県日本市大字野田336

発行

印刷



付図① 鶴田中市ノ塚遺跡 (第1次調査) 遺構全体実測図 (1/100)



付図② 蕨田中市ノ塚遺跡（第2次調査）調査区B遺構全体実測図（1/100）

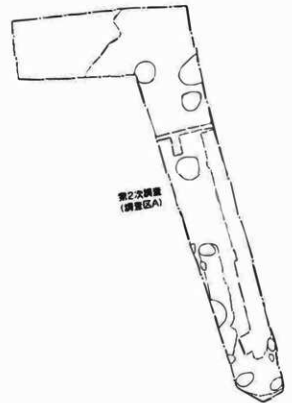
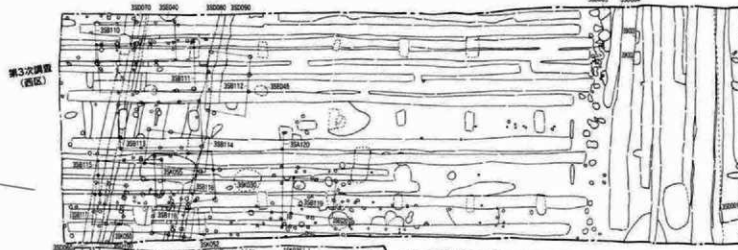




付図③ 鶴田中市ノ庫遺跡（第2次調査）調査区C遺構全体実測図（1/100）



付図③ 鶴田中市/学道跡 (第3次調査) 遺構全体配置図 (1/100)



X-20,800

X-20,750

X-20,700

Y-5,950

Y-46,000

付図⑤ 額田中市ノ導線節略測図 (1/400)